50 周年記念誌「JADR のあゆみ」

目　　次

巻頭言　「JADR のあゆみ」発刊にあたり…… 大谷　啓一　2

歴代会長からのメッセージ

JADR 50 周年を記念して ―今日までのあゆみを振り返って― …… 河村洋二郎　3
回想の JADR…… 田熊庄三郎　5
JADR “ こぼしてはならない話 ”…… 三浦不二夫　7
JADR の思い出…… 佐々木　哲　9
JADR と IADR…… 作田　　守　11
JADR の将来…… 山田　　正　28
思い出すままに…… 黒田　敬之　30
JADR の思い出…… 岡田　　宏　36
節目での思い出…… 奥田　克爾　37
想い出と感謝…… 安孫子宜光　39

JADR への期待

IADR から JADR へ期待すること…… 黒田　敬之　41
PAPF の設立と JADR への期待…… 安孫子宜光　42

記念式典報告

JADR 第 50 回大会記念式典報告…… 大浦　　清　44

JADR 各種記録

総会・学術大会開催一覧…… 45
歴代学術奨励賞受賞者…… 46
歴代役員…… 46
歴代会長…… 47
歴代評議員…… 48
歴代名誉会員…… 48
歴代終身会員…… 48
歴代 KADR 派遣者…… 48

IADR 各種記録

Past IADR Unilever Division Travel Awards Recipients…… 49
Past IADR Science Awards Recipients…… 49
Past IADR Board of Directors & Committees Members…… 50
Past IADR Scientific Group Officers…… 52

JADR 年表…… 53
50 周年記念誌「JADR のあゆみ」編集後記……奥田　克爾　54

「JADR のあゆみ」発刊にあたり

JADR 会長　大谷　啓一
(東京医科歯科大学医歯学総合研究科硬組織薬理学分野教授)

このたび国際歯科研究学会日本部会 (JADR)50 周年記念誌「JADR のあゆみ」を発刊することができました。JADR は 1954 年 11 月 6 日に高橋新次郎先生を会長にわずか 16 人のメンバーで IADR の section として発足しました。現在の会員数約 2,200 名を考えると今昔の感があります。歯科医学の進歩に伴い JADR は目覚ましい発展を遂げ今日で 50 有余年の歴史を誇る学術団体となりました。

2002 年 11 月に開催された第 50 回 JADR 総会・学術大会(東北大歯・渡辺誠教授会長)において、JADR 第 50 回大会記念式典が壮厳に行われました。その式典では歴代会長の河村洋二郎、三浦不二夫、作田守諸先生方から記念講演をいただき、さらに山田正先生からは学会功労者表彰の際に代表して御挨拶をいただきました。会長職を経験された先生方のお話はどれも素晴しく、JADR 創設の話から始まり、現在までの JADR の推移、また脈々と流れている基礎分野から臨床各分野までを含む歯科医学の学術集団としての誇りが語られました。歴代会長の方々のお話に出てくるエピソードは、JADR News Letter にも一部記事として掲載されることはありましたが、記録としてまとまったものはこれまでに存在しませんでした。2004 年 11 月に開催された第 4 回理事会において、当時の監事であられた亀山洋一郎先生が、JADR の創立から現在までの記録がないことを危惧され、「JADR のあゆみ」のような記録誌を編さんして残してはどうかとのご発案がありました。幸い予算をやりくりすれば発刊可能であることが分かり、安孫子会長をはじめ理事全員の賛成をいただいて「JADR のあゆみ」を作成することが決まりました。そこで奥田克爾監事を編集委員長にお願いし、鋭意作業を進めて今回無事発刊された次第です。

本書には過去に JADR を代表された先生方により JADR 発足の経緯やその後の発展の様子が詳細に記されており JADR の歴史を辿ることができます。また歴代の役員リスト、総会・学術大会リスト、Hatton 賞受賞者、JADR 会員が就任した IADR 役員リストなど記録として残すことが必要な事項も最大限掲載されています。内容をお目通しいただければ、日本の歯科医学発展のために JADR 創立を意図された先生方の熱気と情熱が素晴しかったこと、その後の発展を支えた会員の努力、2 回にわたる IADR 総会開催の経緯と準備の様子、そして会員の歯科医学発展に対する真摯な姿勢、これらを会員の方々に感じ取っていただけると思います。それが本書発刊の最大の目的です。どうか親しく手に取っていただき、先達の方々の熱意と情熱を知っていただき、今後の JADR 発展の糧にしていただければ幸いです。

最後にお忙しい中、本書に御寄稿いただいた先生方に深謝いたします。

2006 年 1 月

歴代会長からのメッセージ

JADR 50 周年を記念して
―今日までのあゆみを振り返って―

JADR 名誉会員(1973 ～ 1974 年会長)
大阪大学名誉教授
河村洋二郎

はじめに

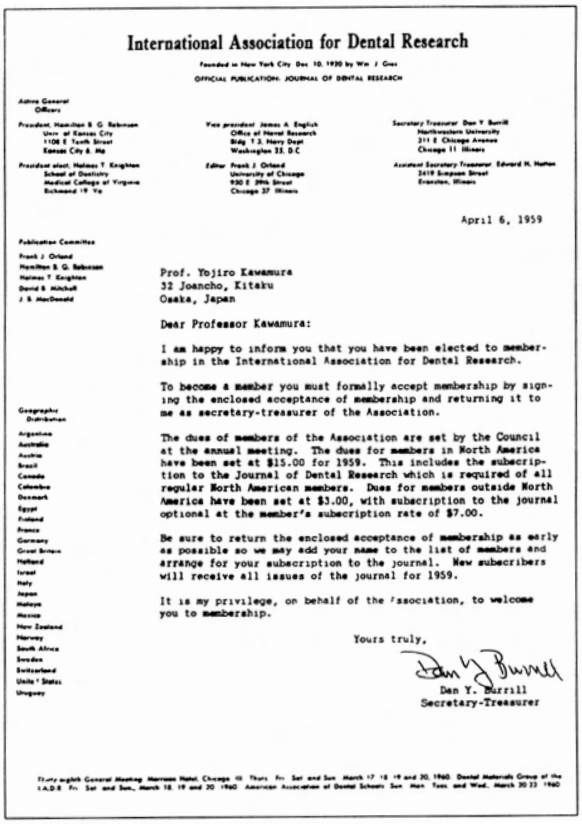
国際歯科研究学会(International Association for Dental Research, IADR)は 1919 年(大正 8 年)に Dr. W. Gies によって米国、ニューヨークで設立された。

大正 8 年当時 IADR では正式に入会するための資格審査がきびしく、英文学術論文の少なかった日本の研究者は入会を希望しても資格審査に必ずしも合格するとは限らなかった。

IADR の中に日本部会がアメリカ本部によって承認されたのは 1954 年(昭和 29 年)のことであって今から約 52 年も昔の話である。しかし、ほとんど積極的な活動はできなかった。

I. IADR と私

筆者は正式にアメリカ本部に入会申請を行って現在から 44 年前の 1959 年(昭和 34 年) 1 月 1 日付で IADR の正会員に承認された(図 1)。現在 IADR の終身会員(life member)であり、日本部会の名誉会員でもあるので、約 46 年近く IADR に関係してきたことになる。



International Association for Dental Research

April 6, 1959

Prof. Yojiro Kawamura
32 Joancho, Kitaku
Osaka, Japan

Dear Professor Kawamura:

I am happy to inform you that you have been elected to membership in the International Association for Dental Research.

To become a member you must formally accept membership by signing the enclosed acceptance of membership and returning it to me as secretary-treasurer of the Association.

The dues of members of the Association are set by the Council at the annual meeting. The dues for members in North America have been set at $15.00 for 1959. This includes the subscription to the Journal of Dental Research which is required of all regular North American members. Dues for members outside North America have been set at $3.00, with subscription to the journal optional at the member's subscription rate of $7.00.

Be sure to return the enclosed acceptance of membership as early as possible so we may add your name to the list of members and arrange for your subscription to the journal. New subscribers will receive all issues of the journal for 1959.

It is my privilege, on behalf of the Association, to welcome you to membership.

Yours truly,

Dan Y. Burrill
Secretary-Treasurer

図 1. IADR 会員として認証されたことの通知

IADR 日本部会の歩み

先に示したように IADR 日本部会が発足したのは 1954 年(昭和 29 年)のことであるが、初代会長は東京医科歯科大学・高橋新次郎教授、事務局長は日本歯科大学・榎恵教授、counselor は京大の美濃口　玄教授であった。この体制で同年 11 月 6 日に第 1 回 IADR 日本部会が東京医科歯科大学で開催されている。東京歯科大学の松宮誠一教授、日本大学歯学部の栖原六郎教授、および東京医歯大の大西正男教授などの諸先生がたいへん積極的に日本部会初期 10 年余にわたって会の発展に尽力された。次の 10 年は、大西正男教授が事務局長、私が counselor で、部会長は任期 2 年で栖原六郎、中沢　勇、山本　巌、松宮誠一、榎恵の諸先生が順次就任され、IADR 日本部会が急速に充実発展した時代といえよう。

さらに次の 10 年は日本部会が、国際的に発展し、日本の歯科医学研究が世界的に高く評価され、国際交流が急速に進んだ時期だと言える。欧米の大学や研究所に留学する先生方が多くなっただけでなく、アメリカでの IADR 総会で日本からの研究発表が多くなった。

前記のように私は日本部会の counselor であり、1964 年以来アメリカでの IADR 総会の理事会に出席するとともに、毎回研究発表もした。そのおかげで、討論を介して親しく話し合える友人がアメリカの大学にたくさんできた。これらの友人の暖かい配慮によって IADR 総会に出席した機会に NIDR（National Institute of Dental Research)や各大学に招かれて学術講演をする機会にめぐまれた。おかげで日本側からの補助のない場合でも渡航費や滞在費をなんとか賄うことができた。当時は 1 ドルが 360 円であったので、今考えてみると同じ学問領域の研究で結ばれた友人たちの暖かい友情と支援に感謝の言葉もなく、たいへん私は幸運であった。

前記のような歯科医学研究を介しての国際交流が、1980 年(昭和 55 年) 6 月に大阪ロイヤルホテル(現在のリーガル・ロイヤルホテル)での第 58 回 IADR 世界大会につながったのだと言える。私が編集し出版した第 58 回 IADR 総会記録集(Chronicle of the 58th IADR General Session)に IADR 日本部会開設の経緯や、日本部会の歴史的歩み(1980 年までの)などが詳細に紹介されているので参考にしていただきたい。この記録集は図 2 にその表紙を示したが、英文・和文で 240 頁にわたる大部のものである。ここでは紙面に限度があって IADR 日本部会について詳細な解説はできなかった。関心のある方はこの記録集を是非ご活用ください。歯科大学の図書館には保存されているはずです。

マイアミビーチで開催された第 54 回 IADR 総会の理事会で 1980 年(昭和 55 年)第 58 回総会を日本で開催することが協議された。

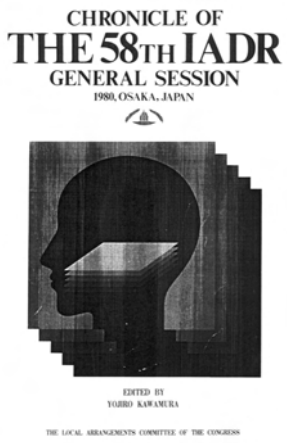


図 2. 第 58 回 IADR 總会記録集の表紙

余談になるが、このマイアミビーチでの IADR 総会で図 3 に示したように、私は 1976 年度 IADR 歯科補綴学賞を受賞する光栄に浴した。

II. IADR 神経科学研究グループについて

Dr. Dubner（USA）および Dr. Sessle（Canada）らの尽力により、その結成が企画されていた IADR の中の神経科学グループ（Neuroscience Group）の結成が 1976 年（昭和 51 年）3 月 23 日 Miami Beach での IADR 理事会で正式に承認された。

研究グループの結成は、15 名以上のメンバーの同意と正式認可手続（グループの目的、発起人メンバーの署名、グループの規約・会則などを IADR 理事会へ提出する）が必要であるが、この神経科学グループは約 60 名の IADR メンバーと 20 名の会以外協力者によって支持され、理事会で正式に承認された。3 月 25 日には第 1 回の神経科学研究グループ会議が開催され、規約が設定された。その詳細を紹介する余裕はないので、重要な項目を 2 ～ 3 示しておく。

(1) 口腔・顎・顔面の機能に対する神経系の役割、および顎・顔面の神経疾患の診断と治療についての研究などに関心のある IADR 会員によって結成されたグループ。

(2) IADR の目的に沿う以外に次の事項を目的としている。

神経科学研究に関する科学的情報の交換、神経科学に関して研究会、シンポジウムを開催して情報交換につとめる。口腔・顔面の神経科学研究成果についての出版、若手研究者にこの部門の研究に関心を持たせる活動。以上などが目的に含まれている。

また、規約に従って役員選挙の結果、次の役員が決定した。

会長 Dr. R. Dubner（任期 1 年、USA）、次期会長 Dr. D. J. Anderson（任期 1 年、England）、事務局長 Dr. B. J. Sessle（任期 3 年、Canada）、counsellor Dr. Y. Kawamura（任期 2 年、Japan）。

以上は現在より 30 年以前昔の話であるが、IADR 活動についての理解に役立てば幸である。なお詳細は「歯科展望」48 巻 4 号、1976 年（昭和 51 年）10 月号に掲載されている。

医　療　新　報　昭和51年3月11日

河村教授に「補てつ学賞」

国際歯科研究学会から通知

IADR（国際歯科研究学会）の科学賞選考委員会から、阪大歯学部長の河村洋二郎教授に対し、「あなたは、世界の補てつ学に非常に貢献したので、科学賞の補てつ学賞を贈りたい」の朗報が、2月末に届いた。

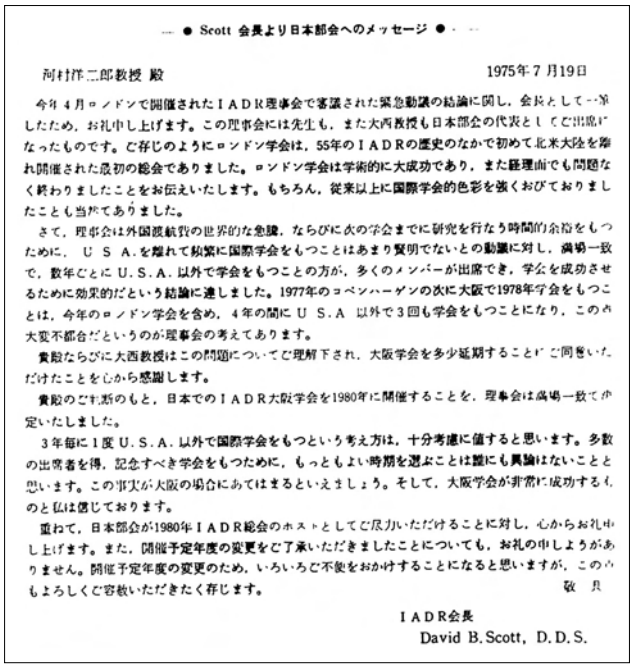
同賞の授与式は、3月23日に米国マイアミビーチで開く IADR 総会の席上で行われる。

河村教授

図 3. IADR の 1976 年度国際歯科補綴学賞の受賞を祝ってマイアミのホテルに日本人参加者が集まったときの写真

おわりに

いずれにしても、年の経過とともに各国の IADR また各地区の IADR 部会は Division または Section としての自治が尊重されるようになり日本部会も 1983 年（昭和 58 年）以来 Japanese Division であるとともに、JADR（Japanese Association for Dental Research 日本歯科医学研究学会）としても発足した。とにかく、世界の歯科医学研究に IADR が果たしてきた貢献と役割は偉大であり、


● Scott 会長より日本部会へのメッセージ ●

河村洋二郎教授 殿　　1975年7月19日

今年4月ロンドンで開催されたＩＡＤＲ理事会で審議された緊急動議の結論に関し、会長として一筆したため，お礼申し上げます。この理事会には先生も，また大西教授も日本部会の代表としてご出席になったものです。ご存じのようにロンドン学会は，55年のＩＡＤＲの歴史のなかで初めて北米大陸を離れ開催された最初の総会でありました。ロンドン学会は学術的に大成功であり，また経理面でも問題なく終わりましたことをお伝えいたします。もちろん，従来以上に国際学会的色彩を強くおびておりましたことも当然でありました。

さて，理事会は外国渡航費の世界的な急騰，ならびに次の学会までに研究を行なう時間的余裕をもつために，ＵＳＡ.を離れて頻繁に国際学会をもつことはあまり賢明でないとの動議に対し，満場一致で，数年ごとにU.S.A.以外で学会をもつことの方が，多くのメンバーが出席でき，学会を成功させるために効果的だという結論に達しました。1977年のコペンハーゲンの次に大阪で1978年学会をもつことは，今年のロンドン学会を含め，4年の間にＵＳＡ以外で3回も学会をもつことになり，この点大変不都合だというのが理事会の考えてあります。

貴殿ならびに大西教授はこの問題についてご理解下され，大阪学会を多少延期することにご同意いただけたことを心から感謝します。

貴殿のご判断のもと，日本でのＩＡＤＲ大阪学会を1980年に開催することを，理事会は満場一致で決定いたしました。

3年毎に1度U.S.A.以外で国際学会をもつという考え方は，十分考慮に値すると思います。多数の出席者を得，記念すべき学会をもつために，もっともよい時期を選ぶことは誰にも異論はないことと思います。この事実が大阪の場合にあてはまるといえましょう。そして，大阪学会が非常に成功するものと私は信じております。

重ねて，日本部会が1980年ＩＡＤＲ総会のホストとしてご尽力いただけることに対し，心からお礼申し上げます。また，開催予定年度の変更をご了承いただきましたことについても，お礼の申しようがありません。開催予定年度の変更のため，いろいろご不便をおかけすることになると思いますが，この点もよろしくご容赦いただきたく存じます。

敬　具

ＩＡＤＲ会長
David B. Scott, D.D.S.

図 4. IADR 会長 Dr. Scott より日本部会へのお礼状

IADR 日本部会が、わが国の歯科医学研究・教育につくしてきた貢献をも無視することはできない。

本誌に主として紹介してきた 1959 年(昭和 34 年)頃までの IADR の解説は、当時の日本には、まだ新幹線はなく、フライトもアメリカへの直行便がなくてハワイのホノルル空港でアメリカ国内線に乗りかえなければならなかった時代である。このような時代の変化によって当時の社会情勢について若い世代の IADR メンバーにはなかなか理解しにくいことも多いと思う。

第 58 回国際歯科学会(IADR)総会は 1980 年(昭和 55 年)6 月 5 日～7 日の 3 日間盛況にかつ順調に運営され多大の成果をあげて好評裡に終ることができた。この学会に種々御支援いただいた各位や各機関に衷心より感謝御礼申し上げる。

6 月 5 日の開会式には常陸宮、同妃両殿下のご臨席を仰ぎ、殿下からありがたいお言葉をいただき、まことに栄誉なことであった。これらの詳細は、先に図 4 に示された IADR 会長 Dr.David B. Scott により書簡にも示されている。このような事情でここでは第 58 回国際歯科学会総会についてはあまり述べなかった。

今後も我が国の歯科医学研究者や歯科・口腔疾患診療従事者が IADR の場を介して国際的に、また国内においても交流を密にして順調に充実発展をつづけられることを祈念して止まない。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

回想の JADR

JADR 名誉会員(1979 ～ 1980 年会長)
東京歯科大学名誉教授
田熊庄三郎

JADR がわずか 16 名の会員をもって発足したのは、1954 年 11 月のことである。そこに至る経緯は、本会ニュースレター 1998-1 に、三浦不二夫先生が書いておられる。そこには親学会である IADR の生い立ちや Journal of Dental Research の成り立ち、戦後間もない頃の日本歯科界についても述べられているのでたいへん参考になる。そのほかに JADR に関する資料がいま手許にないので、正確なことは書くことができない。ただ「IADR 出席記」という私の報告文(東歯同窓会報 1959 年 60 号)と、1983 年恩師松宮誠一先生の退職記念に出された東京歯科病理学教室業績集、および 1990 年に私の退職時に出していただいた論文集があるので、それを参考にしながら JADR との関係を思い出してみることにする。

16 人の JADR 発足会員は、三浦先生によると「国際的に業績顕著な研究者でなければならない」という観点から細心の注意のもとに選ばれたというだけあって、どなたもみな立派な方々で、初代会長には高橋新次郎先生が選ばれてこれに当たられた。そのようにしてできた JADR は若輩にはとても近付けない高嶺の花であったが、幸いに恩師松宮誠一先生が発足会員に入っておられたので、その模様は薄々漏れ伺うことがあった。ただ記憶にあるのは、英語ではじまった某先生の講演が途中いつの間にやら日本語に変わっていたというようなお話しばかりで、具体的にそれがどんな会であったか私は知らない。

JADR が出発した 1954 年の私は、東京歯科医専卒後 7 年経てようやく講師になったばかり、松宮誠一先生の教室で歯の電子顕微鏡観察に熱中していた。手製のミクロトームを用い、苦心の末ようやく象牙質の超薄切に成功したのがこの年であった。歯の観察にはまだレプリカ法が通法とされていた頃と書けば、その頃の研究室の様子も想像されよう。たまたま同年 7 月、第 11 回 FDI がロンドンで開催され、そこに私どもの電子顕微鏡写真が 100 枚ほど展示されたことがあった。その時ぶんから少しずつ海外との情報交換の道が開け、松宮先生がローマの第 12 回 FDI に日本代表として出席されることになり、私はそのお供をつとめさせていただいた。まだプロペラ機の時代で、南まわりでローマまで約 32 時間かかった。その足で私はロンドン継由ワシントンに至り、同年 9 月から 1959 年の 7 月まで、ベセスダの NIH に招聘研究員として、D.B. スコット博士および M.U. ナイレン博士と仕事をすることができるようになった。そのおかげで、1958 年 3 月デトロイトで開かれた第 36 回 IADR 年次総会に誘われて出席した。その模様を書き送ったのが、母校の同窓会報に載った上記の報告である。それによると、会期は 3 月 20-22 日、会場は同市スタトラーホテル。19 日午後の飛行機で行く予定のところ、思いがけずも 20 年ぶりという春の大雪で欠航となり、同日夕刻 6 時頃の夜行列車で出かけた。一等寝台であったが十数時間揺れどおしの上、JADR が高嶺の花なら親学会の IADR はさぞかしすごいだろうなどと想像して一睡もできなかった。着いてみるともう学会は始まっていて、出番に間もない時刻となっていた。「Peritubular matrix in dentin」というのがその時の私の演題で、これが象牙質管周基質の存在を国際学会席上で公にした最初であり、また IADR と私の関係の始まりであった。二百数十の演題のうち日本人のものはこれ一つ。その他に外国からの出題はドイツ、デンマーク、イギリス、フィンランド、プエルトリコなどのものがあった。電子顕微鏡の他に、組織化学、マイクロラジオグラフィー、陰極線ルミノグラムなどの新手法が私の興味を引いた。臨床関係では高速エンジンの研究が話題のようであった。発表形式は日本と大差なかったが、ロビーや廊下での交流が盛んで相互に討論に華を咲かせている光景が、会話もままならない自分には羨ましく見えた。それでもスコット博士の積極的な誘導のおかげで、多くの人にお会いすることができた。その中にはボーデッカー、ベーベランダー、クーリッジ、ビビー、トーマ、アームストロング、ロビンソン、ボイル、フィッシャーというような人々がいた。クーリッジは西村豊治

先生の琺瑯質の構造とう蝕の業績を詳しく知っていて、私を吃驚させたり喜ばせたりした。しかし花沢鼎先生のことはご存じなかったので、デンタルコスモスに掲載された先生の象牙質の構造とう蝕の論文をお伝えした。バンケットは食事と儀式が同時並行的に進み、次期会長にはロビンソン博士が指名されサウダー賞はパッフェンバーガー博士に授与された。急に灯りが消えて可愛い赤ちゃんがスクリーンに映し出され、成長してパブリックスクールに入り、やがてデンタルスクール時代の写真になるあたりから、どうやらあれは彼らしいぞといった私語があちこち聞かれたりし、終いに白髪赤ネクタイのご本人パッフェンバーガー博士に至るという、ユーモアとウイットに溢れた演出で、それはたいへん楽しかった。最終日には口演を聞くのに夢中で、つい帰りの飛行機に乗り遅れる失敗をしてしまった。

翌 1959 年私の帰国した年に、松宮先生が高橋新次郎先生を継いで JADR 第 2 代会長の座につかれた。このころも JADR が高嶺の花であることに変わりはなかった。その時代の JADR 開催の手伝いみたいなことをしたときには、予定時間を大幅に過ぎているのに何時まで経っても、会場である東歯新館会議室に煌々とあかりが灯っていたのを覚えている。まだ JADR が選ばれた会員の小組織に止まっていたのでそんな光景も見られたのであろう。その JADR が、他の学会と同じように演題を公募し、口演時間や討論時間を決めたきちんとした形を取るようになったのはいつの頃であったのか、私の記憶はすでに薄れてしまっている。

松宮先生はその後 1969-70 年にも再度会長に就かれた。その 1970 年、ニューヨークで IADR50 周年記念総会があり、これに出席して祝辞を述べておられる。IADR 総会を日本でという声が聞かれるようになったのはその頃からのことではなかろうか。発足後すでに 15 年も経ていたので、会員も増えていたとは思うが、しかし IADR 総会を引き受けるにはまだまだ弱体というのが本当のところであった。私の場合は滞米中に本部会員となっていたので、そのまま JADR 会員として迎え入れられたのであろうが、そうでもない限り、「業績顕著な研究者」という縛りが何となくはたらいており、これが良い意味にも悪い意味にも、会員数の増加を抑制していたようである。研究者はいても業績を上げるには年月がかかるし、それをどのように判断するかということを考えるとそれも止むを得なかったであろう。それでも 1970 年代にはどうやら少しずつ会員も増え、本部総会への参加者も追々みられるようになった。1972 年ラスヴェガスの年次総会席上で、JADR 会員として私は初めて生物石灰化部門の科学賞を戴いた。あの際にも、日本から参加された二人の方が私と夕食をともにして祝って下さった。このことは今もなおありがたく、はっきりと覚えている。

上のようなしだいで、IADR 総会を日本でとは最初まるで夢のような話であった。それがその後榎恵会長、河村洋二郎会長、大西正男会長を経て 1980 年に正に実現したのである。あのときは同時に ICOB の大会も日本でということになり、それではその方を大西先生が担当し、IADR の方は河村先生がもっぱら担当するということになった。言うまでもなく二つとも名だたる大きな国際学会である。同時にこれを遂行するのは全くたいへんなことであった。とくに心配なのは、JADR 会員数が年々増えてはきていても、しかしその程度の増え方ではとても追いつかないことであった。思い切って門戸を大きく開き、会員数の大幅増加をはかること、そして日本中の歯学研究者が一致してこの壮大な行事の実現に熱意をもって協力してくれること、それが当時の JADR としては切実な問題であった。早速会員倍増のキャンペーンがはじまった。

幸いに河村先生と大西先生の超人的なお力とご努力により、第 58 回 IADR 総会が 1980 年 6 月 4 日から 7 日にわたって大阪ロイヤルホテルにおいて開かれた。これに先んじる 6 月 1 日に第 8 回 ICOB も東京ニューオータニホテルで立派に開催することができた。私はちょうどその時期の JADR 会長をつとめるという光栄に浴した。河村先生が編纂された立派なクロニクルに、その発端から実現までの経過が細大漏らさず余すことなく収載されているはずである。その間の河村先生のお働きには今も頭の下がる思いである。華やかに開会式を終えることができたとき、先生は小躍りして喜ばれたが、先生の思いを拝察して私も胸を熱くした。それに対して私は一体どれ程のことを JADR のためにしてきたのであろうか。今になってそんなことを反省するのである。

帰国間もない頃、医科歯科大学荒谷真平先生の教室のセミナーにお招きいただいたことがある。その時から先生および門下の方々とたいへん仲良くなったが、前後して日本歯科の須賀昭一先生もこれに加わって、お互い熱っぽく話し合うグループが自然にでき上がった。話題の中心は硬組織とう蝕である。荒谷先生と須賀先生はオルガナイザーとして抜群の力を発揮され、このグループを核にこれぞと思われる研究者をまとめて大小のシンポジウムやセミナーが頻繁に開かれた。これが研究者間交流のたいへん良い場となった。大きなものとしては 1966・68 年箱根・小田原、1972 年京都、1977 年賢島での会等があったが、中小の会は各地でひっきりなしにあった。この交流は国を越えて海外にも広がり、IADR や ICOB はもちろん、エナメルシンポジウム、アーテファクトミーティングなど欧米の学会や集会とも毎年のように互いに研究発表をしあうようになった。日本での ICOB と IADR 総会には、これら内外の研究者がそれぞれの研究成果を携えて多数参加して下さったのである。その成功にはそのことがエネルギー源ともなった、そう私は思うのである。そうとすればそのことで、私も JADR に対する役割を少しは果たすことができたようである。

アメリカから帰国した 1959 年に考えたことがある。それは自分の研究室の場所すなわち東京神田水道橋ということである。省線水道橋駅の東隣りはお茶の水で西隣りは飯田橋、医科歯科にも日大にも日本歯科にも直ぐ行ける。そこの研究施設が一体化すれば、ベセスダの NIH 歯学部門

ぐらいの規模の研究はできるのではないか、そう考えたのである。その後母校は千葉県に移転し、間もなく私も定年退職を迎えた。かくてその考えも夢想に終わった。退職後は、余りの人生を自ら楽しむことに忙しく、学会とか大学にはすべて足が遠のいた。JADR にも同様にして過ぎたが、何時か都市センターホールで IADR 会長歓迎の席に案内を受けて出席した。あのときは、ご無沙汰していた須賀先生に会いたいという切なる望みがあったのである。あれが一度だけの終わりで、須賀先生とお会いできたのもそれが最後となった。

それにしても、在職中の内外研究者との上に述べたような交流は、思うだに心躍る悦びである。そんな悦びの時を与えてくれた JADR に、今は心から感謝するばかりである。これからのますますのご発展を祈って止まない。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

JADR “ こぼしてはならない話 ”

JADR 名誉会員(1985 ～ 1986 年会長)
東京医科歯科大学名誉教授
三浦不二夫

平成 14 年(2002 年)の仙台における JADR 第 50 回大会記念式典で私は JADR “ こぼれ話 ” と題して話をした。それは本会の初代会長で、私の恩師でもある東京医科歯科大学名誉教授の高橋新次郎先生が古稀を迎えられた時点で、教科書に書けない秘話とか裏話を矯正 “ こぼれ話 ” という小冊子にまとめて出版して下さった。

そこで、私は先生に似て JADR “ こぼれ話 ” と題して JADR あるいは IADR にまつわることどもを紹介したわけである。

しかし、今になって思い返すと、内容によっては秘話とか裏話として葬ってはならないこともあるのに気付き、ここに “ こぼしてはならない話 ” として「本会 50 年のあゆみ」に残すことにした。

第 1 話 “JDR に投稿した最初の日本人 ”

周知のように歯学研究に関して最も権威ある雑誌は本学会の機関誌 Journal of Dental Research (JDR)である。この雑誌に日本人として最初に投稿した方は、東京医科歯科大学の初代学長　長尾　優先生である。

写真 1. 長尾　優先生

先生は大正 2 年(1913 年)、東京大学医学部を卒業後、同大学医学部附属病院の歯科学教室へ副手として入局し、歯学研鑽の道を歩み始めた。しかし、教室の主任、石原教授の歯学に対する姿勢に疑問を抱き、自ら教室を辞して大正 15 年(1916 年)、米国ペンシルバニア大学歯学部で最先端の歯学を学ぶこととした。当時、日本からの留学生は歯科医専を卒業してから米国の歯科大学の 3 学年に編入できる規約になっていたが、先生の場合は既に大学教育によって医者となり、さらに 2 年の歯学研鑽の履歴を持つことから、留学当初から大学院生扱いの特別留学生として受け入れられたのである。先生は歯科補綴学の権威者、Kirk 教授のもとで 2 年の研鑽を行い、その証として “Comparative Studies on the Curve of Spee in Mammals with a Discussion of its Relation to the Form of the Fossa Mandibularis” という論文をまとめられた。この年、1918 年はニューヨークのコロンビア大学歯学部の Gies 教授と William 教授が歯学分野には最先端の研究論文を発表する雑誌がないことから JDR の発刊へと踏み切った時でもあった。いち早くこの情報を得た先生は、まとめた論文を同誌へ投稿して帰国し、現在の東京医科歯科大学の前身、文部省歯科病院へ勤務されたのである。もちろん、投稿した論文は文句なく受理され、1919 年の同誌、第 1 巻 2 号に目出たく発表された。いわば長尾先生は JDR に投稿した最初の日本人であり、我々会員一同の誇りでもあるのである。

第 2 話 “JADR 生い立ちの記 ”

平成 10 年(1998 年)当時の JADR 黒田会長から “JADR の生い立ち ” と題して Newsletter に投稿して欲しいと依頼された。したがって、ここでは、その概略に多少の説明を加えて記すことにする。

昭和 20 年(1945 年)、戦いに破れた日本は進駐軍の統治下に置かれた。当時マッカーサー司令部は日本の歯科医療の立ち後れを指摘し、いくつかの改善を日本政府に要求した。その 1 つに、それまで 4 年制の専門学校による歯科教育を医学のそれと同じく 6 年制の大学教育に改めるよう勧告があった。それにより、1949 年には歯科医学専門学校は歯科大学または大学歯学部へと昇格した。ちょうどこの年、第 25 代目の IADR 会長、イリノイ大学矯正の教授、Dr. Brodie が在日米軍歯科軍医の年次セミナーに特別講師として来日したので、司令部は日本側の接待役として矯正の高橋教授を指名したのである。

写真 2. Dr. Brodie

そんな因縁から、昭和 28 年(1953 年)に高橋教授がフルブライト交換教授として “ 米国における歯科医学教育と研究の現状視察 ” というテーマで訪米された折には、Dr. Brodie は先生との再会を喜び、何かと貴重なアドバイスをしてくれたのである。就中 “ 日本の歯科教育が

米国と同じレベルとなったからには、研究の場も同等であるので、日本にもIADRの支部を創設すべきである”としてその時の31代IADR会長、ワシントンD.C.のNational Bureau of Standardの Dr. Paffenbargerへ紹介状を書いてくれた。Dr. Paffenbargerといえば —これも不思議な因縁で— 高橋教授が渡米するちょっと前に米国歯科使節団の一員として東京医科歯科大学を訪問されていた。早速、同氏を訪問した高橋教授を快く迎え入れてくれ、IADR日本支部創設案に対して会長として積極的に支援することを約束してくれたのである。

写真3．Dr. Paffenbarger

写真4．高橋新次郎教授

写真5．榎　惠教授

約10ヵ月の滞米生活を終えて帰国された教授は直ちにIADR日本支部創設案を長尾学長に報告した。第1話で述べたようにIADRの創設の意図をよく理解していた学長だけに“これこそ留学の最大の成果であり、我国の歯学研究が世界に繋がる快挙である”と評価し、大学を挙げて創設案を支援することにしてくれた。意を強くした教授は、早速、日本歯科大学の榎教授を補佐役にして創設に着手した。学会の性格から、会員は国際的に業績顕著な研究者でなければならない。全国の歯科大学の研究者に入会を勧誘するにも細心の注意を払ったそうである。

その甲斐あって、昭和29年(1954年)11月6日、東京医科歯科大学においてIADR日本支部の結成式が挙行されたのである。すなわち、榎教授からこれまでの経過報告がなされた後、高橋教授から“アメリカにおける歯科大学の性格について”と題した講演が行われた。次いで、榎教授より日本から推薦した研究者16名が会員として本部に登録された旨発表があり、既に登録されている会員を含めて支部結成の会員数に達したとの報告の後に、会員全員の推挙により初代会長として高橋教授が、また初代事務局長に榎教授が選ばれ、ここに日本支部(JADR)が目出たく誕生したのである。式典にはIADR Paffenbarger会長のメッセージがU. S. Army Hospitalの歯科主任Dr. Oartalによって読まれ、長尾学長が祝辞を述べられた。かくして我国の歯学研究者が世界の歯学研究者に仲間入りしたのである。なお、本会がJADRの結成のための会合で、年末にも近かったために、会員の研究発表は翌年の春、京都大学歯科口腔外科の美濃口教授によって開かれることとなった。また、余談ではあるが、この会合の時、私は卒業後7年目の矯正学教室助手で、式典会場の入り口に置かれた机で受付係をしていた次第である。

写真6．IADR“ハーグ大会”(1986年)の懇親会にて。日本テーブルにゴールドヘーバー会長を迎えて“さくら”を合唱した。
前列左から；須賀JADR 14代会長、眞泉日本歯科医学会会長、ゴールドヘーバーIADR会長、不詳、関教授(神奈川歯大)、青木(日本歯科)、後列左から；花田教授(新潟大学)、小生、木下教授(大歯大)、西連寺教授(日大)、不詳。

第3話　“故眞泉先生の提言”

私は、昭和60、61年(1985、86年)の2年間、JADRの会長を務めさせていただいたが、その後半の1986年にはIADR総会がオランダのハーグで開催されることになっていた。そこで、私は当時の日本歯科医学会の眞泉会長(日本歯科大学薬理学教授)に是非この総会に我国の各専門歯科学会を統合した、いわば日本の歯学に関する研究を統括する立場にある学会であるからには、その会長である眞泉先生にも世界中の歯学研究者が一堂に集って最新の研究成果を発表し合うIADR総会の様相を是非見てほしいと思ったからである。

また、他の1つは、いうまでもなく日本歯科医学会と日本歯科医師会との関係は、前者が研究によって得た最新の知識と技術を後者に提供し、後者はそれらを歯科医療に組み入れて先進医療として患者に還元するという相互支援の間柄にある。その後者の日本歯科医師会はFDIの1員として世界各国の歯科医師会と手を繋いでいるにかかわらず、前者は世界各国の研究者の集団、IADRと何らの関係を持っていないのである。誠に残念なことで、片手落ちといわれても仕方ないだろう。

幸い、ハーグのIADR会長、Dr. Goldhaberは以上のことを理解して下さり、眞泉会長を総会のゲストとして、また私の出席する各種委員会のオブザーバーと出席できるように計らってくれた。お陰で先生は、時には私と共に、また時には同僚の須賀教授(JADR 14代会長・日本歯科大学病理学)と共にと、IADRの活動状況を具さに観察して下さった。そして帰国されるや、直ちに私へ電話を寄せて曰く“ハーグの学会は大変、自分にとっても有意義だった。国際的視野に立って日本歯科医学会の在り方を考えてみると、JADRを本会の分科会の1つに加えて、JADRを通じてIADRと手を繋ぐのが最も妥当なように思う。かくすれば日本歯科医

師会における FDI の関係と同じように本会における IADR の関係として国際的に手を結ぶことができるから、早速、本会の役員や日本歯科医師会の方々に提言する積り”とのこと。我意を得たりとほくそ笑んだものだった。

急転直下、青天の霹靂とはこのことか、その３ヵ月後に先生はガンに侵され急逝されてしまったのである。ハーグへの出張をお願いした時には、既に先生自身はガンを承知の上、一言もそれを他言せず、快く学会に出席して下さった眞泉先生を偲ぶ時、誠に慚愧に耐えない。唯唯、先生の御霊、天上にて安らかなることを念ずる次第である。

昨年の 10 月、第 20 回日本歯科医学会総会が『健康な心と身体は口腔から ..... 発ヨコハマ 2004』というテーマで盛大に開催され、参集した歯科医師約２万と聞く。誠にもって喜ばしいことではあるが、この学会を構成する各専門分科会の歯学研究者の最近の研究成果も“発ヨコハマ 2004”として世界の歯学研究者に流して欲しかった。眞泉先生の提言が活かされていれば学会は更に有意義なものとなったろう。

以上の３話は“こぼしてならない話”と考え、この機会に若き JADR の会員に伝える次第である。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

JADR の思い出

JADR 名誉会員（1991 ～ 1992 年会長）
東京医科歯科大学名誉教授
佐々木　哲

1. 入会のころ

私が JADR の会員になったのは正確には記憶しないが、1960 年代の中頃ではなかったかと思う。JADR（始めは IADR の Japanese Division）は戦前、あるいは戦後の早い時期にアメリカに留学されて、向こうで IADR の会員になられた先生方が組織されたものではなかったかと想像している。

そんなわけで、発足当時はこの学会は会員数も少なく（数十人？）、私のような若輩からすると、「高踏的サロン」、あるいは「エリート集団」といった感じで、近寄り難く、また会員になるための資格審査も厳しかったのかもしれない。こうした雰囲気は、今では想像もつかないが、そんな理由で、入会の申請をためらったように記憶する。

会員として年次学会に出席するようになって、私も発表させてもらえるようになった。演題数は少なく、１会場のみで、１日か２日で終わってしまっていた。またポスター発表はなかったと思う。臨床を含む歯科のすべての領域の最新の研究内容を聞ける機会は、この学会だけだったので、私のような歯科の素人にとっては大いに有難いことだった。討論の時間もゆっくりあったし、どの演題にも落ち着いて耳を傾けることができた。おぼろげな記憶では、当時日歯大矯正の榎恵先生、東歯大病理の松宮誠一先生らが活躍されていた。

最も鮮明に覚えているのは、1973 年に宝塚ホテルで開催された第 21 回総会であった。戦後しばらくはすべてが不自由で、どの学会も大学の講堂や会議室を借りて開催するのが当り前であったのに、ホテルを使うとはさすがに「エリート学会」だと感心して、忘れられなかったのだろう。

2. JADR の役員になって

私が JADR の役員になったのはずっと後の 1987 年のことである。何人かの先生に薦められて、阪大の常光旭会長のもとで事務局長を勤めることになった、当時の「慣習」で、事務局長の任期は４年間、その後は会長（2 年）になると決まっていると後になって知らされた。そんなに長期間も雑用をやらされるのはかなわない。とんでもないものを押しつけられたというのが、いつわりない当時の感想であった。

そうはいっても、会長の補佐役として真面目に勤めなければ、大変な迷惑になってしまう。事務局長としての業務は決して手を抜かないようつとめた。そして会計担当理事には医歯大補綴の長尾正憲教授にお願いした。長尾先生はじめ補綴の教室員の方々には本当にお世話になったことを感謝している。とくに、後述するように、2001 年の IADR 総会の東京誘致の件が話題になってくると、長尾先生は経費の節約に努められて、基金を設立された。今になって回顧すると、これが誘致にとっては最大の貢献であったと感じている。

さて、そういうことで、常光会長と大橋正敏（日大歯理工）会長の４年間（1987 年～ 90 年）事務局長を勤めた。JADR の年次総会のほか、IADR 本部との通信文書など、かなり忙しかったと思うが、当時やっと習い覚えたパソコンのお陰でなんとかやりくりしたように記憶する。お世話になった常光先生も大橋先生も、ともに御逝去されてしまったことは、淋しい限りである。

そして、1991 年、92 年の２年間、JADR の会長を勤めた。副会長には阪大の作田守教授、事務局長には東歯大の高江洲義矩教授にお願いした。両先生はじめ多くの先生方にご迷惑をおかけしたのではないかと、今にして恥入っている次第である。

1987 年からの６年間は IADR 総会の前日に行なわれるビジネスセッションにすべて出席したわけである。この会議で最も困ったのは日本との時差で、議事の最中に眠くてたまらなくなることだった。突然発言を求められ、「いま東京では午前２時、私の脳はいびきをかいているので、明確な発言はできません」と逃げてしまったことがあった。この機会を利用して、学会の方にも必ず演題を出して、研究発表を行なうように努めた。

3. IADR 総会の東京誘致

日本がはじめて IADR 総会を誘致したのは、1980 年の第 58 回のときで、阪大の河村洋二郎先生が大変なご苦労をされて立派に開催された。その後かなり時間もたったので、東京でも開催するべきだという声が大きくなり、いつの間にか「IADR 総会の東京誘致」というのが私の事務局長

の頃からの最大の任務ということになってしまった。

1989 年、ダブリンでの第 67 回 IADR の頃から、東京への総会誘致を提案しはじめたと思う。当時の難題は、治安や人種差別などいろいろあって、外務省に知恵を借りにいったり、候補地を探して、方々の大きな会議場や宿泊施設などにも足を運んだりした。

東京開催を正式に提案したのは、第 69 回総会(アカプルコ、1991 年)のときで、ほぼ内諾を得ることができた。そしてこの年の 9 月に、IADR の新事務局長のジョン・クラークソン夫妻らが視察のため東京にやってきた。高江洲教授にも助けていただき、幕張メッセその他の関連施設を案内し、受け入れ情況を説明した。いろいろなハードルをどうやらクリアーできて、クラークソンさんを成田空港で見送り、ほっと緊張が解けたのを鮮明に記憶している。

そして、翌年の 1992 年にグラスゴーで開催された第 70 回の IADR で、9 年先の 2001 年に東京での総会開催(第 79 回)が正式に決定された。21 世紀の初頭に日本でこの学会を開くことができるのは、喜ばしいことだと外国の方々からも祝福された。

しかし、IADR 東京開催についての私の最大の悩みは、誘致に成功しても、その時点では私自身はもはや会長ではなく、また大学も退官してしまうので、実際の運営に携わるのは無理である。どなたかにお願いしなければならぬ。とんでもないお荷物を背負いこんで後は無責任に消えてしまうことにもなりかねないということであった。また当時の気持ちとしては、「2001 年宇宙の旅」という SF 映画もあったくらいに遥か先のことで、本当にその日を無事迎えられるのか、心配でもあった。

幸いにもこの東京大会は、医歯大の黒田敬之教授が運営してくださり、大成功裡に終了したことは、ご存じの通りである。

4. 韓国支部との交流

ほかに私の記憶に残っているのは、韓国支部との協同事業である。私が事務局長になる数年前から、JADR と KADR との間で、それぞれの総会に 1 名または 2 名を交換招待して講演してもらうという協力態勢がつくられていた。1989 年 1 月にソウルで開催された第 7 回 IADR 韓国支部総会には、大橋正敏教授と私が招待されて講演を行なった。この時の会長はソウル大学の梁源植(ヤン・ウォンシク)教授で、その他多くの韓国の研究者に親しく温かくもてなされ、友好の絆を強めることができたのは嬉しいことだった。私が会長をつとめた 1992 年の第 40 回 JADR 総会のときには、韓国から招待して講演していただいたのは延世大学口腔外科のユン・ジュン教授であった。

5. 第 40 回 JADR 総会

第 40 回の大会は麹町の都市センターで開催したが、このほかの招待講演者としては、当時 BMP 研究の第一人者であったウォズニー博士のほか 2 名のアメリカの研究者と、IADR 会長ジョン・グリーン教授であった。演題数もポスターを含めて約 120 題、11 月 30 日から 2 日間行なわれたが、これが私の JADR での最後の仕事となった。

この学会についての思い出はいろいろとあるが、もっとも印象に残ったのは、懇親会でのグリーン会長の挨拶だった。その中で、宇宙旅行を終えて帰還した飛行士の言葉として「宇宙から見た地球は極めて美しく、何より不思議に感じたのは、地図にあるような{国境線}がまったく見られなかったことだ」、という感想を引用されたことだった。

彼が強調したかったのは、国境とは恣意的な境界であって、これからの地球規模での活動では、こうした障壁をこえた新しい理念のもとに進められるべきだ、という内容だったと理解している。

6. 若い会員の方々へ

JADR の会員数は 2 千を越えたそうで、また作田教授や黒田教授が IADR の会長に就任されたことなど、日本部会の発展には目を見張るものがある。これからはさらに若い人たちの活躍に大いに期待しているのであるが、私個人のつたない経験を含めてアドバイスを述べてみたい。

当然のことながら、すぐれた業績を国際的ジャーナルに発表するよう努めるのが第一であるが、同時に国際学会でも口頭発表するのが望ましい。それには IADR がもっともふさわしい場であろう。そして、討論でも十分に通用するような語学力を普段から養っておくことである。さらに、学会のみならず、ビジネス部門での交流も大切である。

国際社会において、日本人についてよく言われていたことは、「閉鎖的で社交性に乏しい」、「真面目で勤勉だが、面白みがない」などであった。私は、JADR のメンバーとして国際学会に参加する際には、こうしたマイナスイメージを払拭したいという希望をもっていた。

研究発表でも、会議でも、ユーモアやジョークを交えて喋るように心がけた。しかし、冗談も時と場合により、かなり難しいものである。また、とっさに返答に窮してしまったことも多かった。あとで、「しまった、こういうジョークて切り返してやればよかった」と気づくことが多かった。いわゆる間抜けの「後知恵」であった。

それでも、私の冗談に会場が笑ってくれたときは、雰囲気が和らぎ、自分でもリラックスできたと思っている。

7. おわりに

私の専門分野は石灰化組織(Biological Mineralization)であったが、この方面の研究の先輩としては東歯大の田熊庄三郎先生と日歯大の須賀昭一先生がおられた。お二人ともあまり年上でなかったので、かしこまらずに気楽にお話ができた。硬組織研究に関して多くの助言をいただいたが、JADR の会長としても先輩だったので(田熊、1979-80、須賀、83-84)、学会の運営など多方面についてのアドバイスをいただくことができた。

日本の研究者で、はじめて IADR の学会賞を授与されたのは田熊先生(1972)で須賀先生も 1990 に受賞された。残念なことに須賀先生はこの数年後に亡くなられてしまった。私もこのあと 1992 年に、同じ栄誉を受けることができたのは、まったくお二人の先達の多大の恩恵によるものだったと強く感じている次第である。両先生に心からの謝辞を捧げてしめくくりとしたい。

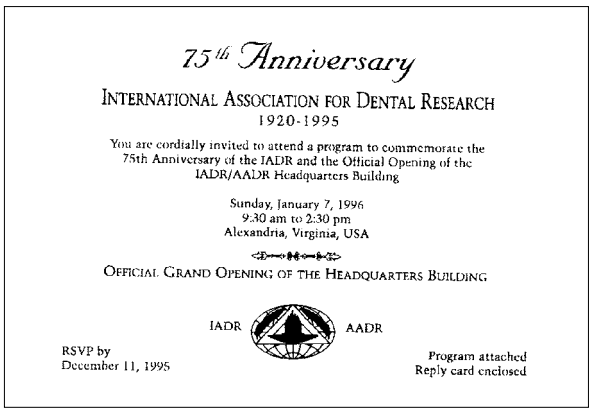
JADR と IADR

JADR 名誉会員(1993 ～ 1994 年会長)
大阪大学名誉教授
作田　　守

I. はじめに

JADR の 50 周年を記念して回顧録が発刊されることは、JADR にとって極めて有意義なことであり、その歴史が今後の発展のエネルギー源となることが期待される。50 周年記念といえば、JADR の母体である IADR が発行した “The First Fifty-Year History of the IADR” を思い出す。この本は、1920 年に創立された IADR を記念して、1971-1972 年に IADR の会長を務められた Dr. Frank J. Orland が委員長となり、7 名の委員からなる IADR History Ad Hoc Committee が編纂して 1973 年に出版されたが、その委員の 1 人に東京医科歯科大学の大西正男教授が入っておられ、ここにも JADR の IADR に対する貢献が見られる。私は、大阪大学の河村洋二郎教授が 1980 年に大阪で第 58 回 IADR 総会を開催されたとき、Local Organizing Committee の一人として会場係を担当し、1993-1994 年にかけては JADR の会長を務め、また、母体の IADR の会長も 1998-99 年にかけて務める機会に恵まれたので、この学会は私の人生に貴重な経験を与えて下さったと感謝している。そこで JADR に対する御礼の気持ちを込めて会長時代の思い出を中心に書かせていただきたいと思うが、JADR は IADR と密接な関係にあり、私にとっては IADR との関係なしには語れないところが多い。そこで、それらを含めて書かせていただいたのでご理解を頂ければ幸いである。今後の JADR に何か役立つものがあれば、望外の幸せである。

なお、本文や写真の説明文中の氏名の次に記載されているポジションはその当時のものであり、学会のさまざまな activities との関係を理解しやすくするため JADR および IADR の会長の任期も併記した。


75th Anniversary

INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR DENTAL RESEARCH
1920-1995

You are cordially invited to attend a program to commemorate the 75th Anniversary of the IADR and the Official Opening of the IADR/AADR Headquarters Building

Sunday, January 7, 1996
9:30 am to 2:30 pm
Alexandria, Virginia, USA

OFFICIAL GRAND OPENING OF THE HEADQUARTERS BUILDING

IADR AADR

RSVP by
December 11, 1995

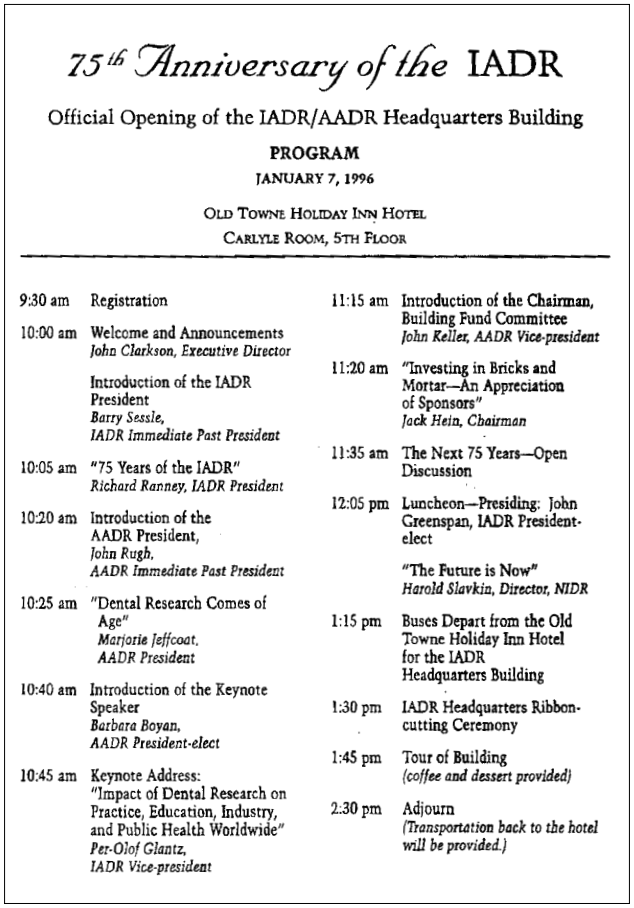
Program attached
Reply card enclosed

資料 1. IADR 創立 75 周年を記念して IADR 本部ビルの Official Opening が行われたときの招待状。

II. JADR 会長時代(1993 ～ 1994)

1993 年に東京医科歯科大学の佐々木　哲教授から会長を引き継いだが、その前年 1992 年 7 月に Glasgow, Scotland で開かれた第 70 回 IADR 総会に参加し、IADR の Council に佐々木会長、東京歯科大学の高江洲義矩教授(事務局長)とともに、初めて出席した。私は、以前から IADR の総会にたびたび参加して研究発表を行なってきたが、このときの参加は翌年から JADR の会長に就任する President-elect としての立場であったので学会の運営面で参考になるところが多かった。Glasgow での総会の IADR 会長は State University of New York at Buffalo の Dr. Robert J. Genco で、この総会後に University of California, San Francisco の Dr. John C. Greene が 新会長に就任された。佐々木会長(1991-1992)が東京で JADR の 第 40 回 Annual Meeting を 1992 年 11 月 に 開催されたとき、Greene 会長は来日、参加され、JADR は IADR において充実・発展を大きく期待される部会であると述べられたことを記憶している。これは、千葉・幕張で IADR 総会を 2001 年に開催したいという JADR の提案が Glasgow での Council で承認され、また、佐々木会長が開会式で Basic Research in Biological Mineralization Award を受賞されたことなどによるものであろう。

1993 年に私は JADR 会長に就任したが、2 年間の任期


75th Anniversary of the IADR

Official Opening of the IADR/AADR Headquarters Building

PROGRAM

JANUARY 7, 1996

OLD TOWNE HOLIDAY INN HOTEL
CARLYLE ROOM, 5TH FLOOR

9:30 am	Registration	11:15 am	Introduction of the Chairman, Building Fund Committee *John Keller, AADR Vice-president*
10:00 am	Welcome and Announcements *John Clarkson, Executive Director*	11:20 am	"Investing in Bricks and Mortar—An Appreciation of Sponsors" *Jack Hein, Chairman*
	Introduction of the IADR President *Barry Sessle, IADR Immediate Past President*	11:35 am	The Next 75 Years—Open Discussion
10:05 am	"75 Years of the IADR" *Richard Ranney, IADR President*	12:05 pm	Luncheon—Presiding: John Greenspan, IADR President-elect
10:20 am	Introduction of the AADR President, *John Rugh, AADR Immediate Past President*		"The Future is Now" *Harold Slavkin, Director, NIDR*
10:25 am	"Dental Research Comes of Age" *Marjorie Jeffcoat, AADR President*	1:15 pm	Buses Depart from the Old Towne Holiday Inn Hotel for the IADR Headquarters Building
10:40 am	Introduction of the Keynote Speaker *Barbara Boyan, AADR President-elect*	1:30 pm	IADR Headquarters Ribbon-cutting Ceremony
10:45 am	Keynote Address: "Impact of Dental Research on Practice, Education, Industry, and Public Health Worldwide" *Per-Olof Glantz, IADR Vice-president*	1:45 pm	Tour of Building *(coffee and dessert provided)*
		2:30 pm	Adjourn *(Transportation back to the hotel will be provided.)*

資料 2. IADR 創立 75 周年記念として行われた IADR 本部ビルの Official Opening のプログラム。Alexandria, VA にある Old Towne Holiday Inn Hotel で 1996 年 1 月 7 日に開催された。

NEWSLETTER FOR THE INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR DENTAL RESEARCH

IADReports

December 1995

Volume 17, Number 5

75th Anniversary Issue

Blizzard Fails to Dampen Anniversary Spirits

資料3．IDARのニューズレターIADReports Vol.17. No.5, December 1995発行。IADR本部ビルのOfficial Openingの記録が収録されている。筆者注)1996年1月の記事が1995年12月号に掲載されたのは、発行時期がずれ込んだことによる。

中の思い出を記述するにあたって、まず、役員・理事の先生方にはJADRの運営に関してさまざまなご協力いただいたことに対し、改めて厚く御礼申し上げる次第である。

1．IADR関係

この時期は、IADRが世界のoral health researchを推進するprofessional associationであるという認識を強く持ってさらに大きく発展する時期であったと思う。1990年7月からIADRおよびAADRのExecutive DirectorとしてIrelandのTrinity Collegeから着任したDr. John J. Clarksonが、IADRを発展させるべくいくつもの企画に取り組んだ。つまり会員を増強するとともに会員の学会活動、研究推進の便宜を図り、IADRの運営の効率を良くするための企画である。その主なものは以下の1)～3)の項目に挙げられるようなものであったと思う。

IADRの事務局を担うExecutive Director —事務総長と訳す— のポジションには学位を持つ教授クラスの適任者が世界から選ばれている。Deputy Executive Director —事務次長と訳す— もExecutive Directorを補佐するポジションとして置かれてあり、同様の資格を持つ適任者がこれに当たっている。ちなみに、Executive DirectorというポジションはSecretary Generalよりは積極的で創造性に富んだ役割を担うポジションのようである。

1）IADR本部ビルの購入

会員の学会活動に便利なさまざまな情報提供を円滑にするため、また、機関誌であるJournal of Dental Researchの発行を本部でdesktop publishingによりスムースに行うことができるようにするため、また、本部ビルを自前で所有すれば学会の運営経費を従来よりも年間約4万ドル節約できるため、Washington, D.C.の近くに本部ビルを1995年秋に購入する計画が立てられた。この計画を具体化するためIADR Headquarters Fund Campaignが行われ、1994年6月にJADR会長であった私宛に協力の依頼状がDr. Clarksonから届いた。目標額は125万ドルであるが、75万ドルをこのキャンペインで集め、残りをreserve fundから充当するというものであった。早速JADR理事会に諮って日本部会で寄付を取りまとめて本部に寄付することになり、会員各位に事情を説明して協力を求めた。この集金には当時会計担当理事であった東京歯科大学の柳沢孝彰教授に大変お世話になった。ご寄付を頂いた会員の皆様はじめお世話頂いた柳沢教授にもう一度御礼を申し上げたい。1995年6月にSingaporeで開催されたIADRのCouncilの席上、時のIADR会長のDr. Barry J. Sessle（1994-1995)に寄付金をドルの小切手にして寄贈した。当時は偶然近年で最も円高の時期であったので、寄付金に円高効果があり、1万4千ドルを超える金額になった。また、企業のG.C.やLIONからも多額の寄付を頂き、企業名がビル内の部屋の入口それぞれにつけられている。私も会長ということで別に寄付した思い出がある。1996年1月7日に本部ビルのOfficial OpeningがIADRの75周年を記念して行われ、これに参加する機会を得た。招待状とプログラムは資料1,2のとおりである。この日は1996 blizzardと呼ばれた猛烈な積雪に見舞われた翌日であったが盛大に開催され、そのときの記録はすべてIADRのニューズレターであるIADReports 17巻5号

写真1．IADR本部ビルのOfficial Openingでの講演風景。
(左→右)公演中のGraham Embery British Division会長・後にIADR会長(2001-2002)、head tableのRichard R. Ranney IADR会長(1995-1996)、Per-Olof Glantz IADR副会長、John J. Clarkson IADR/AADR事務総長・後にIADR会長(2002-2003)、Marjorie Jeffcoat AADR会長・後にIADR会長(2000-2001)。Alexandria, VAのホテルにて。1996年1月

写真2．Luncheonの様子。
(左→右)John J. Clarkson, IADR/AADR事務総長(後ろ姿)、Michael L. Barnett AADR理事、筆者IADR Vice-president-elect、Harold C. Slavkin, Director of National Institute of Dental Research、Dr. Slavkinのご子息。Alexandria, VAのホテルにて。1996年1月

写真 3．シャンペンで Official Opening を祝う。(左→右)Harald Löe IADR 元会長(1979-1981)、Graham Embery British Division 会長・後に IADR 会長(2001-2002)、Richard R. Ranney IADR 会長(1995-1996)。Alexandria, VA の本部ビルにて。1996 年 1 月。

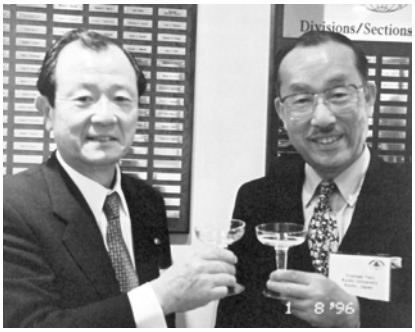


写真 4．谷　嘉明教授 Dental Material Group President（右）と乾杯する筆者(左)。Alexandria, VA の本部ビルにて。1996 年 1 月。

写真 5．本部ビル玄関での筆者。1996 年 1 月。

に収録されている(資料 3)。その中に、キャンペインの委員長であった Dr. John W. Hein の “Investing in Bricks and Mortar-An Appreciation of Sponsors” と題する講演も掲載されているが、JADR に対して特に御礼の言葉が述べられている。また、本部の壁面に掲げられている寄付団体名の plaque には Japanese Division の名前が刻まれている。シャンペンを開けての祝賀会もあり、その時の模様は写真 1 ～ 5 でご覧頂きたい。写真に見られるように、時の IADR の会長、元会長、後年会長に就任された方々が出席されている。Luncheon の写真には、時の National Institute of Dental Research（NIDR)の Director である Dr. Harold C. Slavkin や Warner-Lambert Company の Dental Affairs の Senior Director であり AADR 理事の Dr. Michael L. Barnett らの姿が見られる。Dr. Slavkin は任期中に NIDR での研究対象を広げて National Institute of Dental and Craniofacial Research に改名された。日本からは、京都大学の谷　嘉明教授が Dental Material Group の President として参加されたが、東京医科歯科大学の黒田敬之教授は雪のため Chicago で足止めとなり東京に引き返さざるを得なかったということである。このときは道路を車が走れず、また、空港には飛行機が来ず、日ごろ多忙な参加者全員が 3 日間ほどホテルに閉じ込められる状態となった。

本部ビルは地下 1 階地上 3 階建てで、効率よく使われている。場所は 1619 Duke Street, Alexandria, VA で、old town の閑静なところにある。訪れるには、Potomac 川沿いにある Washington, D.C. の Ronald Reagan Airport から車や電車(メトロ)で 30 分位の便利な場所にある。機会があれば、あらかじめ連絡をした上で、一度は訪問されても良い場所だと思う。写真 6,7 は理事会が本部ビルで行われたときのものである。

2) IADR の見直し

JADR の多くの会員が IADR の常置委員会の委員として、また、Research Group の役員・理事として IADR に貢献されていることを明記した上で、ここではこの時期に設置された特別委員会について言及したいと思う。

Dr. Clarkson は、Strategic Plan の設定に関連して、IADR の総会や組織などを見直すため 2 つの task force を立ち上げ、1994 年に特別委員会での検討を提案した。ひとつは “to examine the General Session and IADR Meetings”、

写真 6．本部ビルで役員会開催時。(左→右)John S. Greenspan IADR 会長(1996-1997)、Per-Olof Glantz IADR 次期会長、筆者 IADR 副会長。1996 年 5 月。

写真 7．本部ビルで役員会開催時。John J. Clarkson IADR/AADR 事務総長・後に IADR 会長(2002-2003)と筆者 IADR 副会長。1996 年 5 月。

写真 8．歯学生の研究を奨励して David Scott 賞を創設された David B. Scott IADR 元会長(1975-1976)。Alexandria, VA のホテルにて。1997 年 1 月。

もう一つは “to examine the structure and organization of IADR” である。前者の委員会は “Meeting Content” を検討する Subcommittee A と “Organization of Meeting” を検討する Subcommittee B に分けられ、当時 JADR の President-elect であった東北大学の山田　正教授が Subcommittee B の委員になられた。Subcommittee B の委員長は Dr. Chris Squier で、委員は山田教授を含む 6 名から構成された。私は後者の structure and organization の方の委員となった。委員長は、Ivar A. Mjör IADR 元会長(1986-1987)で委員数は私を含めて 10 名であった。

各委員と委員長との間のやりとりで検討された内容が Board Members のコメントにより修正され、IADR の Council に提出する案が出来上がった。Meeting の方は 15 項目、Structure の方は 9 項目について検討されたものである。1995 年 6 月に Singapore で開催された Council で、Meeting の方は Subcommittee A の委員長であった Dr. Sally J. Marshall（1999-2000 の IADR 会長）から Subcommittee B の分も含めて報告があり、Structure の方は Dr. Mjör から報告されて了承された。詳細については、紙面の都合上省略するが、このときの Council Manual に記載されている。この task force で検討された内容の一部は、IADR を取り巻く環境の急激な変化に対応するため、現在さらに変更されて IADR が運営されている。

3) IADR の Strategic Plan の設定

Dr. Clarkson が中心になって作り上げた Strategic Plan は 1994 年 3 月に Seattle で開催された Council で示され、1995 年の Singapore での Council で概要が承認され、1996 年の San Francisco の Council で決定し実施されている。Strategic Plan を設定するという発想は、国内学会ではほとんどなかったと思われるが、initiative をとって oral health research を推進する国際学会ではその vision が必要である。Dr. Clarkson は Strategic Plan を必要とする背景として、IADR は 1920 年に創立され、はじめはゆっくりとした速さで発展してきたが、1980 年代から 90 年代にかけてドラマチックな発展を遂げ、国際会議の開催や国際雑誌の発行を行い、財務も健全ではあるが、我々の進む道が明確に示されていない、などを挙げた。そこで IADR の使命や目標を具体的に示すためにこの Plan が作られた。JADR に対してもこれを周知するための資料が会長であった私のところに送付されてきたので、理事会でも報告したが、その内容説明および Strategic Plan は 1994 年の J Dent Res 73 巻 7 号 : 1319-1323 に、また、Strategic Plan そのものは資料 3 の IADReports 17 巻 5 号の 12 ページに掲載されているので参考にしていただきたい。

4) David Scott 賞

歯学生の研究活動を奨励するために設けられた David Scott 賞がある。各部会名のアルファベット順に 1 名を選出する順番が回ってくるが、1994 年に Japanese Division から選出するチャンスが巡ってきた。JADR 理事会に諮り候補者を募ったところ、大阪大学歯学部の瀧北祥子氏が選ばれ、1995 年の Singapore での第 73 回 IADR 総会の開会式で受賞が公表された。瀧北氏は口腔解剖学第 1 講座の栗栖浩二郎教授の下で、学部学生のときから研究に取り組んでいた。写真 8 は IADR 本部近くのホテルで偶然お目にかかった Dr. David B. Scott である。瀧北氏は歯学部卒業後、法医学の研究に進んだと聞いている。

余談かもしれないが、IADR の Council などの会議の進行や意思決定の方法について触れておきたい。その方法は、他の米国の会議でも同様と思われるが、日本での会議の進行方法とは全く異なり、Robert’s Rules of Order に則って行われている。Council に出席する場合は Robert’s Rules of Order の概要を知っておくと便利である。初版は General Henry M. Robert により 1876 年に出されたが、現在では改訂が加えられ、第 10 版が Perseus Publishing から 2000 年に出版されている。

2. JADR 関係

JADR の会長として 1994 年 3 月に Seattle で開催された第 72 回 IADR 総会に出席したが、山田　正 JADR 副会長も出席された。写真 9 は Council Dinner のときの Wei IADR 会長夫妻とのスナップである。

国内では、JADR の運営は通常の年次計画に沿って行われた。その中では主に年次大会について取り上げたいと思う。

1993 年は岡山大学の村山洋二教授に第 41 回 Annual

写真 9. Seattle で開催された第 72 回 IADR 総会の Council Dinner にて。
(左→右)筆者 JADR 会長(1993-1994)、Stephen H.Y. W ei IADR 会長(1993-1994)、Wei 会長夫人、山田　正 JADR 副会長。1994 年 3 月。

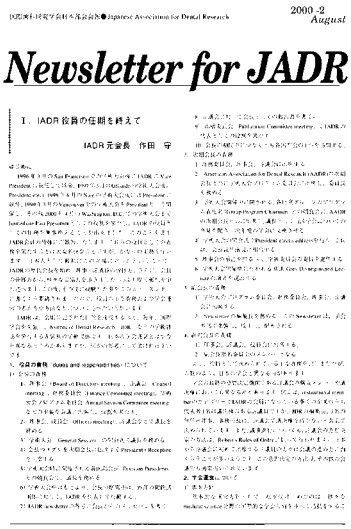
写真 10. 第 41 回 JADR Annual Meeting 開催時(岡山)の特別講演者とともに。
(左→右)村山洋二　大会長、Michael J. Levine 教授、Cheol-We Kim 教授、筆者　JADR 会長(1993-1994)。
1993 年 12 月。

写真 11．第 42 回 JADR Annual Meeting 開催時(大阪)の Friendship Party にて。
(左→右)大森郁朗教授、Jea Seung Ko 教授、山田　正 JADR 次期会長、佐々木　哲 JADR 前会長(1991-1992)、常光　旭 JADR 元会長(1987-1988)、Colin Dawes 教授 JDR 前編集長、Dawes 教授夫人。1994 年 12 月。

写真 12．第 42 回 JADR Annual Meeting 開催時(大阪)のヨーロッパからの演者。
(左→右)筆者 JADR 会長(1993-1994)・大会長 Dr. Hans U. Paulsen, Irma Thesleff 教授。1994 年 12 月。

Meeting の大会長をお願いした。University of Hong Kong の Stephen H.Y. Wei IADR 会長(1993-1994) も来日、参加され、Headquarters Fund Campaign について協力依頼があったことを記憶している。特別講演には State University of New York at Buffalo の Michael J. Levine 教授が招かれ、人工唾液の開発について講演された。韓国からは、ソウル国立大学の金　哲偉(Cheol-We Kim)教授が招かれ、Dental Biomaterial に関する講演をされた(写真 10)。この学会では、150 もの一般演題の発表があり、JADR としては比較的多い演題数の学会であった。

1994 年は私が第 42 回 Annual Meeting の大会長を勤め、大阪で開催した。歯科医学に関する研究で重要な分野の 1 つは、歯の発生あるいは保存に関する研究であろうとの考えから、特別講演に Finland から University of Helsinki の Irma Thesleff 教授を招き、歯の発生の molecular regulation に関する講演をしていただいた。この分野は現在の歯の再生に関する tissue engineering の分野につながっている。韓国からは、ソウル国立大学の Jea Seung Ko 教授を招待し、破骨細胞形成に関する講演を拝聴した。また、歯の自家移植と組織修復に関するシンポジウムを開催し、北海道大学の久保木教授、東京歯科大学の下野教授、大阪大学の三木助教授、愛知県で開業の月星博士、Denmark から Peder Lykke School の Dr. Hans U. Paulsen らに発表をお願いして大変意義ある学会となった。最近、2005 年の Br J Oral Maxillofac Surg 43 巻 2 月号に発表された Akkocaoglu, M. らの Autotransplanted Teeth の長期観察での成功率に関する論文を見る機会があった。Endodontic treatment が 25%くらいは必要になるが、80%以上の成功例が報告されているのを見ると、この方面の進歩も見逃せないと思われる。さらに、Journal of Dental Research(JDR)の編集長であった Canada の Colin Dawes 教授が唾液の flow rate に関する発表をして、この学会を盛り上げてくれた。写真 11,12 は Friendship Party のときのものである。また、IADR の South-East Asian Division の President として参加した National University of Singapore の Dr. Yeo Jinn-Fei は、1995 年に Singapore で開催される IADR 総会への参加呼びかけを行った。一般演題発表も 135 題にのぼり、私にとって思い出深い学会となった。


2000-2
August
Newsletter for JADR
I．IADR 役員の任期を終えて
IADR 元会長　作田　守

資料 4．JADR のニューズレター 2000-2 August 発行。

III. IADR の役員(副会長、次期会長、会長、前会長)時代(1996 ～ 2000)

教授室が私の部屋の真上にあった岡田　宏教授は 1994 年には IADR の Nominating Committee の委員長をしておられ、私の部屋にしばしば立ち寄って、IADR の Vice-president の候補に出ないかと口説かれた。とてもその任ではないと思ってはじめは辞退していたが、熱心に口説かれるので応募することに腹を決めた。その結果、1995 年に Singapore で開催された Council で 3 人の候補の一人として選出され、IADR 会員全員に投票用紙が本部から送られることになった。JADR からは 45%もの投票率を頂いて、1996 年初めには、Vice-president-elect に選出されたことが判明した。投票していただいた JADR 会員に対して、また、選出されたニュースを聞かれた河村洋二郎先生はじめ多くの方々からお祝いと激励の言葉をい

NEWSLETTER FOR THE INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR DENTAL RESEARCH

IADReports

July/August 1998

Volume 20, Number 2

A MESSAGE FROM THE PRESIDENT

Nice Sets New Record

資料5. IADR のニューズレター IADReports Vol. 20. No. 2, July/August, 1998 発行。筆者が IADR 会長時に発行されたもの。

ただいたことに対して、厚く御礼を申し上げたい。日本人で初めてのことで大変名誉なことであるが、大役を無事果たさなければ JADR に申し訳ないという気持ちが先に立った。1996 年 3 月は、私にとって大学を去る定年の時である。IADR では、Vice President, President-elect, President, Immediate Past President と 1 年ごとに役員としてのポジションが変わる。JADR のニューズレターに掲載された「IADR 役員の任期を終えて」(資料 4) と題する原稿の中で既に述べたように、それぞれに duties and responsibilities がある。それを見ると、それぞれの責務は、関係者に相談することはあっても、私自身が準備しないと果たせないことが分かった。つまり、通訳なしの英語のみの会議では、人に頼って準備してもらったのでは役に立たないことがわかったので、退官しても任務を遂行することが可能であろうと思われた。幸いなことに、このころから e-mail が使用されるようになってきたので、退官時に教授会から贈られたコンピュータが本部と直接連絡する上で大変役に立ち有難かった。大阪大学歯学部教授会に厚く御礼を申し上げたい。

写真 13. 第 74 回 IADR 総会での記念写真。
(左→右) 筆者夫妻、Greene 教授夫人、John C. Greene IADR 元会長 (1992-1993)。San Francisco にて。1996 年 3 月。

1. JADR のニューズレター

IADR は JADR の母体といえども、その運営方法は JADR とは大変異なるので、私の経験したことを思い出としてここに書き留めるべきかと思われるが、JADR のニューズレターに既に記載されているので、ここではそれらを紹介することにとどめたい。

1) 2000 年に発行されたニューズレター (資料 4)

ニューズレター 2000-2 August の 1 ～ 3 ページに、次の内容が「IADR 役員の任期を終えて」と題して記載されている。

(1) 役員の責務
ⅰ) 会長の責務
ⅱ) 次期会長の責務
ⅲ) 副会長の責務
ⅳ) 直前会長の責務

(2) 学会運営について
ⅰ) 基本方針
ⅱ) 本部
ⅲ) 学術大会について
ⅳ) 予算について
ⅴ) 学術雑誌について
ⅵ) 途上国での歯科医学研究の推進について
ⅶ) Memorandum of Understanding (MOU) について
ⅷ) 2001 年に日本で行われる IADR General Session について

2) 2003 年に発行されたニューズレター

ニューズレター 2003-1 February の 3-5 ページに JADR 50 周年記念講演「JADR に期待するもの」が掲載されている。その中には IADR 役員時代の体験を踏まえて次の内容が記載されている。それらは、体制について、Task Force on Developing Regions について、学会の開催方法、財務委員会と投資委員会、学会としての研究費獲得活動、歯科医学会としての研究の方向性などについてである。

2. IADR のニューズレター

筆者が役員をしていた頃は年 4 回の IADR ニューズレター “IADReports” が発行されていたが、会長の年から 1 回は on-line で配信されるようになった。会長の期間に発行された “IADReports” は、20 巻 2-4 号の 3 回であるが次の 21 巻 1 号には筆者が 1999 年 3 月に Vancouver で会長

写真 14. John J. Clarkson 事務総長のお別れ会にて。
(左 → 右) John W. Stamm IADR 会計理事、Per-Olof Glantz IADR 会長 (1997-1998)、John J. Clarkson IADR/AADR 事務総長・後に IADR 会長 (2002-2003)、Michael L. Barnett AADR 理事。Washington, D.C. にて。1997 年 11 月。

として開催した学会での写真が多く掲載されている。このうち Vol.20, November 2 のみを資料 5 として示した。

3. 写真で綴る記録

JADR、IADR のニューズレターに記載されている内容との重複を避けて、ここでは、写真、その他の資料を提出し、JADR 会員の活躍の足跡を留めたいと思う。

1）1996 年の記録

1996 年 3 月に San Francisco で開催された第 74 回 IADR 総会には IADR Vice-president-elect として出席した。日本部会の活躍を期待して下さった John C. Greene 元 IADR 会長も JADR からの多数の参加を喜んでくれた（写真 13）。Dr. Greene は日本でも広く使用されている Oral Hygiene Index（OHI と OHI-S）の提唱者としてもよく知られている。さらに禁煙運動に指導的役割を果たしておられ、IADR に ad hoc Tobacco Committee を作り、JADR からは福岡歯科大学の埴岡　隆教授が委員として活躍されている。この委員会は現在も活発に活躍しており、これまでに次のテーマで 3 回のシンポジウムを開催したそうである。そのテーマは、世界のさまざまな人々の口へのタバコの影響について、禁煙と防煙への歯科の貢献について、政策への貢献についてである。

国内では、1996 年 11 月に東北大学教授の山田　正 JADR 会長（1995-1996）が大会長となって JADR の第 44 回 Annual Meeting を福島の裏磐梯で開催された。筆者は IADR 副会長としてこの学会に出席した。特別講演者には University of Zürich の B. Guggenheim 教授と韓国 Dankook University の Kichuel K. Park 教授が招聘され、予防的見地からう蝕の原因論に関する誤った考え方についての講演とう蝕の原因となる食事の試験的モデルに関する講演をそれぞれされた。この開催場所は交通の便が良いとは言えない所であったが、温泉につかりながらお互いに研究発表に関して議論を戦わすには絶好の開催地であった。

2）1997 年の記録

IADR および AADR の事務総長として活躍された Dr. Clarkson は、Trinity College の歯学部長として Ireland へ帰国することになり、1997 年 11 月にお別れの会が本部ビルで Joint IADR/AADR Finance Committee Meeting が開催された機会に、場所を Washington, D.C. に移して行われた（写真 14）。IADR の会計理事で University of North Carolina at Chapel Hill の Dr. John W. Stamm, IADR 会長で University of Lund の Dr. Per-Olof Glantz, Warner-Lambert Company の Dr. Michael L. Barnett らの姿が見える。Dr. Clarkson はその後 IADR の役員として選出され、東京歯科大学の奥田克爾教授が JADR 会長（2001-2002）として第 50 回の記念式典を年次大会中に開催されたとき、IADR 会長（2002-2003）としてのメッセージを寄せてくれており、JADR のニューズレター 2003-1 February の 3 ページに掲載されている。第 50 回 Annual Meeting は渡辺　誠大会長のもと仙台で行われた。

1997 年 12 月に徳島で開催された第 45 回 JADR Annual Meeting には、Per-Olof Glantz IADR 会長、Sally J. Marshall IADR 副会長らが参加された。特別講演者にはカナダの Laval 大学の Denis Mayrand 教授と韓国から KADR 副会長でソウル国立大学の南　東錫（Dong-Seok Nahm）教授を迎え、黒田敬之 JADR 会長のもと、中村　亮 JADR 副会長が大会長を務められて開催された。特別講演では *P. gingivalis* の病因因子に関する講演と Multiloop Edgewise Arch Wire の作用機構に関する講演をそれぞれされた。このときの招待者および JADR 役員・理事の集合写真を写真 15 に示した。河村洋二郎先生、三浦不二夫先生のお顔も見える思い出の写真の 1 枚である。徳島は阿波踊りが有名で、見る阿呆に踊らされて踊る IADR 会長、次期会長の写真は一興であろう（写真 16）。なお、この学会での記録は JADR Newsletter 1998-1 February に詳しく掲載されている。この頃から、JADR の Annual Meeting の報告が

写真 15. 第 45 回 JADR Annual Meeting 開催時（徳島）の招待者および JADR 役員・理事。
（前列着席　左→右）三浦不二夫 JADR 元会長（1985-1986）・名誉会員、河村洋二郎 JADR 元会長（1973-1974）・名誉会員・第 58 回 IADR 総会（1980 大阪）での名誉会長、南　東錫教授、Per-Olof Glantz IADR 会長（1997-1998）、Glantz 会長夫人、Sally J. Marshall IADR 副会長、Mayrand 教授夫人、Denis Mayrand 教授。（後列　左→右）奥田克爾 JADR 理事・後に会長（2001-2002）、栗栖浩二郎 JADR 監事、南雲正男 JADR 理事、伊集院直邦 JADR 会計理事、須田英明 JADR 理事、山田　正 JADR 前会長（1995-1996）、黒田敬之 JADR 会長（1997-1998）・後に IADR 会長（2005-2006）、筆者 JADR 元会長（1993-1994）・IADR 次期会長、中村　亮 JADR 副会長・大会長、堤　定美 JADR 監事、Grayson W. Marshall AADR 理事、岡田宏 JADR 事務局長・後に会長（1999-2000）、坂東永一 JADR 理事。1997 年 12 月。

写真 16．法被を着て蜂須賀連主催の阿波踊りを踊る Glantz IADR 会長夫妻と筆者ら。徳島にて。1997 年 12 月。

写真 17．Joint IADR/AADR Board of Directors Meeting での記念写真。
(前列着席　左→右)John Keller AADR 会長、Per-Olof Glantz IADR 会長(1997-1998)、Eli Schwarz IADR/AADR 次期事務総長。
(後列　左→右)John W. Stamm IADR 会計理事、Michel Goldberg IADR 理事、Paul Robertson AADR 次期会長・後に IADR 会長(2004-2005)、Susan Reisine AADR 会計理事、Michael L. Barnett AADR 理事、Barbara Boyan AADR 前会長、W. Mike Edgar IADR 理事、Grayson W. Marshall AADR 理事、John S. Greenspan IADR 前会長(1996-1997)、Stephen Bayne AADR 副会長、Maria Fidela de Lima Navarro IADR 理事、Sally J. Marshall IADR 副会長、筆者 IADR 次期会長、Mark Herzberg JDR 編集長、Robert (Skip) Collins IADR/AADR 事務次長。Oakland, CA にて。1998 年 1 月。

Newsletter に掲載されるようになったようである。

3) 1998 年の記録

IADR の理事会は通常 AADR の理事会と共催の形で行なわれる。そのときのメンバーは IADR/AADR ともに会長、次期会長、副会長、前会長、会計理事、無任所理事(IADR は 3 名、AADR は 2 名であったが、現在の IADR 理事は地域を代表する理事となり人数が増えている)、編集長、事務総長、事務次長である。本部ビルのある Alexandria, VA は冬季には厳しい気候になるので会議の開催を温暖な場所で開催することがある。1998 年 1 月に行なわれた IADR と AADR の合同理事会は California の Oakland で開催され、写真 17 はそのときのものである。Oakland は Greenspan IADR 前会長のご自宅がある Tiburon から近いので、このときの関係者をご自宅のパーテイに招待して下さった。丁度還暦を迎えられるということだったので、日本から赤い帽子とちゃんちゃんこを持参してお祝いした。写真 18 はそのときのものである。

JADR はいつの頃からか毎年開かれる年次大会のときに韓国部会(KADR)と特別講演者の交流を行っている。筆者はこのとき IADR President-elect であったが、1998 年 1 月に Seoul で開催された韓国の第 16 回学術大会と第 14 回 KADR の年次大会に、Per-Olof Glantz 会長の要請で IADR を代表して出席した。このとき JADR からは大阪大学の栗栖浩二郎教授が特別講演者として招待された。写真 19 は Seoul National University 構内の学会場玄関でのものである。

1998 年 6 月の Nice, France で行われた第 76 回 IADR 総会で私は会長に就任することになっている。そのとき日本から鶴巻克雄 FDI 会長も Council や開会式に出席してくださった。写真 20 は Council Dinner 前のパーテイで Glantz 会長と話をされる鶴巻会長のスナップである。開会式では President-elect address を行う義務がある。写真 21 はその時のものであり、その原稿は J Dent Res 77(9): 1668-1669, 1998 に掲載されている。この開会式で、JADR 次期会長の岡田　宏大阪大学教授は IADR の Distinguished Scientist Award である Basic Research in Periodontal Disease Award を受賞された。まことにおめでたいことである。学会の終わり近くに開催される President's Reception で会長の

写真 18．Greensapn IADR 前会長の還暦を祝って。
(左→右)Sally J. Marshall IADR 副会長、John S. Greenspan IADR 前会長(1996-1997)、Stephen Bayne AADR 副会長、Charles N. Bertolami カリフォルニア大学サンフランシス校歯学部長。Greenspan 教授のご自宅にて。1998 年 1 月。

写真 19．IADR の韓国部会(KADR)の学会に参加。
(左→右)南　東錫 KADR 副会長、金　哲偉 KADR 会長、筆者 IADR 次期会長、栗栖浩二郎教授 JADR 監事、劉　東洙教授 KADR の創立メンバー。国立ソウル大学構内にて。1998 年 1 月。

写 真 20．Per-Olof Glantz IADR 会長と話される鶴巻克雄 FDI 会長。Nice, France にて。1998 年 6 月。

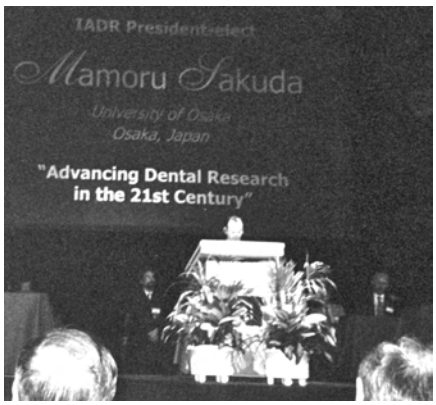


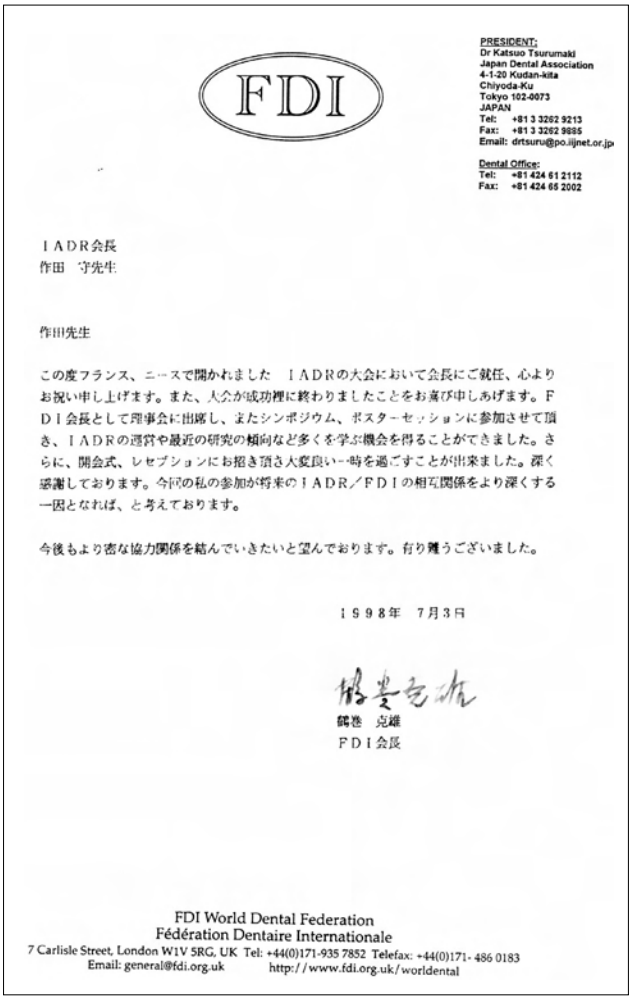
写真 21．第 76 回 IADR 総会の開会式で President-elect address を行う筆者。Nice, France にて。1998 年 6 月。

写真 22．IADR 会長のメダリオンを伝達された筆者。(左→右)Eli Schwarz 事務総長、筆者、Per-Olof Glantz 前会長。Nice, France にて。1998 年 6 月。

写真 23．IADR 会長のメダリオン。

メダリオンが次の会長に伝達される。写真 22 は新会長の私にメダリオンが伝達されたときのものである。このとき、Glantz 会長からすばらしいメッセージをいただいた。JADR 事務局長であり次期会長の岡田　宏教授はこのメッセージを JADR のニューズレター 1998-2 August の 4 ページに収録して下さっている。この会長のメダリオンは 1972 年に South African Division から IADR に寄贈されたものだそうである(写真 23)。チェインには歴代会長の名前が彫りこまれている。

さて、会長に就任してから最初の仕事は、Nice での IADR 総会の直後に 6 月 28 日夕刻の開会式から 4 日間にわたって Baveno, Italy で開催された第 15 回 International Conference on Oral Biology（ICOB） に会長として出席することであった。この ICOB は “Oral Biology and Dental Implants” というテーマで、AADR 前会長で University of Iowa の Dr. John C. Keller が 15th ICOB Scientific Advisory Committee の Chair として開催された。JADR の会員も多く参加され 57 演題のうち 11 題が日本から提出された。写真 24 は、この ICOB



PRESIDENT:
Dr Katsuo Tsurumaki
Japan Dental Association
4-1-20 Kudan-kita
Chiyoda-Ku
Tokyo 102-0073
JAPAN
Tel: +81 3 3262 9213
Fax: +81 3 3262 9885
Email: drtsuru@po.iijnet.or.jp

Dental Office:
Tel: +81 424 61 2112
Fax: +81 424 65 2002

ＩＡＤＲ会長
作田　守先生

作田先生

この度フランス、ニースで開かれました　ＩＡＤＲの大会において会長にご就任、心よりお祝い申し上げます。また、大会が成功裡に終わりましたことをお喜び申しあげます。ＦＤＩ会長として理事会に出席し、またシンポジウム、ポスターセッションに参加させて頂き、ＩＡＤＲの運営や最近の研究の傾向など多くを学ぶ機会を得ることができました。さらに、開会式、レセプションにお招き頂き大変良い一時を過ごすことが出来ました。深く感謝しております。今回の私の参加が将来のＩＡＤＲ／ＦＤＩの相互関係をより深くする一因となれば、と考えております。

今後もより密な協力関係を結んでいきたいと望んでおります。有り難うございました。

１９９８年　７月３日

鶴巻　克雄
ＦＤＩ会長

FDI World Dental Federation
Fédération Dentaire Internationale
7 Carlisle Street, London W1V 5RG, UK Tel: +44(0)171-935 7852 Telefax: +44(0)171- 486 0183
Email: general@fdi.org.uk http://www.fdi.org.uk/worldental

資料 6．鶴巻克雄 FDI 会長からいただいた書状。

写真 24．ICOB に参加された JADR 理事　恵比須繁之教授ご夫妻。後ろの湖は Logo Maggiore。Baveno, Italy の Grand Hotel Dino にて。1998 年 6 月。

写真 25．South-East Asian Division（SEA Div.）訪問時。(左→右)筆者夫妻、Noor Hayaty Abu Kasim SEA Div. 会計理事、Toh Chooi Gait SEA Div. 会長、Dr. Said of Ministry of Education、Teo Choo Soo SEAADE 会長・IADR 理事。Kuala Lumpur, Malaysia にて。1998 年 10 月。

写真 26. 座長の Wei IADR 元会長 (1993-1994) から、講演後感謝状の plaque を受け取る筆者。Kuala Lumpur, Malaysia にて。1998 年 10 月。

写真 27. Argentine Division 訪問時。
(前列着席 左→右) Osvaldo R. Costa Argentine Div. 次期会長、筆者、Raquel Doño Argentine Div. 会長、Angela M. Ubios Argentine Div. 国際関係および会計理事。
(後列)二人目から Argentine Div. の役員・理事の先生方。San Luis, Argentina にて。1998 年 10 月。

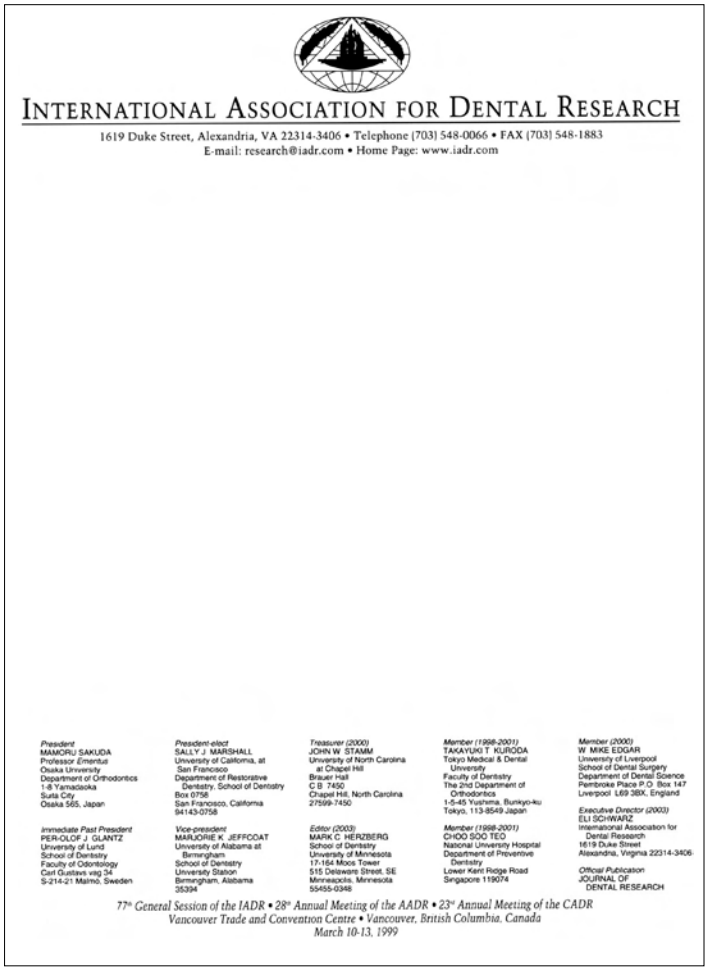
写真 28. IADR 会長のメダリオンをつけた筆者。大阪にて。1998 年 10 月。

に参加された JADR 理事の恵比須繁之大阪大学教授ご夫妻が筆者夫妻の部屋を訪れてくれたときのものである。帰国すると鶴巻克雄 FDI 会長からご丁寧な書状をいただいていた。FDI との関係を示す意義ある書類と思われるので資料 6 に加えた。

IADR 会長の任務の一つとして、少なくとも 1 つの Division を訪問しなくてはならないということがある。Division での dental research の振興を促すことが主な目的である。私が訪れたのは、South-East Asian Division, Argentine Division, Japanese Division および Egyptian Division であった。

South-East Asian Division では教育学会と研究学会が併催されるのが慣わしのようである。1998 年 9 月 30 日～ 10 月 3 日にかけて Kuala Lumpur で開催された学会は、South-East Asia Association for Dental Education (SEAADE) の 9th Annual Scientific and General Meeting および IADR の South-East Asian Division (SEA Div.) の 13th Annual Scientific Meeting が “Working Together for Advancement of Dental Education and Research” と 銘打って開催された。写真 25 は開会式前の記念写真である。開会式には、Dr. Said of Ministry of Education が来賓として出席された。写真 26 は講演後、座長の Wei IADR 元会長から感謝状の plaque を受け取る筆者である。学会はすべて英語で行われ、若い研究者の熱心な多数の参加があり盛会であった。

1998 年 10 月 22-24 日にかけて行われた Argentine Division の学会は Sociedad Argentina de Investigacion Odontologica の XXXI Reunión Anual として San Luis で開催された。San Luis は Buenos Aires から 730 km ほど東に位置する閑静な保養地にあり、国内線の飛行機で Buenos Aires から移動した。学会の開会式には、Dr. Carlos Marshof, General Director of the Fund of Science and Technology from the National Agency of Promotion of Science and Technology が来賓として出席された。また、IADR 理事である Brazil の São Paulo 大学の Prof.ª Drª Maria Fidela de Lima Navarro も開会式に参加された。学会はスペイン語で行われ、筆者の英語での講演はスペイン語に通訳された。スペイン語は日本語よりも英語に近いと思われるが、英語とは大変違うとの事で、日本語で発表される JADR の学会と類似のご苦労があると思



INTERNATIONAL ASSOCIATION FOR DENTAL RESEARCH

1619 Duke Street, Alexandria, VA 22314-3406 • Telephone (703) 548-0066 • FAX (703) 548-1883
E-mail: research@iadr.com • Home Page: www.iadr.com

President
MAMORU SAKUDA
Professor *Emeritus*
Osaka University
Department of Orthodontics
1-8 Yamadaoka
Suita City
Osaka 565, Japan

President-elect
SALLY J. MARSHALL
University of California, at San Francisco
Department of Restorative Dentistry, School of Dentistry
Box 0758
San Francisco, California 94143-0758

Treasurer (2000)
JOHN W. STAMM
University of North Carolina at Chapel Hill
Brauer Hall
C.B. 7450
Chapel Hill, North Carolina 27599-7450

Member (1998-2001)
TAKAYUKI T. KURODA
Tokyo Medical & Dental University
Faculty of Dentistry
The 2nd Department of Orthodontics
1-5-45 Yushima, Bunkyo-ku
Tokyo, 113-8549 Japan

Member (2000)
W. MIKE EDGAR
University of Liverpool
School of Dental Surgery
Department of Dental Science
Pembroke Place P.O. Box 147
Liverpool L69 3BX, England

Immediate Past President
PER-OLOF J. GLANTZ
University of Lund
School of Dentistry
Faculty of Odontology
Carl Gustavs vag 34
S-214-21 Malmö, Sweden

Vice-president
MARJORIE K. JEFFCOAT
University of Alabama at Birmingham
School of Dentistry
University Station
Birmingham, Alabama 35294

Editor (2003)
MARK C. HERZBERG
School of Dentistry
University of Minnesota
17-164 Moos Tower
515 Delaware Street, SE
Minneapolis, Minnesota 55455-0348

Member (1998-2001)
CHOO SOO TEO
National University Hospital
Department of Preventive Dentistry
Lower Kent Ridge Road
Singapore 119074

Executive Director (2003)
ELI SCHWARZ
International Association for Dental Research
1619 Duke Street
Alexandria, Virginia 22314-3406

Official Publication
JOURNAL OF DENTAL RESEARCH

77th General Session of the IADR • 28th Annual Meeting of the AADR • 23rd Annual Meeting of the CADR
Vancouver Trade and Convention Centre • Vancouver, British Columbia, Canada
March 10-13, 1999

資料 7. IADR 会長の期間に使用された公式のレター用紙、ご協力頂いた役員・理事の氏名と役割が下方に記されている。

われた。写真 27 は、そのときのものであるが、女性の研究者が多かった。

1998 年 11 月 28 ～ 29 日にかけて行われた JADR の第 46 回年次大会は東京歯科大学の高江洲義矩教授が大会長で、千葉の幕張メッセ・国際会議場を会場に選ばれた。JADR 会長の黒田敬之東京医科歯科大学教授が 2001 年に IADR 総会を幕張メッセ・国際会議場で開催する準備を Local Organizing Committee の Chair の立場の IADR 理事として進められている時期であり、適切な会場の選択であると感謝した。この会の特別講演には Boston の Forsyth Dental Center の Dr. Martin A. Taubman と韓国から釜山国立大学の Dr. J.B.Kim が招待され、それぞれ dental caries のワクチン研究の見通しおよび韓国におけるフッ素の水道水への応用に関する講演をされた。これらの特別講演を初め例年の JADR の学会の様式に則って活発な学会が開催されたことは、大いに誇りとするところである。なお、この学会での記録は JADR Newsletter 1999-1 January に詳しく掲載されている。

1998 年 12 月 17-18 日にかけて、米国在住であるが Egyptian Division の IADR Councilor であった Dr. Aida A. Chohayeb から、“Collaborative International Dental Research” という目標を掲げて Cairo, Egypt の National Research Center で開催される IADR の Egyptian Division の学会に参加を要請されて出席した。この学会には、National Institute of Dental and Craniofacial Research（NIDCR）の Associate Director for International Health である Dr. Lois K. Cohen, Israeli Division 選出の Councilor で Hebrew University-Hadassah School of Dental Medicine の Dr. Harold Sgan-Cohen, IADR の Basic Research in Biological Mineralization Award の受賞者である米国 Columbia University の Prof. Raquel Z. LeGeros らが Egypt 以外から参加され、Egypt からは National Research Center の Prof. Dr. Aly El-Nofely が参加された。しかし、Israel からの一般参加者の入場を拒むという事態が発生し、2 日目は会場を Marriott Hotel に急遽移して学会を継続するという異例の事態を初めて経験した。このような事態の発生は、複雑な政治的背景の影響と無関係ではないと考えるが、JADR ではこの種の心配なしに学会の運営ができ、また、研究に邁進できる環境にあるという幸運を会員は認識するべきであろう。

IADR の会長として各 Division の訪問など公式の役割を果たすとき、メダリオンを着用するのが取り決めになっている。それゆえ旅行中にメダリオンを紛失しないように配慮する必要があった。写真 28 は旅先ではないが、記念として撮ったものである。資料 7 は IADR から公式文書発送時に用いられた手紙の用紙である。ご協力頂いた役員・理事の氏名と役割が下方に記されている。東京医科歯科大学の黒田敬之教授も理事のお一人で、2001 年の千葉・幕張で開催される IADR 総会の Local Organizing Committee（LOC）の Chair として活躍された。

4）1999 年の記録

1999 年に入ってからは 3 月に Vancouver、Canada で行われる第 77 回 IADR 総会の会長としての役割を果たさねばならないのでさまざまな準備をした。このときの JADR 会長は大阪大学の岡田　宏教授であった。IADR 総会の開催時期は North America では 3 月または 4 月に、それ以外の国では 6 月に定められてきたので、第 77 回総会も 3 月 10 ～ 13 日に開催された。この時期は日本では学年末の忙しいときであるので、何かとご不便をかけたと思うが、岡田会長を始めとする JADR の役員・理事の先生方にご協力いただいたことを感謝している。

学会は第 28 回 American Association for Dental Research（AADR）総会、第 23 回 Canadian Association for Dental Research（CADR）総会と共催で、University of British Columbia 歯学部長の Dr. Edwin Yen が 19 名からなる Local Organizing Committee の Chair となって開催された。学会では 16 の Group-sponsored symposia、3 つの IADR/AADR と American Association of Dental Schools（AADS）の jointly sponsored symposia、3 つの Hands-on Workshops などを含む 3,605 の演題の発表および Dr. Joseph Vacanti の Tissue Engineering and Biochemistry と題する W. J. Gies Distinguished Scientist Lecture をはじめ 2 つの特別講演、37 の Lunch & Learning などが行われ、6,003 名の参加登録があり活発で意義ある学会となった。この登録会員数は、これ

写真 29．第 77 回 IADR 総会時の Council の一場面。議長を務める筆者。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

写真 30．第 77 回 IADR 総会時の Council での 3 名の JADR 選出の Councilor と KADR 会長。
（左→右）一人おいて大浦　清 JADR 副会長、奥田克爾 JADR 次期会長、Boo-Byung Choi KADR 会長、岡田　宏 JADR 会長（1999-2000）。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

写真 31．Council Dinner に出席された JADR 関係者。
（左→右）黒田敬之 IADR 理事・後に会長（2005-2006）・JADR 前会長（1997-1998）、奥田克爾 JADR 事務局長・次期会長、黒田敬之教授夫人、山田　正教授夫人、岡田　宏教授夫人、岡田　宏 JADR 会長（1999-2000）、大浦　清 JADR 副会長、斉藤　毅 日本歯科医学会会長。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

写真 32．Council Dinner で挨拶する筆者。右端は Council Dinner の進行役を勤めてくれた Eli Schwarz IADR/AADR 事務総長。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

写真 33．開会式での司会進行をする筆者とそのときの背景スクリーン。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

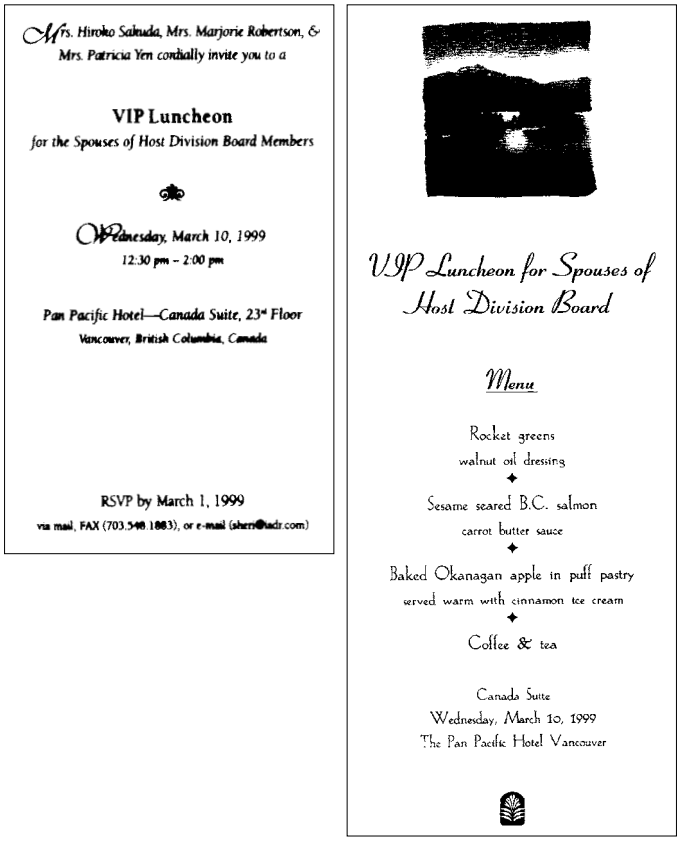
写真 34．開会式修了後に演壇を背景にした IADR 会長、AADR 会長と事務総長。
(左→右)筆者、Paul Robertson AADR 会長、Eli Schwarz IADR/AADR 事務総長。Vancouver, Canada にて 1999 年 3 月

写真 35．Private Reception に招いた JADR 関係者。
(後列左→右)岡田　宏会長(1999-2000)、黒田敬之前会長(1997-1998)・後に IADR 会長(2005-2006)、山田　正元会長(1995-1996)、黒田敬之教授夫人、山田　正教授夫人、岡田　宏教授夫人、前列は筆者夫妻。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

写真 36．Private Reception に招いた JADR 関係者(2001 年の IADR 総会の LOC メンバー)。
(左→右)二人目から大谷敬一現会長(2005-2007)、筆者、須田英明教授。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

写真 37．Private Reception でのスナップ。
(左→右)山田　正 JADR 元会長(1995-1996)、Stephen Bayne AADR 次期会長、John J. Clarkson 前事務総長・後に IADR 会長(2002-2003)、Clarkson 教授夫人、筆者、Bayne AADR 次期会長夫人。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

写真 38．Private Reception でのスナップ。Greenspan 教授ご夫妻と筆者夫妻。
(左→右)John S. Greenspan IADR 元会長(1996-1997)、Deborah Greenspan 教授・2005 年に IADR 副会長に選出された。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。



Mrs. Hiroko Saikuda, Mrs. Marjorie Robertson, & Mrs. Patricia Yen cordially invite you to a

VIP Luncheon

for the Spouses of Host Division Board Members

Wednesday, March 10, 1999
12:30 pm – 2:00 pm

Pan Pacific Hotel—Canada Suite, 23rd Floor
Vancouver, British Columbia, Canada

RSVP by March 1, 1999
via mail, FAX (703.548.1883), or e-mail (sherri@iadr.com)

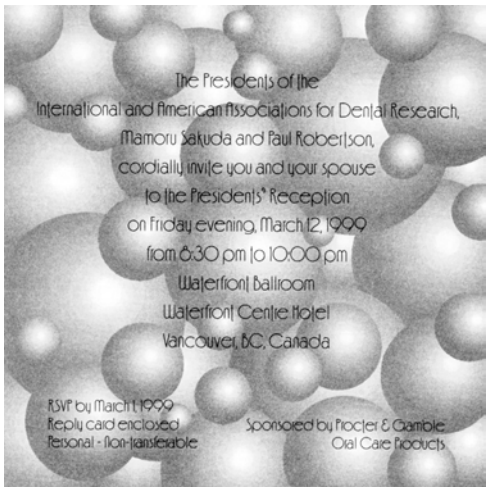
VIP Luncheon for Spouses of Host Division Board

Menu

Rocket greens
walnut oil dressing
✦
Sesame seared B.C. salmon
carrot butter sauce
✦
Baked Okanagan apple in puff pastry
served warm with cinnamon ice cream
✦
Coffee & tea

Canada Suite
Wednesday, March 10, 1999
The Pan Pacific Hotel Vancouver

資料 8．会長夫人の昼食会への招待状(左)とそのメニュー（右)。



資料 9．IADR, AADR 両会長が関係者を招いて共催で行う Reception の招待状。この Reception で会長のメダリオンが次の会長に伝達される。

まで開催された IADR 総会の中で 3 番目に多い参加者であった。この学会の盛会は、AADR 会長の Dr. Paul Robertson、CADR 会長の Dr. Hardy Limeback のご協力はもとより、関係者各位および本部事務職員の暖かく、かつ、熱心なご支援の賜物であったと感謝している。

さて、総会の期間中にはさまざまな公式の会合があり、会長はそれらに出席して役割を果たす責任がある。Council では議長を務めるが、写真 29 は Council の一場面である。写真 30 はその Council に出席された JADR 選出の 3 名の Councilor で、大阪歯科大学の大浦　清教授、東京歯科大学の奥田克爾教授、大阪大学の岡田　宏教授である。Council が終わった日の夕刻から Council Dinner が行われるのが恒例となっている。写真 31 は Council Dinner に出席された JADR 関係者である。日本歯科医学会から Council に observer として出席された斉藤　毅会長も参加してくださった。写真 32 は Council Dinner で本総会の開催にあたってお世話になった各位に御礼の挨拶をする筆者である。

Council が終わった後に果たさなければならない大きな会長の役割は開会式での進行役を務めることである。写真 33 は開会式での司会進行をする筆者とそのときのスクリーンの背景である。写真 34 は開会式終了後のスナップである。

会期中には、2 回の会長招宴のレセプションがある。

一つは会長が宿泊している suite に関係者を招いての Private Reception であり、他の一つは IADR, AADR 両会長が関係者を招いて共催で行う Reception である。このときには会長のメダリオンが次の会長に伝達される。筆者が開催した Private Reception には JADR からは岡田　宏会長、山田　正元会長、黒田敬之前会長らを始め、2001 年の IADR 総会の LOC のメンバーとして活躍された東京医科歯科大学の大谷啓一教授　現 JADR 会長 (2005-2007)、同須田英明教授らが参加してくださった。写真 35-38 はそのときの写真である。IADR, AADR 関係者が多数お越し下さり、楽しいひと時を過ごした。総会の開催中に会長夫人も VIP 夫人を招いて昼食会を開催するが、資料 8- 左は招待状で、資料 8- 右はそのときのメニューである。総会の終わりの夕方には、先に述べたように IADR, AADR 両会長が関係者を招いて共催で行う Reception がある。資料 9 はそのときの招待状である。その Reception 会場入り口での招待者への立礼の場面は山田先生の原稿 (29 頁) に掲載されている。写真 39 は筆者が会長の期間支えてくださった役員・理事を紹介しているところである。その後、メダリオンの伝達が行われ、写真 40,41 は伝達後のものである。AADR 会長であった Paul Robertson 教授とともに大役を果たした充実感を味わい、今後の本学会の発展を祈念した。同時に JADR についても地区学会としての特色を発揮して今後の研究内容の充実を期待した。

会長としての任務を修了した後、あと 1 年 Immediate Past President としての役割がある。Board of Directors Meeting, Officers' Meeting, Council Meeting などに出席し、新会長に必要に応じて助言を与えるというものである。また、副会長候補者の人選にも預かるので、本部との連絡も割合頻繁に行われた。

この間、JADR では、1999 年 12 月に大阪歯科大学の大浦　清副会長が大会長をつとめられて神戸で第 47 回

写真 39．筆者が会長の期間支えてくださった IADR 役員・理事の紹介 — Presidents' Reception —にて。
(左→右)Marjorie K. Jeffcoat 副会長、筆者、Sally J. Marshall 次期会長、Eli Scharz 事務総長、Mark C. Herzberg JDR 編集長、John W. Stamm 会計理事、W. Mike Edgar 理事、Per-Olof Glanz 前会長、Paul Robertson AADR 会長・後に IADR 会長 (2004-2005)、黒田敬之理事・後に IADR 会長 (2005-2006)、Choo Soo Teo 理事。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

写真 40．IADR, AADR それぞれの会長がメダリオンを伝達し、更なる学会の発展を新会長に託す — Presidents' Reception —にて。
(左→右) 筆者、Paul Robertson AADR 前会長・後に IADR 会長 (2004-2005)、Sally J. Marshall IADR 新会長、Steve Bayne AADR 新会長。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

写真 41．メダリオンの伝達後 — Presidents' Reception —にて。
(左→右)Paul Robertson AADR 前会長・後に IADR 会長 (2004-2005)、Alan A. Lowe 本総会 LOC のメンバー、筆者、Barry J. Sessle 元 IADR 会長 (1994-1995)。Vancouver, Canada にて。1999 年 3 月。

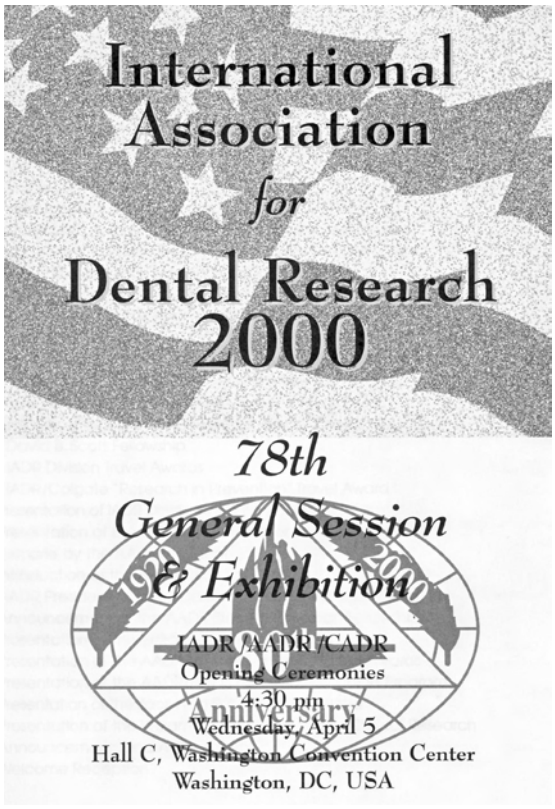
写真 42．第 47 回 JADR Annual Meeting 開催時(神戸)の招待者および JADR 役員・理事。
(前列着席　左→右)Lee 教授夫人、Jin-Yong Lee 教授、河村洋二郎 JADR 元会長(1973- 1974)・名誉会員・第 58 回 IADR 総会(1980 大阪)での名誉会長、Graham Embery IADR 副会長、Grayson W. Marshall 教授、Sally J. Marshall IADR 会長(1999-2000)、Bruce J. Baum NIDCR 研究主任、Baum 研究主任夫人
(後列左→右)筆者、大浦　清 JADR 副会長・大会長、黒田敬之 JADR 前会長(1997-1998)・IADR 理事・現会長(2005-2006)、岡田　宏 JADR 会長(1999-2000)、山田正 JADR 監事・元会長(1995-1996)、川添　尭彬 JADR 監事、柴　芳樹 JADR 理事、奥田克爾 JADR 事務局長・次期会長、南雲正男 JADR 理事、中林宣男 JADR 理事、村上伸也 JADR 幹事・現会計理事。神戸にて。1999 年 11 月。

写真 43．IADR Board of Directors Meeting 後のひと時。
(左→右)黒田敬之 IADR 理事・現会長(2005-2006)、Graham Embery IADR 副 会 長、John W. Stamm IADR 会計理事、Eli Schwarz IADR/AADR 事務総長、Teo Choo Soo IADR 理事、筆者夫妻、Robert (Skip) Collins IADR/AADR 事務次長。San Diego, CA にて。2000 年 1 月。

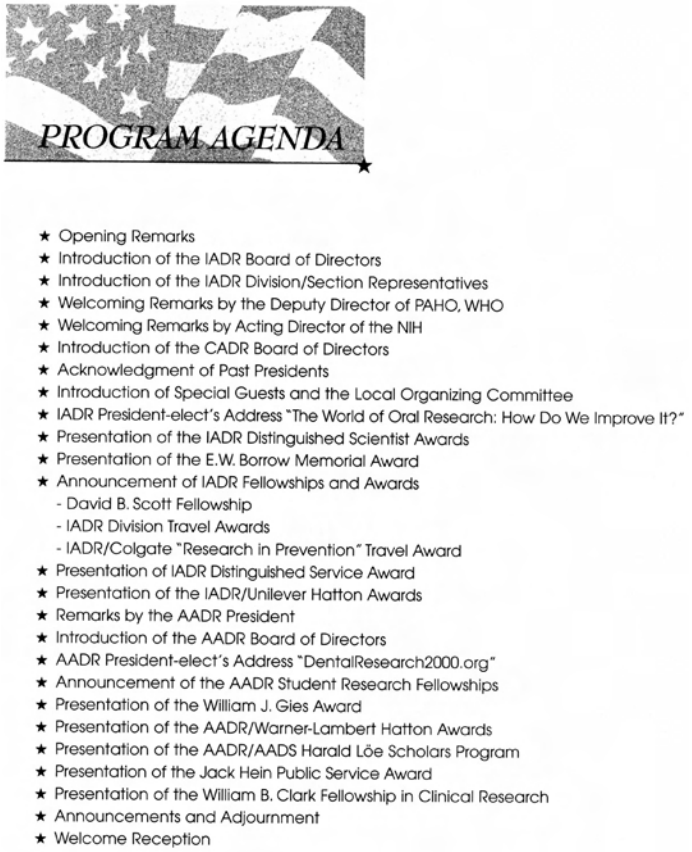
Annual Meeting が行われた。この学会では NIH から National Institute of Dental and Craniofacial Research (NIDCR) の Gene Therapy and Therpeutics Branch の研究主任である Dr. Bruce J. Baum および韓国慶熙大学の Jin-Yong Lee 教授らを特別講演者として招き、Sally J. Marshall IADR 会長(1999-2000)、Graham Embery IADR 副会長らをはじめとする来賓各位の参加を得て、岡田　宏会長のもとで盛大に開催された。写真 42 は理事懇親会のときの記念写真である。なお、この学会での記録は JADR Newsletter 2000-1 January に詳しく掲載されている。

5) 2000 年の記録

写真 43 は 2000 年 1 月に開かれた IADR Board of Directors



資料 10-1．第 78 回 IADR 総会が 2000 年 4 月に Washington, D.C. で開催されたときの開会式のプログラム。1921 年の初代 IADR 会長から 2000 年の IADR 会長に至るまでの歴代会長が写真入りで示されている。



資料 10-2．第 78 回 IADR 総会(Washington, D.C.)開会式プログラムの議事次第。

資料 10-3. 第 78 回 IADR 総会(Washington, D.C.)開会式のプログラムより引用。

資料 10-4. 第 78 回 IADR 総会(Washington, D.C.)開会式のプログラムより引用。

写真 44．Japan Night でのひとこま。
(左→右)筆者、岡田宏 JADR 会長(1999-2000)、岡田　宏会長夫人、Graham Embery IADR 副会長。Washington, D.C. にて。2000 年 3 月。

写真 45．JADR 会長のメダリオン

写真 46．第 79 回 IADR 総会(第 49 回 JADR Annual Meeting)開会式で岸本忠三大阪大学総長が名誉会員証を受け取られる遠景。千葉・幕張にて。2001 年 6 月。

Meeting の後、夕食でくつろいだときのものである。4 月には、Washington, D.C. で第 78 回 IADR 総会が Sally J. Marshall IADR 会長のもと、Vancouver での総会より多数の参加者を得て盛大に開催された。JADR からも多数の参加者があったと聞いている。資料 10-1,2 はそのときの開会式のプログラムである。開会式はおよそこのプログラムの様式に則って行われるので参考になると思って資料として添付した。JADR から選出された Hatton Awards Competitors の氏名もこのプログラムに見られるが、今回の大きな特色は 1921 年の IADR 初代会長から 2000 年の Sally J. Marshall 会長までの歴代会長が写真と共に掲載されていることである。歴史を紐解くときの参考になると思われる(資料 10-3,4)。ところで、IADR 総会では、株式会社 GC が Japan Night という Reception を開催し、関係者を招待しておられる。写真 44 はそのときの写真の 1 枚であるが、岡田　宏 JADR 会長の胸には、JADR 会長のメダリオンがかけられている。AADR をはじめ、各国部会長もそれぞれ会長はメダリオンを持っていて、公式の会合にはそれを着けて参加するのが国際的な慣わしになっている。しかし JADR にはメダリオンがなかった。このことは、IADR 会長として公式行事に出席するとき、JADR の体面が他の部会に対して保てていないと感じ、大変肩身の狭い思いであった。筆者は IADR 会長の間メダリオンを所有していたから、JADR 会長のメダリオンを作ることを思いついた。そこで、大きさを小さくしてはいるが、IADR 会長のメダリオンと似たデザインのメダリオンを専門業者に作成してもらい、お世話になった JADR への恩返しのつもりで岡田宏教授が丁度 JADR 会長のときに寄贈した。写真 45 はそのメダリオンである。メダリオンをつけた JADR 会長の姿を見て大変うれしく思うとともに、JADR の今後の発展を強く期待するものである。

IV．IADR 役員の任期後 JADR50 周年までの時代(2000 ～ 2002)

2000 年 12 月には日本大学松戸歯学部の安孫子宜光教授(2003-2004 に JADR 会長)が大会長として充実した第 48 回 Annual Meeting を松戸で開催された。このときは、Marjorie K. Jeffcoart IADR 会長(2000-2001)、John W. Stamm IADR 会計理事が来日、参加された。Jeffcoart 会長は、特別講演として、“ 患者のより良いケアのための新しい科学：研究室から臨床へ ” と題する興味ある講演をされ、韓国からは、ソウル国立大学の Byung-Moo Min 教授が口腔癌の発現に関する分子レベルでのメカニズムについて特別講演をされた。なお、この学会での記録は JADR Newsletter 2001-1 January に詳しく掲載されている。この学会で、筆者が岡田　宏 JADR 会長(1999-2000)から JADR の名誉会員に推挙されたことは、文字どおり誠に名誉なことであり、この場を借りて JADR に感謝の意を表したい。

2001 年 6 月には JADR の第 49 回 Annual Meeting が第 79 回 IADR 総会に合体して行われた。

IADR は Jeffcoart 会長でのときであり、JADR は奥田克爾会長(2001-2002)のときである。黒田敬之組織委員長の努力が実って、日本の歯科医学研究の進歩に大きく貢献する学会となった。内容はもとより余剰金も出る学会となり、運営面でも成功であった。この学会で、大阪大学の岸本忠三総長が W. J. Gies Distinguished Scientist Lecture として “Cytokines in Health and Disease” と題して講演をされ、多くの参加者に深い感銘を与えていただいた。ご多忙のところ時間を割いていただき、大変感謝する次第である。この機会に、岸本総長を、元 IADR 会長の役割として IADR の名誉会員に推挙し、この学会の開会式でお受け頂いた。写真 46 は開会式で名誉会員証を受け取られたときのものである。岸本総長は 1998 年に文化勲章を受章しておられる世界的な科学者であり、わけても IL-6 に関する研究の第 1 人者である。IADR の名誉会員は、会員外で歯科医学の研究に大きな貢献をされた研究者に贈呈されることになっている。

資料 11-1. IADR Vice President および President-elect のときに使用したバッジ。

資料 11-2. President および Immediate Past President のときに使用したバッジ。

JADR の第 50 回 Annual Meeting を仙台で渡辺　誠大会長のもと 2002 年 11 月 30 日から 12 月 1 日にかけて開催された。この学会は 50 周年ということで、記念式典や市民フォーラムを併催するなど特別の企画が持たれ、活発な学会であった。この学会での記録は添付した JADR Newsletter 2003-1 January に詳しく掲載されている。奥田克爾会長が JADR の 50 年を締めくくり、2003 年からの新たな JADR の開幕を安孫子宜光新会長にゆだねるにふさわしい学会となった。

昨今の JADR 会員の活躍を見ていると、学会発表の参加は当然のことながら、委員会委員や研究グループの役員としての参加もこれまで以上に活発となったように思われる。また、Distinguished Scientist Award を初めとする種々の賞の受賞者を多く輩出しているのみならず、東京医科歯科大学の黒田敬之名誉教授が 2005 年現在 IADR の会長として活躍されていることはご同慶の至りである。

V. おわりに

JADR は、非営利団体である国際歯科研究学会 IADR の 1 分科会であり、専門分科会ではないが、専門分科会の高い研究レベルを統合した総合歯科学会としてますます発展することを希望している。他国部会の発展に肩を並べるというよりも他をリードするような JADR の発展を期待したい。

謝　辞

いかなる組織でも、組織を立ち上げ発展させるには、大変なご苦労が伴うものです。JADR を発足させ、今日に至るまで並々ならぬ熱意と努力で発展させてくださった諸先輩に深甚なる敬意と謝意を表したいと思います。また、本稿を書く機会を頂いた大谷啓一 JADR 会長および奥田克爾編集委員長に厚く御礼を申し上げます。

さらに、本稿の写真には、JADR 元会長の山田　正東北大学名誉教授をはじめ多くの皆様からいただいたものが含まれています。どの写真をどなたからいただいたかの記録が定かでないので、誠に申し訳ありませんが写真ごとに撮影者に御礼を申し述べることが出来ません。写真をいただいた皆様のご厚意に対して心から御礼を申し上げます。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

JADR の将来

JADR 名誉会員（1995 ～ 1996 年会長）
東北大学名誉教授
山田　　正

私が初めて国際歯科研究学会日本部会との接触を持ったのは、河村洋二郎先生が開催された宝塚での例会です。IADR 会員となるためには、それなりの業績が必要だということで、Archives of Oral Biology に 2 報ほど論文を載せた後に、会員資格を認められ、宝塚という独特の雰囲気を持った街で、日本歯科界の一級の研究者と膝を交えての討論をすることができました。田熊庄三郎、須賀昭一先生など硬組織の一級の研究者に大学院を出たばかりの私が愚問を発することができ、また、討論の時間も各発表ごとに 20 分くらいあるという独特の雰囲気を持った、学会と言うより、研究会的な集まりでした。その後、箱根の研修センターに缶詰状態で例会が行われたときは、河村先生が中心となって日本で初めての IADR 総会を開催するというので、寄付金が集められ、私も当時の薄給から、大枚をはたいて寄付したのを覚えております。しかし、日本で IADR 総会を開催するためには、多くの会員が必要だということで、会員を増やす努力がされ、また、米国で IADR 会員となって帰国する人も多く、これまでの資格限定的なサロン風の雰囲気は失われ、通常の学会とあまり変わらなくなってきたのは残念でした。後に、私が磐梯の山のなかで JADR 総会を主催した意図も、何とか昔の雰囲気の一部でも復活させたい意図がありました。

JADR の運営に関わり始めたのは、Newbrun IADR 会長の推薦で、私が Young Investigator Awards の選考委員に選ばれた頃です。当時の佐々木哲会長が、東京に IADR 総会を誘致しようとしており、IADR 本部役員に知り合いが多い私を JADR の運営に係わらせようとして、私を理事に推薦されたのではないかと、推察しております。国内の整備は、黒田敬之先生が色々努力されていましたが、私は、佐々木会長、作田守会長のもとで、IADR 総会の機をとらえては、IADR の運営に関わる友人達に接触してきました。もちろん、黒田先生も国外での努力もされていたようでした。

この頃、韓国部会と JADR の間で、二人の特別講演者を交歓することにしており、二人という人数は、JADR としては、負担が大きいと感じていた状態でした。しかし、交歓を一人にしたいと言い出すのは、なかなか言いにくいことです。普段、ずけずけものを言う私ならばと、佐々木会長は考えたのでしょう、私に猫の首に鈴をつける役目を仰せつけられました。私が韓国へ招待された機に、佐々木会長の意を受けて、韓国部会の幹部と話し合い、二人の交流を一人にしていただきました。韓国歯科界のボスである金周煥先生と私にトゥースフレンドリー協会の活動を通じて親交があったのも幸いでした。

1995 年、予定外で、将に晴天のへきれきで JADR 会長に就任しました。規約の改正、シンガポールでの IADR 総会の共催(この総会は JADR 総会も兼ねて行われる形となり、この年は、日本での JADR 総会は開かれませんでした)、幕張での IADR 総会への準備など多くの問題がありましたが、何と言っても日本人で初めての IADR 会長となるべく、作田先生が副会長に当選されたことが最も印象に残っています。作田先生の当選には、事務局長として私を支えていただいていた岡田宏先生の努力によるところが大きかったのですが、私が作田先生を送り出しかったのには、理由があります。先生のお人柄、業績はもちろんですが、私は先生がいわゆる西欧かぶれ的な面が全くなく、極めて日本人的な考えをされ、振る舞われておられたことです。IADR が真の国際学会であるためには、会がアメリカ的・西欧的な考えだけで主導されていてはいけないと思っていたからです。欧米的な考え方とのすりあわせはもちろん必要ですが、それぞれの国の人たちがそれぞれの国のアイデンティティーを失わずに協調してこそ初めて国際学会と言えると考えていたのです。私自身、IADR の種々の委員会に関わったとき、アメリカ主導を強引に押し進めようとする傾向に、ときにはヨーロッパなどの人たちと協同して、抵抗してきたことがあったからです。立候補を躊躇される先生には、「先生、こんなチャンスに恵まれる人は滅多にいません。大変かもしれませんが、こんなエキサイティングなことがこの年齢になってできることは、先生の一生にすばらしい 1 ページを加えることになるのではないでしょうか」と勝手な理屈を言って口説き落としました。口説きは私、票集めは岡田先生という分担になっていたかもしれません。1996 年の新年早々、作田先生当選のニュースが入ったときは本当に嬉しく思いました。

ご夫妻写真 1．懇親会に会長としてゲストを迎える作田先生(Vancouver にて)

現在の多くの学会は都市で開催され、発表が終わると街へ出かけてしまい、会員同士が親しく交流し、討論する機会が少なくなりました。JADR 総会が、私が参加した頃の宝塚、箱根のミーティングのような雰囲気をもつものとしたいと思い、私が大会長をお引き受けしたときに、教室員の反対を押し切って、裏磐梯の山の中のホテルで開催しました。外に出ても森林しかなく、否応なしにホテルの中での会員同士の交流が促進され、個人的な討論も多くなると考えました。交通不便のため、例年より参加者は少なく、予算もやっとゼロにこぎ着ける状態でした。しかし、心配していた天候も良好で、参加された方は露天風呂での月見を楽しみ、学会を楽しんだようでホッとしました。それ以来、このような試みのないのを残念に思っています。

また、これまで少なかった、本部委員会へ日本部会会員を委員として推薦することにも力を入れ、これは、かなり成果があり、その状態が続いていることに満足しています。ただ、私自身は、JADR 会長のとき、ハットン賞の選考委員を兼任して、総会では忙しく、かなり大変な思いをしました。

JADR を他の学会とは違う魅力を持たせるためには、国際学会としての特徴を生かさなければならないと思いました。そのため、何年かに 1 度は、韓国、中国、東南アジア、オーストラリア・ニュージーランド部会など西太平洋地区で、合同の部会をもつことを考えました。シンガポール総会で知り合った東南アジア部会の幹部、オーストラリア、香港や台湾の有力者とも接触し、中央に位置する沖縄あるいは台湾で合同部会を開催する話しを進めてみましたが、沖縄などは地理的には近くとも、オーストラリア方面からの交通の便が悪く、結局、実は結びませんでした。しかし、中国、東南アジア地域などの歯科医療事情は欧米とは大きく異なります。その辺の問題点を主要テーマにした合同部会は、グローバルな歯科医学の発展には大きな意義があるのではないかと考えています。全世界から参加する IADR 総会では、なかなか焦点が絞りきれないこともあり、これからのこの地区での JADR の主導性が期待されるのではないでしょうか。

いずれにしろ、JADR をいかに魅力的な学会にするか、私の会長時代にも種々議論してきましたが、これからも真剣に取り組んで欲しいと思っています。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

思い出すままに

名誉会員(1997 ～ 1998 年会長)
東京医科歯科大学名誉教授
黒田　敬之

大谷啓一会長ならびに、編集委員長奥田克爾先生から、小生にも JADR 50 周年記念誌に何か想い出を記させていただけるとのお話、誠に有り難いことと存じます。

IADR 日本部会に初めて参加させていただいたのは、1963 年 11 月の日本大学歯学部の講義室で行われたその年の IADR 日本部会の年次大会でした。大学院での仕事の一部を発表させていただきました。日本大学の栖原六郎教授が JADR 会長で、会員は、当時の 7 歯科大学の教授、助教授、講師ぐらいのごく僅かな方だけで、20 人弱の先生方の前で、ふるえながら発表したことを昨日のことのように思い出します。演題申し込みも、会員の故高橋新次郎教授のお名前をお借りして、先生のお名前の後に付録？の様な形でつけさせていただいたものでした。IADR 日本部会の会員になることは大変難しく、会員になりたくてもなかなかなれませんでした。とにかく権威のある学会であるという認識でした。1969 年にミシガン大学成長発育研究所に Research Associate として出張したときに、1970 年の AADR の大会が、ニューヨークであると聞き、Craniofacial Biology Research Group に入会したいと思い、研究所の Director Dr. Moyers に「誰がいま CFB Group の会長ですか」と聞いたら、「自分だよ」と言われ、「入会できますか」と、恐る恐る聞いたら、「自分がサインすればよいから問題ない」ということで、すんなり IADR の Craniofacial Biology Research Group のメンバーになれて、今日にいたっているところです。ニューヨークの Americana Hotel であった AADR の学会で口頭発表して、座長のシカゴ大学の Albert A. Dahlberg（故人、Dental Anthropology の教授で、高橋、三浦両教授と親交の深かった方)からの質問に答え、誉められたことは、未だに鮮明に脳裏に残っていて、学会発表を若いときにすることの意義を今更ながら深く考えさせられる今日この頃です。

さて、記念誌への寄稿でありますが、2001 年の第 79 回 IADR General Session の組織委員長として大会の準備、運営にあたった者として何かを書き残しておくことは責任上必要であると思い、準備経過を、可及的、精細に記してみることにいたしました。今だから話せると言うことも、含まれているかと思われますが、ご容赦願いたいと思います。また、語調も記述的になってしまいますが、お許しください。

2001 年日本開催への経緯

北米大陸外で、IADR の General Session が開催されたのは、1975 年のロンドン大会が最初である。その後、1980 年に大阪大学河村洋二郎先生が、組織委員長を務められて、大阪のロイヤルホテルで第 58 回の General Session が開催されたのが、2 回目で、大成功であった。日本部会の会長

写真 1

写真 2

は、田熊庄三郎先生であった。大阪大会開催にあたっては、日本部会の会員数を増やす必要があり、それまで比較的、closed な学会であったのに、急に会員数が約 600 人ぐらいに増加したのを思い出す。会員一人、一口 5,000 円の寄付を募って、会をサポートした。この年は、IADR の数日前に東京で、大西正男先生が、ICOB の会をホテルニューオータニで開催されている。いずれも JADR の会員数が少なく、いわゆる歯科界の国際学会が珍しかったころで、経済的には大変であったことと思われる。

2001 年東京大会誘致の始動は、遠く 1986 年、第 64 回 General Session がオランダのハーグで行われたときに、日本部会の会長だった三浦不二夫先生が日本で 2 回目にあたる General Session を東京でと話を持ち出されたことに端を発している。余談であるが、この時に初めて、日本歯科医学会会長であった日本歯科大学の真泉先生が、IADR の Council Meeting にオブザーバーとして出席された。また、JADR としても日本歯科医学会の一翼に名を連ねるために雑誌の発行をと考え、歯科評論社から出版されていた、歯科ジャーナルの数ページを割いてもらって、日本部会で発表した抄録を掲載していただいた。これらのことは、日本部会のステータス向上のため、将来への布石として考えられた三浦会長の慧眼といえよう。ただ諸事情が重なり機関誌の発行については日の目を見るにいたらなかった。

1987 年、シカゴでの大会に、常光　旭会長、佐々木　哲事務局長が出席され、正式に東京での開催意志を表明した。その秋には、Central Office の事務局長 John Gray が来日し、会場候補のホテルニューオータニを視察、物価の高いことを指摘し、候補地として適性に難渋を示した。

1988 年、モントリオールでの大会で、1995 年の候補地であった、シンガポール、ソウル、東京のうち、東京は物価が高いという理由から候補からはずされる可能性が高かった。翌年の理事会で決定すると言うことになった。

1989 年、ダブリンで大会が開催される。大橋会長、佐々木事務局長ならびにオブザーバーとして砂田日本歯科医学会会長出席。1995 年はシンガポールで開催されることに決定される。この時に、南アフリカ国籍の入国に対する制限のあるなしが話題にのぼった。大橋会長、佐々木事務局長が再度、2001 年大会の開催に向けて立候補。イスラエルとソウルも立候補した。

IADR の Newbrun 会長から、どこの国籍の会員であっても入国が許されることが条件であり、公的な保証があることが望ましいと言われる。

このことが、JADR の理事会で検討され、1990 年 2 月 7 日付けで、外務省領事移住部外国人課に文書で外国人入国に関する保証の依頼をする。その結果、南ア国籍でもいくつかの項目について宣誓書を出せば、ビザを取得しうると言う文書を入手した。この書類は、必ずしも、事態を保証するものではなかったが、一応公文書の形にして、体裁を整えてあった。

1990 年、General Session は、シンシナチで開催された。大橋会長、佐々木事務局長、砂田日本歯科医学会会長出席。ここで、イスラエルが急に、1998 年開催予定のニースの対抗馬として、鞍替えしてきたので、2001 年は、ソウルと東京だけとなった。ところが、韓国は、南アの入国の件で、保証文書が間に合わず東京が唯一の候補地となり、物価高のことだけが懸念されることとなった。

この時点で、JADR 理事会では、1991 年の大会時に必要なキャンペーンとして、プロモーションビデオの作成、割引パック旅行の可能性、歯科医師会その他関係団体からの支援文書の入手、事務局長 John Clarkson 招待、幕張メッセ、日本観光協会等との交渉、プロモーションパンフレット作成などをスタートした。

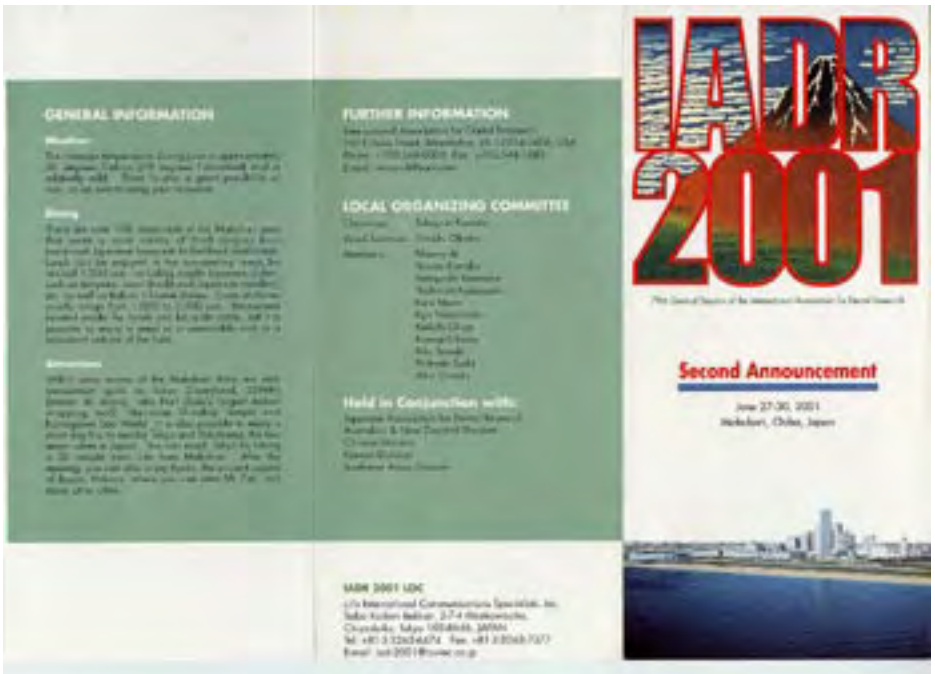


写真 3

1991 年、第 69 回大会は、アカプルコであった。佐々木会長、高江洲事務局長が東京大会誘致の資料を基に、Council Meeting で説明。事務局の Site visit を待って、1992 年に決定することとなった。9 月に、Central Office から、事務局長 John Clarkson, Meeting Director Gwynn Breckenridge が来日、施設設備などを視察する。

1992 年　グラスゴー大会の Council Meeting（佐々木会長、作田副会長、高江洲事務局長出席）で 2001 年東京大会（千葉幕張メッセコンベンションセンター）が、満場一致で決定される。ただし、3 年前に再度 Site visit を行う旨通告される。11 月 IADR 会長 Dr. John Greene 幕張コンベンションセンター視察。

1993 年　シカゴ大会。東京大会の準備をスタートする。JADR としての担当理事は、佐々木前会長があたることとなった。

1994 年　第 72 回 General Session が、シアトルで行われた。この会期中に、IADR 会長 Stephen Wei、John Clarkson 事務局長、Gwynn Breckenridge Meeting Director、佐々木理事との初会合がもたれる。佐々木理事から、黒田理事も陪席をするように要請があり参加する。

打ち合わせ事項メモ：

はじめに、日本側から、組織委員会の活動を開始するに当たり、2001 年の東京大会開催に関して正式文書を送付して欲しい旨伝える。

日本組織委員会任務

1. 近隣部会（韓国部会、東南アジア部会、オーストラリア・ニュージーランド部会など）への Co-host を依頼する。
2. Social event の計画（開会式アトラクション、Ladies program など）
3. サテライト・ミーテイング開催計画
4. Science transfer program の計画
5. スライドプロジェクター、マイクロフォン等の用意、スポンサーを捜す。
6. 業者展示計画
7. 旅行業者との連携
8. ホテルとの交渉
9. 当日の要員確保、アルバイトなど
10. Local account 開設、本部事務局とは別の会計
    募金活動、スポンサーの確保
    約 3 年前に Central Office から準備金として 5,000 ドルが渡されるはず。
    LOC の会計は、Council Meeting で報告しなくてよい。
11. 本部事務局とはこまめに連絡を取ること

Central Office の任務

1. 演題募集、参加者募集、登録など
2. 登録費は全て Central Office の会計
3. 演題選択、プログラム作成、プログラム、抄録集の印刷、発送
4. 余剰金がでれば、12% を LOC にくれる。
    不足の場合；出さないように安全な予算を組んでいる。シンガポールでは、2,500 名を期待しているが、予算は 1,700 名で組んでいる。
    本部と LOC で、募金活動が重ならないようにすること。
5. 航空機については、Official Airline を決める。

以上のような事項の打ち合わせを行った。これを持ち帰り、JADR 理事会で検討し、以下の承認事項を得た。

JADR 理事会の承認事項：

1）開催趣意書の作成（平成 6 年 11 月 18 日付）
2）作田会長が、文部省、厚生省、日本歯科医師会、日本歯科医学会へ趣意書を配布
3）協力業者、JTB、アイシーエス企画への交渉

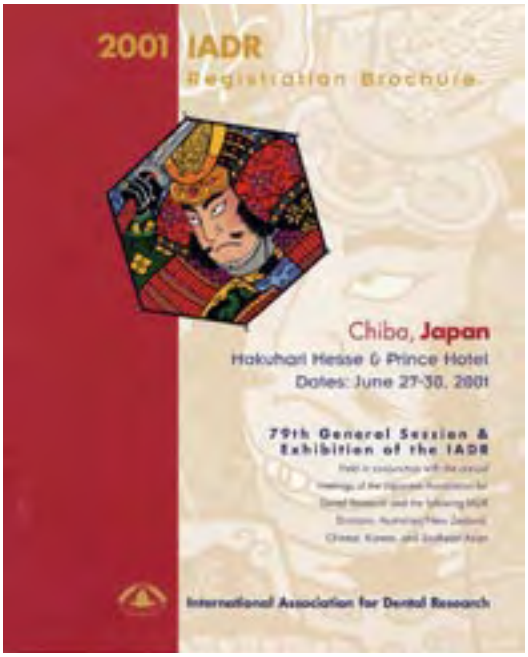


写真 4

写真 5

4)JADR から 2001 年に向けて積立金(2,000 万円目標)
5)事務処理は当面学会事務センターで行う
6)広報活動、準備委員会の設立

1995 年　シンガポールでの General Session に John Clarkson, Gwynn Breckenridge と黒田副会長、アイシーエス企画、JTB でうち合わせ。シンガポール大会の LOC Chair Dr. Teo Choo Soo から Science Transfer Program について情報を得る。

平成 7 年 6 月 7 日付けで、山田正会長名で、日本歯科医師会、日本歯科医学会に準備委員の推薦を依頼する。

準備委員会発足。JADR から、山田　正、黒田敬之、岡田　宏、作田　守、佐々木　哲、奥田克爾、斉藤　毅、須田英明と日本歯科医師会から西村誠氏、日本歯科医学会から見明清氏により準備委員会が構成された。当面の準備委員会の位置付けは、JADR 理事会のもとに動き、連絡委員としては、黒田があたることとなる。

1996 年　サンフランシスコの IADR 会期中に、黒田とアイシーエス企画が、John Clarkson, Gwynn Breckenridge, Robert Collins と概算、学会規模、IADR からの要望について話し合いを持つ。JADR 理事会了承。準備委員には書面で報告。

1997 年　IADR　オーランド。黒田、岡田、村上 JADR 事務局長幹事が、John Clarkson, Eli Schwarz, Robert Collins, Gwynn Breckenridge と Science Transfer Program のスポンサー、会場設営基本構想、業者展示の規模についてうち合わせ。黒田、須田準備委員がアイシーエス企画と共に幕張メッセ、プリンスホテル、ニューオータニホテルなど視察。

IADR　79 回大会組織委員会の立ち上げ。JADR 推薦組織委員、日本歯科医師会、日本歯科医学会推薦組織委員の決定が、この年の先決課題であり、準備委員会の先生方にこれまでの経緯と共に、準備委員会を発展的に改組し、組織委員会を構成していただくと同時に委員長を決めていただくことをお願いした。また、以下の事項が、当面の検討課題であることを連絡して、準備委員会連絡委員としての仕事を終えた。

(1)組織委員会業務の明確化
(2)ニース大会に向けてのポスター、First circular の作成
(3)実行委員会委員の人選、業務内容の明確化
(4)近隣 IADR　Division への Co-host のお願い
(5)組織委員会の任務―予算案、寄付集め、スポンサー獲得、宣伝と勧誘
(6)その他

1997 年 6 月 18 日付けで、JADR 会長、黒田名で、第 79 回 IADR 総会組織委員会委員長の互選の依頼を先に推薦されていた組織委員各位に郵送した。(藍　稔、梅田昭夫、大谷啓一、岡田　宏、奥田克爾、川添堯秋、黒田敬之、小林義典、佐々木一高、須田英明、中村　亮、茂呂　周)

7 月 8 日期限で、全委員より、互選書類が集まり、結果として、黒田が、組織委員長に選出された。

以上が、組織委員会立ち上げまでの経緯である。組織委員会の議事要旨の抜粋、1998 年ニース大会での Central Office との打合メモ、1999 年ヴァンクーバーでの打合メモ、1999 年 6 月 Central Office からの Site visit 時のメモの抜粋を以下に記しておく。

写真 6

第 1 回　1997 年 10 月 13 日

1. 会議運営業務をアイシーエス企画に、旅行、宿泊業務を JTB に委託。
2. 副委員長岡田教授、財務担当須田教授、庶務担当大谷教授
3. 積立金管理 “2001 IADR” 銀行口座へ
4. A/NZ, SEA, KADR, Chinese Section へ Co-host 依頼
5. 経費概算、職務内容、Japan Night の性格(Central Office-GC 発信)
6. Quitessence の第 4 回国際大会と IADR Science transfer program
7. 参加見込み数　国内 3,000、海外 2,000 名
8. 歯科医師会からの補助金交付申請
9. 募金受け皿を、国際観光振興会に依頼

第 2 回　1998 年 2 月 23 日

1. 本部への参加予定人数は 3,000 名に修正報告
2. 募金、広報、企画プログラム、会場運営、宿泊旅行、接遇、登録、展示の各小委員会を設置
3. ポスター、サーキュラー、日程の決定
4. 募金戦略、主催、後援団体、協賛団体
5. GC からの記念シンポ共催の申し入れ

第 3 回　1998 年 6 月 8 日

1. GC 記念シンポは、委員改案は Dental Material Group のシンポジュームを GC がスポンサーとなって行う。本部は GC 案を前向きに受け入れる。

2. ニース大会プロモーション
3. 国際観光振興会へ寄付募金募集要望書提出、審査中

ニース大会での本部との打ち合わせ

1. 収入、支出計画書の本部への提出
2. GC シンポについては、本部としては特別会費を設定して受け入れる。
3. 幕張再視察日程

第４回　1998 年 8 月 24 日

1. IADR 会長、作田先生より Eli Shwarz 事務局長と LOC とのコミュニケーションが良くない、不信感を持っているようであるので、誤解を解くようにと助言
2. John Clarkson 時代の打ち合わせの書簡のやりとりを Eli Schwarz に送付。連絡無し
3. ニース大会の報告

第５回　1998 年 11 月 30 日

1. Co-host Division からは、会期中にそれぞれの Council Meeting Room を用意して欲しいとか、15 ～ 20 のポスターボードを用意して欲しいなどの注文があった。
2. GC の取り扱いについて、委員から LOC としては好ましくない(他の業者との兼ね合いから)との意見あり。本部任せとする。

第６回　1999 年 1 月 29 日

1. 募金活動の行動計画
2. 本部の考え方のずれについてのすりあわせ。

ヴァンクーバー大会での本部との打ち合わせ

1. Schwarz より、業者展示は、日本歯科商工会の運営によるものとして欲しいと要請―クインテッセンスからの 1000 万円の寄付はなくなることは承知―本部主催では赤字になるとの理由
2. GC は木曜日、土曜日に 4 Session を行い、一日、2 日券を発行。
3. 登録料は、230 $ ？　300 $ ？　未定
4. 下見は 6 月

第７回　1999 年 5 月 25 日

1. 業者展示の方法
2. GC から 1200 万円の保証
3. LOC の責任業務の確認(開会式アトラクション、LOC 前夜祭、コングレスバッグ、日本語ミニプログラム、大学ツアー、Ladies program)

本部 Site visit　6 月 8 日～ 10 日　報告

1. 幕張メッセ視察、JDTA、モリタ、クインテッセンスと会合、ICS と打ち合わせ、幕張プリンスホテル下見、ホテルニューオータニ下見
2. ホテル不乱楠、ホテルグリーンタワー、マンハッタンスプリングス下見、ライオンと打ち合わせ
3. ICS と打ち合わせ、LOC、IADR と ICS の契約書を作ること指摘

JTB と打ち合わせ、GC と打ち合わせ(同時通訳等諸費用 GC 持ち)

第８回　1999 年 8 月 27 日

1. 業者展示については、JDTA 側から拒否。ミニ展示の形で、スペース活用の程度で開催することにする。規模縮小
2. 本部では、近辺のホテルがの部屋数不足を指摘し、まだ、開催地の変更の可能性を言ってくる JTB をプッシュ
3. Site visit 中に本部よりの質問に対する返事
    1. JADR 2001 の Host として JADR のもとにあるのが LOC
    2. JADR の積立金の家 1,500 万を IADR に寄付、残金は、LOC と ICS の契約 JADR 独自のプログラムなどのための基金とする
    3. LOC も IADR 同様 ICS と独自の契約を結ぶ
    4. LOC と IADR はそれぞれの契約にもとずき ICS に支払う
    5. JNTO 経由募金は国内でのみ消費する

第９回　2000 年 1 月 31 日

1. ポスターボードはライオンでスポンサー 300 ～ 350 万
2. SEA、KADR、A/NZ Division へのキャンペーン活動
3. 経団連を通じ募金活動開始(目標 1500 万)
4. ワシントン大会プロモーション、国内プロモーション

ワシントン大会での本部との打ち合わせ

1. 業者ブース代一コマ(3.6 m × 3.6 m) 2,000 $
2. 募金活動状況
3. ICS と IADR の契約の見積もり

第 10 回　2000 年 4 月 24 日

1. 日本歯科医師会、日本歯科医学会役員交代があったが、藍、梅田委員の継続。日本歯科医師会財務理事の赤司先生を準備委員会財務担当に追認
2. 開会式アトラクション―和太鼓など
3. 千葉コンベンションビューローの企画協力

第 11 回　2000 年 9 月 11 日

1. 日本歯科医師会から、赤司委員の後任に内田祐丈先生、日本歯科医学会から新に金子譲先生が組織委員に参加
2. 日本歯科商工会からの寄付 200 万円
3. シンポジューム 14 題、Hands-on Workshop 2 題、Lunch & Learning 35 題採用
4. Japan Night 招待者、GC と本部できめる
5. 大会中の大学訪問、東京歯科大学と東京医科歯科大学とする
6. Lion Award 設定第 1 回のためパーテイ開催
7. JADR に会長 Marjorie Jeffcoat と財務理事 John Stam が来日、幕張視察
8. 千葉コンベンションビューローからのサポート：130 万円寄付、海浜幕張駅前の電光掲示板広告、インフォーメーションセンターに、職員 2 名配置、木更津太鼓開会式余興、着付け、見晴園茶会、折り紙などを Ladies Program として用意、謝礼スポンサー Lion
9. 日本歯科商工会会員に個別寄付依頼

第 12 回　2001 年 2 月 6 日

1. 商社展示用案内日本版作成
2. 本部の参加見込みは、予算上の 1700 名より多い 4000 名を期待している
3. JAL 100,000 円寄付 + Official Airline としての契約（無料航空券ビジネスクラス 4 枚、半額航空券 4 枚、割引券の提供
4. 募金活動 21,050,000 円（現在）
5. 喫煙対策
6. 国内プロモーション
7. 新聞クイント、Japan Times の利用
8. 商品のサンプル輸入の制限
9. 開会式に獅子舞追加

第 13 回　2001 年 5 月 14 日

1. 最終募金予定　33,985,000 円
2. 学会終了後、LOC 宛の寄付の残金は、全額 JADR へ
3. GC は本部へ 15,000,000 円寄付、LOC には、日本語プログラムへの広告代
4. 開会式、President Reception への日本側招待者リストを本部へ送る。招待者は開会式で前方の席へ座席を用意
5. Japan Times 掲載の費用は花王とサンスターに依頼

IADR 学会は、2001 年 6 月 26 日から 6 月 30 日まで開催された。学会期間中 6 月 28 日（木）、30 日（土）には、GC 株式会社 80 周年記念シンポジュームが、幕張メッセで IADR との併催事業として行われた。また、6 月 27 日には、IFDEA、JADE および SEAADE 主催で、幕張プリンスホテルにおいてサテラトシンポジュームが開催された。さらに、7 月 1 日から 3 日には、上総アカデミックパークにおいて、IADR の Pulp Biology Group 主催によるサテライトシンポジュームが開催された。

第 14 回　2001 年 8 月 15 日

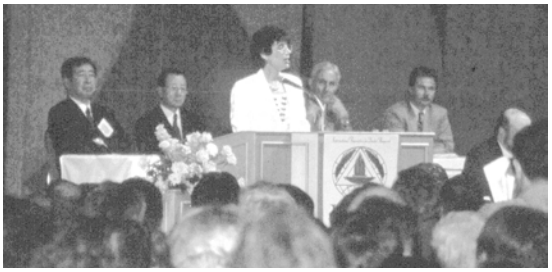
1. 会計決算報告
2. 本部への決算報告
   （以上 2 件については、JADR 保管の資料にあるので必要な方は参照されたい。）

組織委員会の会議は、この第 14 回をもって終了、委員会を解散した。

本学会開催にあたっては、アイシーエス企画の坂東さん、西野さん、千葉コンベンションセンター岩田さん、大川氏のご協力によるところが大であったことを特にここに付記しておきたい。

準備段階から終了までの間、いろいろなことがあった。なんと言っても最大の難事は、予算案では約 4,500 万円の赤字であったことである。

Board meeting では、就任直後の Executive Director の Eli Schwarz が、「どうしてこんなに高い場所を選択し



開会式　Dr. Marjorie Jeffcoat 会長による挨拶。

2001 年 6 月 27 日千葉幕張 IADR 開会式
太鼓のエキジビションがおこなわれた。

開会式　獅子舞・七福神と歓迎の横断幕

着物の着付けショー

折り紙ショー

お茶会

たのだ。今からでも、変更して別の場所で開催すべきである。」と発言していた。LOC としては、経団連を始め、多くの事業団体へ、寄付のお願いに奔走した。特に、財務担当の須田英明先生、庶務担当の大谷啓一先生には、お忙しいなか、足を棒にして挨拶回りにお付き合いいただいた。心から感謝申し上げたい。当時は、不況のまっただ中にあり、どの企業も大変厳しい状況であったので、なかなか募金活動は思うに任せない状態であった。大企業から、1,000 円のご寄付をいただき、ありがとうございましたといって帰ってくるときのむなしさは忘れられない。Central Office も予算を見直し、削れる出費をできるだけ倹約してくれたお陰で、結果的には、IADR としては、約 2,600 万円の黒字とすることができた。考えてみると、JADR からの毎年の積立金が、1,500 万円あったことが、今大会を成功に導いた大きな要因であったと考えられる。JADR 理事会、評議員会ならびに全会員の絶大なるサポートに、心から感謝の意を表したい。

Plenary lecturer として、大阪大学総長岸本忠三先生、川崎医科大学教授梶谷文彦先生お二人の講演をいただくことができた。また、JADR 岡田会長主導のもと、JADR 主催の二つのシンポジュームが多くの参加者を国内からも吸収し、大成功であったことは、学会のあり方を示唆する意味でも重要なポイントであった。

文部省、厚生省、日本歯科医師会、日本歯科医学会、東京都歯科医師会、千葉県歯科医師会、日本学校歯科医会、日本歯科衛生士会、日本歯科技工士会、加えて、54 におよぶ関連学会さらに、日本歯科商工会の協賛を得たことも有り難いことであった。

会期中に、大阪の入国管理局から電話があり、モンゴルから、数名の者が IADR の学会に参加するといって入国しようとしているが、不法入国の疑いがあるので問い合わせがあったことにも驚かされた。モンゴルからの留学生に問い合わせたが、不明であり、強制送還されたものと思われる。

Ladies program も、着付け、折り紙、お茶会、書道、見浜園ツアー等会期中ほとんど満席の状態であった。

近隣大学見学ツアーも、東京歯科大学、東京医科歯科大学のご協力を得て、盛会裡に終了できた。

2001 年 IADR Reports Vol 23-1 に載った、President Graham Embery の挨拶の抜粋をもって、本記念誌への寄稿の筆を止めたい。

“A long with many IADR Members, I have now arrived back from Chiba invigorated by a high level of science and hospitality “ par excellence”. From comments made to me and from my own perception of the Chiba meeting, it can only be regarded as a great success. Congratulations must go to the Local Organizing Committee and to all members of the Central Office Staff, who performed such an excellent organizational event for us.”

JADR の思い出

JADR 名誉会員（1999 ～ 2000 年会長）
大阪大学名誉教授
岡田　宏

JADR の事務局長にとの依頼が東北大学の山田先生（JADR 会長、1995 ～ 1996）から有り、一瞬「私が？」と自分の耳を疑いました。しかし私でも何かのお役に立つのであれば厭わずにお役を引き受ける歳にもなったと思い直し、覚悟を決めました。山田先生のお名前はよく存じてはおりましたが、それ迄先生とはほとんど面識がなく、ただ 15 年前の 1980 年に河村洋二郎先生（大阪大学名誉教授）が大阪で主催されました IADR（International Association for Dental Research）総会で、私がその頃大阪大学に帰任した事もあって、専門外の領域の chairman を仰せつかり、山田先生の教室からの演題を Dr. W. Loesche と担当致したことがありました。先生とはその事だけが直接の接点でしたので不思議なご縁を感じたものでした。

事務局長を引き受けますや否や、山田先生から「作田　守先生（当時大阪大学教授）を IADR の Vice-president 候補として推挙したい。JADR で応援する」と言ってこられました。正直、大変な時に事務局を担当させられ、何かに嵌められた思いでした。当時私は IADR の Nominating Committee（各国からの Vice-president 候補者を選考して数名に絞って IADR の理事会に推挙する委員会）の委員を勤めていました。そんな事情から IADR は国際学会なのだから本部役員もいつも欧米からではなく、アジアを含む国際色豊かなものになってほしいという夢のような希望を抱いていました。しかし Vice-president に当選する事は並大抵では無い実状もよく理解しておりましたので、作田先生に立候補願っても果たして JADR が後押し、目的が果たせるのか？大変不安でした。

先の見通しが皆無でした。楽天的な山田先生、アバウトな私。その御神輿に乗られる作田先生には大変申しわけなく思いました。しかし作田先生を候補者として担げば、曲りなりにも JADR に一つの努力目標を設定する事になり、JADR の会員数の増加に繋げて行けるのではないか。作田先生にはお叱りを受けるような発想が私の脳裏をかすめ、こうなった以上はただ我武者らに走るだけと決心いたしました。結果は先生のそれ迄の IADR での御活躍（とりわけ IADR Strategic Plan の Task Force でのメンバーとしての御活躍が本部役員の注目を引いたものと思っています）があり、さらに会員皆さんのご支援が有って見事にご当選下さいましたので、それは単なる杞憂に過ぎず、私も切腹を免れました。

私が JADR のメンバーになったのは昭和 48 年の宝塚での第 21 回、JADR の総会でした（これも山田先生と時を同じくするようで、山田先生とは不思議なご縁を感じま

す)。当時の学会は貴族的、サロン的な雰囲気で、閉ざされた学会との様相が強く、その上専門的な学術的興味は自分が所属する専門学会には及ばないという感じでした。そんな印象を持ったものですから、それ以降は JADR に参加する機会がほとんどなくなっていきました。しかし自分が所属する Perio の国際学会(International Conference for Periodontal Research, ICPR)は歴とした IADR の分科会であり、その為に 1992 年大阪で私が ICPR を主催した時には、当時の JADR の事務局長の高江洲先生(東京歯科大学)に JADR を代表してご来臨頂き、歓迎のご挨拶を頂戴いたしました。そんな事も有り国際的な研究活動は歯科医学においては JADR を基点として IADR ないしはその分科会で御活躍いただくものだと確信しておりました。

JADR はそのような位置に有りながら会員数が少ないのは皆さんにとって JADR や IADR についての情報不足だけではなく、学会自体に魅力が乏しいからだと感じておりました。JADR は歯科医学の総合学会で有りながら、それが魅力無く興味が湧かないのは JADR の運用に原因があるように思いました。たとえば総合学会でありながら専門領野の研究の単なる寄せ集めで参加者の知的興味をそそる様なプログラム構成でないことも原因の一つと思いました。JADR を歯科医学の研究者にとって専門を超えて学術的に魅力の有る学会にする事が引いては作田先生を後押しする事だと確信した次第です。山田先生以下、私が在任した期間、素晴らしい理事のメンバーに恵まれました。皆さんが目的を同じくして対処して下さり、この所期の目的の達成に向けてスタートが切れましたことは幸せでした。そして今日の JADR の発展がもたらされたものと自負しております。しかし私達 JADR の歴史的発展過程の一時期に携わっただけでその成果の総てはこれまで JADR にかかわってこられました先生方に負う所が大で、深く感謝しなければならないと思っています。

以下、JADR のターニング・ポイントとなった項目(我田引水的なものかもしれませんが)を記して簡単に思い出を綴ってみたいと思います。

1. Newsletter for JADR の発刊

これは IADR が年 4 回発刊している IADReports を真似て年 2 回発刊致しました。単なる報告ではなく皆さんの知的刺激になるような内容を盛り沢山とし、事務的報告は簡単に止めました。JADR は国際学会、IADR やその分科会で活躍する起点の一つである事をお知らせするために IADR や JADR の学会活動内容を会員の皆さんに衆知するよう勤めました。そしてその内容をより学術的に魅力溢れるようにと関連する国際学会の活動内容なども鋭意盛り込みました。又若い研究者の皆さんに関心を持っていただくようにと、IADR の学会活動報告を若い先生に依頼したり、若手研究者向けの IADR の学術奨励賞は漏らさず案内したりいたしました。そして時には科学する楽しみを提供したく、鈴木不二男先生(阪大名誉教授)に「硬組織形成機構に関する一断章」、久保木芳徳先生(北大教授)に「オランダ科学の伝統と歯科医療改革—日本が学び残している国」と言ったタイトルでご執筆いただいたことも御座居ました。Newsletter を介して各大学の評議員の先生方に JADR の宣伝もお願いしました。とにかく会員増に繋げ度いとの思いでした。

この思いは IADR の事務局長、Dr. J. Clarkson にも認められ、1996 年 Washington DC で開催されました IADR 後援の国際シンポジウムで彼にお逢いした時、私を彼のスタッフに JADR の傘上げに頑張っている事務局長と紹介してくれました。Newsletter は JADR の活動を知らせる目的で IADR 本部にも送付致しており、彼が日本語が読める筈は無く、外交的賛辞とはいえ JADR の運用に関心を持ってくれていたことに感激しました。そこで Newsletter も目次だけでも英語で書かねばならないと反省した次第でした。現在目次は日本語と英語が併記している所以です。

2. 会則の改正、日本学術研究団体への登録など

JADR は IADR の日本部会として IADR 本部会則がそのまま適用されてきました。そして日本語版の会則は JADR 付則として簡単なものが有ったに過ぎません。そこで JADR の発展のために本部の会則を準用しながらも独自の会則を作成する事に致しました。会が更に発展するためには学会運用の実情に即して会則は適宜改訂を行う必要があり、昨年改訂が行なわれた事は学会の発展の上からも大変嬉しい事であります。

JADR の基盤は各大学および研究所に有りますが、また専門分科会に所属する研究者グループも組織出来れば嬉しい限りです。前者は評議員制度を設けて組織化されていますが、後者は今後の課題かと思われます。

JADR は学会独自の機関誌を持たない事から日本歯科医学会の専門分科会としても認知されてきませんでしたが、諸先輩のご努力が実り、日本歯科医学会の国際関係支援団体として認知され、財政的な支援を継続して受けて参りました。諸先輩のご努力に敬意と感謝を申し述べねばなりません。しかし、Newsletter の発刊も有り、J. Dental Research が JADR の学会機関誌ですので、平成 11 年(1999)には日本学術会議の学術研究団体として認知され名実共に我が国における学術研究団体のなかに歯科医学の総合学会の地歩を築いたものと考えます。

3. 若手研究者の奨励賞推薦基準の作成

例えば JADR からの Hatton 賞候補者の推挙に当たり、公平に審査できるよう、研究内容などの評価方法を基準化し、審査はこのマニュアルに従って理事全員が審査委員となって行われています。将来 JADR 独自にも若手研究者を育成奨励する制度が導入されればと願っています。

4. JADR 総会を歯科医学発展のマイル・ストーンに

夫々の専門分野の研究者が他の専門分野の研究から知的に刺激され、自分の専門分野を多面的総合的に俯瞰する、そんな発想思考が構築できる魅力的な口腔科学会へと脱皮

したいとの想いでした。私の卓上には今、第 53 回 JADR 総会の案内が広げられています。JADR の今日の発展を目の当たりにする想いです。

この様な JADR の発展は皆様のご努力の賜物と感謝すると共に今後も更なる発展を願う次第です。

そこで蛇足でしょうが、私が JADR の会長を辞した時、「感謝と期待」と題して Newsletter に投稿した文章の末尾を一部加筆修正して以下に再録させていただき、JADR の今後の更なる発展を期待したいと思います。

［顎顔面口腔領野の病気や生理現象が色々な他の専門分野の研究者にも興味を持たれ、それが科学する情熱と喜びの対象となり、本会(JADR)がそれらを熱っぽく、それぞれの専門の立場を超えて語り合える学問研究の場となれば、口腔科学が一段と飛躍発展することでしょう。その時にそれは間違いなく健康科学や生命科学の一翼を立派に担うものと期待されます。］

益々のご発展を祈念して擱筆します。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

節目での思い出

2001 ～ 2002 年会長
東京歯科大学教授
奥田　克爾

1．IADR 日本部会報・Newsletter から

国際歯科研究学会日本部会の部会報は、1973 年からスタートしている。役員として下記の先生が担当されておられた。

President	河村洋二郎
Immediate past president	榎　　恵
Vice-president	川原　春幸
Councilors	大西　正男
	須賀　昭一
Executive secretary	船越　正也
Secretary treasurer	田熊庄三郎

このメンバーにおける第一回 Council Meeting では、具体的運営事項を規定する Bylaw 素案づくりを開始したと記載されている。IADR 日本部会発足から 21 年目にあたり、会費も 500 円から 1,000 円に値上げされている。会計報告から推察すると会員数約 100 名で、第 21 回日本部会は宝塚ホテルで開催されている。会計支出報告に拍子木 4,000 円とある。国際学会での発表終了合図が、拍子木であったのか、日本部会の歴史を感じる。

1975 年から 4 年間大西正男先生が会長になられ、会費も 2,000 円に値上げされている。会員数も 290 名と増え、1976 年日本歯科大学での 24 回総会での演題は 50 で参加者は 222 名であった。また、IADR の Science Award 受賞者に、河村洋二郎先生と田熊庄三郎先生が選ばれておられる。

1979 年から田熊庄三郎先生が会長を務められた。そして、1980 年にその数年前から河村洋二郎実行委員長をはじめとして準備してこられた第 58 回 IADR 大阪大会がローヤルホテルで、6 月 5 日から三日間開催された。出席者数 28 カ国から 321 名、日本人 1,021 名と記録されている。当時 IADR 日本人の会員数は、600 名でアメリカ合衆国、イギリスに次いで 3 番目となっている。

1981 年からは森　政和先生が会長を務められ , この年に IADR, Japanese Division が Japanese Association for Dental Research と改称された。そして、日本からの IADR への参加者も増加の一途であった。1982 年第 30 回 JADR 記念大会には、当時の IADR 会長 A.H.Melcher 博士の特別講演などがもたれた。また、この年から Newsletter の発行がスタートしている。

1983 年から須賀昭一先生が会長に就任され、正会員は 671 名になっている。第 31 回 JADR 大会は、出題も 100 題となり発表も 2 会場となっている。

1985 年からの詳細は、歴代 JADR 会長の依頼原稿で把握頂くことができると思います。JADR Newsletter は、それまでの事務局が、事務局長の先生の講座などに置かれていたためもあって、残念ながら発行されなかった時があった。そのような反省を踏まえて 1995 年から JADR 事務局は、学会センター内に置かれることとなった。それ以降の Newsletter は、きちんと発行され管理されている。現在は、〒 532-0011 大阪市淀川区西中島 5-5-15　新大阪セ

写真 A．幕張大会歓迎会では、黒田 LOC 会長の発声での鏡割り。大会を通しての盛り上がった IADR のスタートになった。

写真 B．幕張大会 Japan Night 参加者を迎える GC 中尾　眞社長と JADR 奥田克爾会長ご夫妻。

ントラルタワー 8F（株）コネット アカデミック プラザに事務局がおかれ、JADR 役員を含むすべてが、多くのエネルギーを学会の活性化に繋がる運営と研究に使えるようになってきたと確信している。

2. 事務局長として

JADR は、1995 年の第 73 回 IADR Singapore 大会をコホストした際、日本からの発表演題数が部会単位で最も多かった。また、IADR の Vice President に作田　守先生が当選され IADR 会長を務められる事になった。そして、IADR 各種委員会に多くの JADR メンバーが加わり、さらに IADR の Award 受賞者も枚挙にいとまがないようになった。そのような中で、2001 年第 79 回 IADR 幕張大会開催が決まり、当時の JADR 会長黒田敬之先生が Local Organizing Committee を立ち上げられた。その気運の高いおりに、岡田　宏 JADR 会長の下で事務局長をやらせていただき、Newsletter などを担当していた。岡田会長は、「歯科医学は、口腔、顎顔面に基盤を置く健康科学であり、この領域における生命現象や生物現象を考究する学問であり、その研究成果が生命科学や健康科学に貢献するものでなくてはならない領域科学である。高齢化社会での生き甲斐を創造する科学としての位置も付加される。」などと、当時の Newsletter に JADR への熱い思いを書かれておられる。私は編集に際し、多くの会員に原稿を依頼し、IADR 大会の報告などを受けた。類似した記載を避けるために、勝手に省いた。そのため、報告者の告げたい意図がぼやけるという批判をうけた。あらかじめ、その旨を伝えていなかった自分の勇み足として反省すると共にお詫びを申し上げたい。

3. 第 79 回 IADR 幕張大会

「幕張大会を成功させよう」が JADR の合い言葉の 2001 年、2002 年会長をやらせていただいた。自分の人生で JADR 会長のときが最も自分が成長したと考えています。学ぶことばかりの 2 年間でした。IT 時代となり海外との交流や情報収集などは、想像を遙かに超えるスピードで簡単になされるようになった。しかしながら、研究者同士が直接討論することの意義は高く、学術大会のサポートに努めました。

IADR 幕張大会は、Local Organizing Committee 委員長の黒田先生はじめ献身的な働きで大成功でした。このことは、多くの先生が書かれ、記録もありますので、ホストであった会長として成功裡に終えたことの感謝でいっぱいであるとだけ書かせていただくこととした。

IADR 大会においては、Japan Night が開催される。スポンサーは GC 株式会社である。IADR メンバーには、Japan Night は格別料理が素晴らしいという評価がなされている。来場者には GC 社長中尾　眞ご夫妻が笑顔で迎えてくださる。

4. さらなる IADR との連携強化

JADR の IADR における役割に加えて、日本歯科医学会での立場などから、現在の会則に変更させていただいた。IADR は密接な連携を強化するなどの目的から、IADR だけでなく JADR の会計納入なども一括でなされることになった。また、Japan, Korea, China, South East Asia, Australia/New Zealand が Pan Asia-Pacific Federation (PAPF) の設立に向けた準備を進め、2003 年第 81 回 IADR Gothenburg 大会で承認され、会長に安孫子宜光先生が就任された。2006 年の第 86 回 IADR Brisbane 大会での第一回 PAPF 大会が開催されることになっている。

5. 第 50 回 JADR 総会、学術大会、記念式典

2001 年 Newsletter の第 2 号に、大会長をお願いした故古賀俊比古先生は、「2002 年 JADR 総会は 50 回目という記念すべき大会ですので、多くの会員の皆様ならびに関係者の方々のご参加をお願いいたします。」書かれた。ところが、次の Newsletter では「古賀俊比古理事の急逝の悼みを超えて」を JADR 会長として書くことになってしまった。今もって、痛恨の極みである。

急遽、第 50 回 JADR 大会長を渡辺　誠先生にお願いした。そして、古賀先生が播かれた種の芽を開花されている先生にスピーカーをお願いして、「古賀俊比古先生メモリアル・シンポジウム」を組んでいただいた。渡辺先生には、学部長のご多忙にもかかわらず、公開講座、シンポジウム、特別講演など盛り上がった記念すべき学術大会を成功させてもらい、いまもって感謝でいっぱいである。その招待特別講演者であった E.T.Lally 教授は、第 82 回 IADR Hawaii 大会で A Tribute to Toshihiko Koga シンポジウムを企画され、私も司会を務め Mutans 関連研究の将来などを討論し、PubMed などで古賀先生は不滅であり、いまだに私たちに語りかけておられることを実感した。

古賀俊比古先生のことに関しては、逝去される前に 2000 年の Journal of Dental Research, Vol. 79, 7-12 において DISCOVERY! 欄において、The Road to Preventive Dentistry —The Personal Scientific Experience of Japanese Dentist が掲載されている。う蝕細菌学の第一人者である古賀先生が歯周病原性細菌についても世界をリードする分子生物学者であることを知ることができる。

写真 C. 古賀俊比古理事。

JADR50 周年記念式典は、大浦　清 JADR 副会長の企画でなされた。大浦先生の司会で IADR 会長 John Clarkson のメッセージがあり、お招きした歴代の JADR 会長をなされ、今日の隆盛に尽力された名誉会員の河村洋二郎先生、三浦不二夫先生、作田　守先生、山田　正先生からエピソードを交えた感銘深い記念講演を戴いた。私たちは、さらなる JADR、IADR での活躍を願っておられる先人の期待を裏切らないように努力していかなければならない。そして、世界に羽ばたく若い歯科医学研究者の輩出を支援できるように頑張りたい。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

想い出と感謝

2003 ～ 2004 年会長
日本大学松戸歯学部教授
安孫子宜光

想えば、1980 年に恩師の滝口久先生から IADR、JADR に入会するように命じられて学会員にして戴きました。当時、IADR 学会会員の申請には、まず JADR に会員としての資格の評価を受ける必要がありました。今でもよく覚えていますが、具体的には論文発表が２つ以上あって、できれば国際論文、また学会発表も国際学会が望ましい、という内容だったと想います。また、学内で著明な学会員の教授の推薦もお願いする必要があって、それらの書類を揃えて申請書を出しました。幸いに Journal of Dental Research にいくつか論文があったのと、すでに IADR 総会で数回発表していましたので、無事に学会員になることができました。当時 IADR 会員登録に申請されたある臨床系の先生が、要求されている業績が不足で入会を却下されたと大変憤慨されていたので「していただいた」という表現はあながち大げさではなかったのです。学会員になってからは、JADR、IADR の総会、大会に毎回参加するようになり、また JDR の Editorial Board（1997-2000）としてお手伝いさせていただいてはおりましたが、学会の会務運営には正直いってほとんど無関心でおりました。その後、1996 年に評議員になり、岡田　宏 JADR 元会長からお声をかけていただいて 1999 年に JADR 理事会の末席に加えていただきました。また、第 48 回の大会を松戸で開催する機会を与えていただきました。これを機に元 IADR 会長の作田　守先生、現 IADR 会長の黒田敬之先生、岡田宏先生、前 JADR 会長の奥田克爾先生、理事会の諸先輩から IADR の実体、IADR Division としての JADR についての意義など多くのことを勉強させていただきました。その後、2001-2002 年の間、事務局長、そして 2003-2004 年の間、会長を務めさせていただきました。

就任当初、事務能力に欠けている小生には余りの大役に重責を果せるか心配でおりました。会長任期中の大きな出来事としては、IADR/JADR 会費の IADR central office での一括徴収の執行、Program book、CD-ROM Abstract 配付のみになり、従来の学会誌 Journal of Dental Research 通巻の Abstract book は廃止、Pan Asia-Pacific Federation（PAPF）の設立、そして日本学会事務センターの破産などがあり、目紛しく時が過ぎたというのが実感であります。なかでも学会事務センターの破産では、何度か破産管財人の会議に出席したりしてかなり苦労いたしました。財団法人日本学会事務センターが各学会からの預かり金を運用に流用していたことが発覚し、その後、民事再生法への申請を行いましたが、結局、却下されて事実上倒産ということになりました。何千万単位で損失した学会もありました。幸いなことに３年前に監査の亀山洋一郎先生が、学会運用に必要な金額を残して JADR の銀行口座に移す事を提案して下さり大きな損失から免れました。改めて亀山先生に感謝申し上げます。

任期中、正直申し上げて、IADR 総会での Council meeting、各種委員会行事の出席、JADR の事務処理を何とかこなすのが精一杯で、これまでの会長先生から引き継がれてきた想い、とくに総合歯科医学の国際学会 JADR のさらなる発展にどれだけ寄与できたか甚だ不安に感じております。

会長として、いろいろ経験させていただいて、今もっとも感じますことは、IADR Japanese division としての JADR の存在と国内における JADR に対する認識の余りに大きいギャップであります。IADR 総会の Council meeting、諸行事、委員会に出席いたしますと、紛れもなく JADR は日本の歯科研究界の代表であり、AADR とともに、歯学研究の国際社会のなかでリーダーシップをとらねばならない重い責任を感じます。国内的には、JADR は日本歯科医学会の専門分科会ですらないのが事実でありながら、一旦 IADR 総会で世界にでますと日本の代表としての重責を負わねばならない、という違和感があるのは否定できません。この違和感の解決は、短期的には困難でありますが、JADR 設立の 50 周年を迎え、JADR が歯科医学関連学会を統括する国代表として国際的に活動できるよう具体的に考えていかなくてはならないと感じます。

JADR への期待

IADR から JADR へ期待すること

IADR 会長，東京医科歯科大学名誉教授
黒田　敬之

大谷会長、奥田編集委員長お二方からのご依頼ということで、表記の題で原稿を書くことになりましたが、大変おそれ多いことだと思っております。

IADR が現在抱えているいくつかの悩みにつきましては、JADR ニュースレター 2005 年 2 号に書かせていただきましたが、とくに、JADR との間にある問題ということではありませんでした。

誰かに、何処かに、なにかを期待するといった類の原稿は、つい、口幅ったい表現になりがちで、JADR 会員の先生方に、顰蹙を買う結果になるような気がして、正直に言って、気が重いところです。むしろ逆に、JADR から IADR に期待するものということで、先生方からの率直なご意見がいただけたらと思います。しかし、立場上、ご依頼を受けた以上は、何か書く義務がありますし、これまで長い間 JADR、IADR に関係して来た者として、自分が感じていたことを率直に書かせていただいて、将来、何年後か、何十年後か分かりませんが、この記念誌に目を通された方々が、2005 年頃にこんなことをいっていた男がいたんだとお笑いいただければよいかなという気持ちで責めを負うことにしたいと思います。

ご存じのように、JADR が設立されたのは、1954 年で、IADR の Division としては、AADR、British Division についで 3 番目の Division であり、現在は、AADR のつぎに会員数の多い Division になっております。しかし、JADR の会員数には、他の Division と一寸違った特徴が見られるように思います。それは、極めて、流動会員が多いことでしょう。“ 国際学会 ” と名の付く学会が海外で行われるときにみられる共通の問題点かも知れません。海外に、学会を機会に出かけ、楽しい想い出を作ろうとする動機が国際学会参加のかなりの部分を占めているからでしょうか。北米大陸での IADR、2 年〜 3 年に一度の北米大陸以外の国で開催される IADR への日本からの参加者、発表者は、他の Division の人が驚くほど、多く見られます。主催者としては、常に日本からの参加者の数を気にし、期待するところです。JADR への参加者、発表者数と比べると、海外の方が多いのではないかと思われることがあるほどです。とくに、大学院や、若手の研究者には、IADR での発表と海外旅行がセットになって、魅力のある学会になっているのかもしれません。問題は、発表が終われば次の年から会員の更新はしない方が大変多いことが、流動会員が多いということになるわけです。IADR は 1 年ごとに更新で、期限までに更新しないと自動的に退会と見なされてしまうので、つい忘れて、次の会員としての連絡の無いまま、自分でも会員のはずだけど、どうなっているのだろうと思っている方もいらっしゃるようではありますが、更新をしない会員が日本は圧倒的に多いことは驚くほどです。毎年の新入会員数の 70 % ぐらいは、(もっとかもしれません)更新をされないのではないでしょうか。それでも今のところ、1900 から 2200 名の間を増減しているというのが実状でしょう。2000 名という枠が、以外に大事なことでして、ご存じの Hatton Award の各 Division への割り当て人数が 4 名になるか、5 名になるかの境界線だからです。(1 〜 100 のメンバーから 1 名、101 〜 3000 のメンバーでは 500 名ごとに 1 名増、3000 名以上は、1000 名増ごとに 1 名増)できるだけ多くの若手の研究者が、世界に認められる場としては、絶好の機会だと思いますので、会員数の拡大は大事な課題ではないかと思います。それには、29 大学の教官、少なくとも、歯学部長、歯科大学長、教授の方々には、会員になっていただかないことには、始まらないと思います。恐らく、日本だけではないでしょうか、研究機関のトップの会員数が少ないのは。他の Division では、それぞれの Division Meeting 時に相前後して学部長会議というか、歯科大学学長会議というか、いわゆる教育学会議が開催されています。2001 年には日本でも、はじめて、その試みがなされたわけですが、その後はまた元に戻ってしまっているようですね。日本では、それぞれの分野の学会が、重要視？されているからでしょうか。それとも、トップの先生方にとって、海外の研究者との接点を求めることの意義が少ないとお考えになっているのか。実に海外の研究者にとっては誠に理解しがたい状況です。自分達の教え子や同僚の研究を、国際的に評価してもらう事への関心が薄いといわれても仕方がないでしょう。たしかに、硬組織分野での、米国の骨代謝学会とか、歯周病や、免疫学分野の国際歯周病学会？のようなその分野での評価の高い学会もありますが、他の多くの学会では、そのような対比しうる真の意味での国際学会が他にあるのでしょうか。歯科関係の雑誌でもっとも高い Imapact factor をもつ、Journal of Dental Research の母体学会に対してもう少し積極的に目を向けていただけないものかと思います。魅力がないということであれば、自分達で、会員となり、会の評議員会や理事会の構成員となって、新たな魅力ある学会への脱皮を企画していただければありがたいと思いますし、そのための役員選出規定も必要であれば改訂していくことを現 JADR 執行部も考えられたらいかがでしょうか。確かに、日本部会誕生のいきさつや、その後、30 年近くのメンバーへの入会資格の厳しさへの反発が(現各研究機関のトップの方々が歯科大学卒業前後のころでしょうか)、尾を引いているのかも知れませんが、失礼な言い方ですが、“ 井の中の蛙 ” になる可能性が、あるような気がしてなりません。

もう一つ、お願いしたいと思います。それは、ようやく、今年の JADR の Unilever/Hatton Award Travel Award Competition から始められたことですが、英語での口頭発

表をするようにしていく必要があると思います。どこの Division でも、口頭発表を含め、Official language は英語ということで、みんな頑張って発表しています。若い先生方は、これまでの日本の研究者と違って、英語で話すことに対するアレルギーは、少なくなりつつあるように思いますし、上手、下手、流暢かどうかという次元ではなく、会話をすることができるようになってきているのではないかと思います。これまで、JADR には多くの海外からの研究者が、参加されましたが、皆さんが異口同音にいわれて不思議がられたことは、「何故日本語で発表しているのか」ということでした。物事立ち止まっていては、いつまでも変わらないと思います。Hatton Award の本大会で、せっかく素晴らしい仕事を出しているのに、審査員との間のコミュニケーションがちゃんと取れないばかりに涙を呑んでいることを目の当たりにするとき、悔しさとその改善を図ろうという気持ちで胸がいっぱいになっているのは、私ばかりではないと思います。とにかく、何とかしゃべれば、相手も何とか分かろうとしてくれているのですから、努力すれば道が開けると思います。JADR の現執行部の方が、今年から、英断を下されたことを、間を空けずに、全ての発表に拡大されたらいかがでしょう。昔から、日本では、第２外国語の教育が、会話を軽視していた結果が現在の姿を生んできているのですから、小学校低学年から第２外国語の教育を始め、その教育のねらいを変えていき、その教育方針で育てられた学生が、発表者になってくるときまで、後 20 年近くかかるのかもしれませんが、今からその下地づくりに挑戦して見るのはいかがでしょう。例が良くないかも知れないのですが、最近話題になりつつある臨床専門医の制度も、今、制度を作る人たちが、自分達のレベルで、また自分達もその試験にパスしうるようなレベルの試験では、駄目なのであって、将来あるべき姿に則って、こんなに難しくては、こんなに requirement がきつくてはと思うような専門医の資格試験を準備することが、将来の専門医制度を本当に誇れる姿にすることだと言われていますが、まさに将来のあるべき姿を求めて、変革に向かって進むことが必要な時期にきているのではないでしょうか。

歯学の研究も、すでに、歯科だけの範囲ではおさまらなくなってきています。いわゆる学際的研究が求められ、その outcome も、全身の健康つくりの礎石として受け止められ、かつその要求度も高いレベルになってきているような時代です。一方、広く世界に目を向ければ、人間としての Quality of Life を求めるレベルが、まだまだ、primitive な段階にある地域が沢山あるわけで、IADR が国際学会としての歩んで行くべき二つの方向性を抱えた学会であることを理解していただき、IADR のいろいろな事業の必要性に協力していただくことを最後にお願いしておきたいと思います。

PAPF の設立と JADR への期待

PAPF 前会長，日本大学松戸歯学部生化学教室教授
安孫子宜光

2003-2004 年の間、Pan-Asia Pacific Federation の会長を務めさせていただきました。本稿では PAPF 設立の経緯について紹介させていただき、また、この紙面を借りて PAPF が JADR に期待していることの代弁をお許しいただければと存じます。

IADR 総会は２年続いて AADR で主催され、３年に１回米国以外の国で開催されてきました。IADR の歴史、巨大化した IADR 組織、AADR の実力、を考えたとき、IADR の運営が AADR 中心の運営になりなりがちであること否定できないと思います。しかし、米国から遠隔地にある国々、とくに発展途上国では学会参加の費用を捻出することは困難で、その不公平さを感じていた国、IADR 会員は決して少なくなかったと思います。そして、なりよりも各 Division, Section, Group とその会員の密接なコミュニケーションを図るための機関として地域性を考えた IADR Federation 設立の必要性が考えられたと聞いています。AADR の理解のもと、世界の５大陸をベースに、すなわち北米、南米、ヨーロッパ、アフリカ、アジアー環太平洋の５つの Federations を置く事が決められました。Pan European Federation（PEF）が先頭をきって設立され、イエテボリ IADR 総会は PEF と共催で行われ、いよいよ Federation の活動が具体的に始動しました。

PAPF は、Japan、Korea、China、Southeast Asia（SEA）, Australia / New Zealand の各 Division で構成されております。2002 年に SEA Division の Teo Choo Soo 先生が多大なご尽力をされて、実質的な準備会議として 2002 年 IADR San Diego 総会で PAPF 設立会議が開催され、当時の JADR 奥田克爾会長とこの会議に出席しました。その際、現 IADR 会長の黒田も同席されて PAPF 設立に向けて多大なご支援を頂戴しました。そして、2003 年 IADR Gothenburg 総会で現会長の大谷先生と３回目の準備会議に参加したおり最終的な Constitution Confirmation が行われました。そして IADR Council Meeting におきまして、PAPF の正式な設立が認められました。この PAPF 会議で初代 PAPF 会長として Teo Choo Soo 先生を PAPF 理事会の全員一致で選出しました。2003 年 IADR Hawaii 総会での PAPF 理事会では、PAPF 共催の 2006 年 IADR Brisbane に向けての PAPF 各 Division の協力体制について話し合われました。PAPF のなかで JADR がもっとも多い会員数を擁するという理由だけで、小生が President-Elect に任命されました。この会議でも当時の IADR 会長 John Clarkson 先生、Vice-President の黒田先生が同席して下さり有意義なご意見をいただいて、最終的な運営規則の制定と運営組織について合意が得られました。この

会議では Korean Division から 2010 年に IADR 総会を主催したいとの申し入れがあり、PAPF を挙げて協力することが決まりました。そして、本年 2005 IADR Baltimore 総会で、小生が議長を務めさせていただいて PAPF 会議を行い、2006 年 IADR Brisbane では各 PAPF Division の独自の総会を行わず IADR Brisbane の co-host を行うことで参加者を増やし全面的に協力することが承認されました。しかし残念ながら IADR 総会を米国と 1 年おきに 5 Federations で順番に行う原則の理由で、2010 年の IADR 総会 Seoul は実現しませんでした。そして、改めて Korean Division/venue Seoul、Chinese Division/venue Wuhan、SEA Division/venue Bangkok から IADR 総会開催の立候補が提出され、今後の PAPF の重要な協議事項になります。そして、次期 PAPF 会長に Rod Marshall 先生(Australia / New Zealand)、President-Elect に Im-Ho Cho 先生(Korea)が選出されました。

さて、JADR における PAPF 傘下の Division との交流については、Korean Division 総会と JADR 総会で特別講演者を交換して友好関係を築いているものの、SEA Division の諸国との交流は、ほとんど進展していないといわざるを得ません。一年間 PAPF 会長を務めさせていただいた間に、Wuhan で行われた Chinese Division 総会、タイ Kosamui 島で行われた SEA Division 総会、SEA Division 台湾総会に招待を受け、多くの知己をえることができました。この経験を通じて、PAPF に所属している国々とくに発展途上国が JADR に大きな期待をもっている空気を察する事が多々ありました。PAPF の mission として、各国の研究協力態勢の確立は当然ながら、歯科医学関連団体、健康政策ならびに歯学教育面についても意見交換を充実させて密接で有意義な国際交流の推進が挙げられています。また、発展途上国の若い研究者への支援を通じて研究の bottom-up ができるようにするのも大切でありましょう。よく有識者が、日本は発展途上国に対して膨大な金銭で支援しているが、その国民にはほとんど理解されておらず感謝もさほどされていない、と指摘していますが、援助の在り方、方法に問題があるのだと思います。私見でありますが、IADR 傘下のあらゆる団体は基本的には学術研究団体でありますから、開発途上国への支援で重要なのは安易に金銭的に補助するのでなく、開発途上国の優秀な若手研究者を育成する場をつくりだす援助を行うことがまず最優先であると思います。先ほど言及しました PAPF の mission の有意義な国際交流の推進を実現するには、当然、互いの総会時での学術交流が必要ですが、SEA, Chinese Division 総会に招待いただいたときに感じましたのは、すでに共同研究の関係がある以外は JADR からの参加がほとんどないことであります。そして海外からの JADR 総会への参加もほとんどありません。PAPF の研究者が JADR に参加してくれたとしても日本語を中心にした発表に満足させられるでしょうか？ それでは JADR 総会での発表を全て英語で行うようにしたとき総会参加者数を確保できるでしょうか？どれだけの JADR 会員が PAPF に所属する各 Division の年次総会が何時、何処で開催されているかをご存知でしょうか？現実には IADR の Website に入れば情報を得られるものの実はよく稼働していません。あるいは興味をもたれていない？難問は多いといわざるを得ませんが PAPF の有機的なつながりを何とか促進せねば PAPF 設立が無為になってしまいます。まず JADR ができることの一つに、PAPF 国際交流の使命を感じて積極的な PAPF 傘下の Division 年次総会に参加して、先端の歯科医学研究成果を直に伝えることがあります。その学会会場での学術交流から新しい門戸も開かれ JADR の PAPF での存在意義を発揮できるものと思います。

日本学術振興会は、外国人特別研究員事業を展開し、留学先の確保、研究費の援助を行い大きな成果を挙げていますが、まだまだ充分ではないといわれています。優秀な PAPF 会員の明日の歯科医学研究を担う若手研究者によい研究環境を用意することが PAPF の大きな目標でもあります。JADR を基盤として一人でも多くの PAPF 若手研究者の招聘を切にお願いいたします。

PAPF の大きな事業として、何年かごとに Scientific meeting を各 Division 国の持ち回りで、当該国の総会と共催することがあります。もちろん IADR との関係を密にしながらの Scientific meeting であります。この機会を生かして PAPF 会員の国際交流を実現できると期待しています。この実現には JADR の大きな支援が必要でありましょう。きたる 2006 IADR 総会 Brisbane, Australia では第 1 回の PAPF Scientific meeting が共催で行われます。この総会の成功は JADR からの多数の参加が鍵となります。多くの演題、学会参加を期待しております。

最後に JADR 会員の皆様には、PAPF 設立の意義をご理解戴き、国際学会としての PAPF の発展に多大なご協力を頂戴できますようお願い申し上げます。

記念式典報告

JADR 第 50 回大会記念式典報告

大阪歯科大学薬理学講座教授
大浦　　清

JADR が 1953 年に発足して第 50 回目の大会が 2002 年 11 月 30 日～ 12 月 1 日に東北大学大学院歯学研究科加齢歯科学分野の渡辺　誠教授のもと、仙台市で開催されることになり、記念式典を開催することになりました。当時、副会長であり企画委員長でもありましたので、理事会で 50 周年に相応しい企画をするように依頼されました。

1953 年高橋新次郎先生が JADR 初代会長をされ、2002 年の奥田克爾会長まで会長 21 名、副会長 11 名、理事 60 名および評議員数十名の先生方が就任されておられますが、今回この 50 回大会を記念して、この時点で歴代会長である河村洋二郎、田熊庄三郎、三浦不二夫、佐々木　哲、作田　守、山田　正の 6 名の先生方が名誉会員としておられましたので、学会功労者として 6 名の先生方を表彰させていただくことにいたしました。それとともに、50 回記念でありますので今日までの JADR の歴史を振り返りながら当時の苦労話やエピソードを交えた記念講演をしていただきたく、基礎系から河村洋二郎先生、臨床系から三浦不二夫先生、IADR の会長をされた作田　守先生の 3 名の先生方にご講演を依頼いたしましたところ快くお引き受けいただきました。会場設定は渡辺　誠大会長にお願いいたしました。

学会初日の 11 月 30 日午後 5 時 15 分より小生が司会・進行役をさせていただきました。

まず、最初にこの 50 年間に物故されました JADR の会員ならびに貢献のあった方々に対し全員で黙祷をささげました。

次に開会の式辞を始める前に所用でご欠席の IADR の John Clarkson 会長からのお祝いのメッセージをテープで流させていただきました。記念式典は以下の次第で行ないました。

JADR 第 50 回大会記念式典次第

司会・進行　大浦　清　JADR 副会長（大阪歯科大学教授）
開会の辞　奥田克爾　JADR 会長（東京歯科大学教授）

記念講演
座長　奥田克爾
1.「JADR 第 50 回大会に当たって
—過去の歩みと今後への期待—」
河村洋二郎　JADR 名誉会員
（大阪大学名誉教授）
2.「JADR“ こぼれ話 ”」　三浦不二夫　JADR 名誉会員
（東京医科歯科大学名誉教授）
3.「JADR に期待するもの」
作田　守　JADR 名誉会員・元 IADR 会長
（大阪大学名誉教授）

学会功労者表彰
代表挨拶　山田　正　JADR 名誉会員（東北大学名誉教授）

閉会の辞　渡辺　誠
第 50 回 JADR 大会長（東北大学大学院教授）

記念講演では 3 名の先生方に JADR 50 年の歩みを、貴重な、また歴史を感じさせるすばらしいお話をエピソードを交えてしていただき、さらに、これからの JADR の歩むべき道についてもお話いただきました。

学会功労者表彰では当日出席された 4 名の先生方に奥田克爾会長より今日まで学会に貢献していただいた感謝のプラークと記念品のデジタルカメラを贈呈いたしました。贈呈後、功労者を代表して山田　正名誉会員がウイットに富んだお礼の挨拶をされました。なお、当日欠席された田熊庄三郎、佐々木　哲のお二人の名誉会員の先生方には渡辺　誠大会長からプラークおよび記念品をご自宅のほうに郵送していただきました。

記念式典の最後には閉会の辞を渡辺　誠大会長に締めくくっていただきました。

2005 年には黒田敬之先生が作田　守先生以来 2 人目の IADR 会長に就任されました。この機会に、アメリカに次ぐ 2 番目の会員数を持つ JADR 会員の皆様が今後益々いろいろな分野、委員会において活躍されることを祈念いたしまして、JADR 第 50 回大会記念式典報告といたします。

JADR 各種記録

総会・学術大会開催一覧

回(年)	開　催　日	大会長	会　　場	演　題　数	参加者数
第 1 回(1954)	11 月　6 日(金)	高橋新次郎	東京医科歯科大学		
第 2 回(1955)	4 月　6 日(火)	美濃口　玄	京都大学医学部		
第 3 回(1955)	10 月 11 日(火)		箱根青雲荘	5 件	
第 4 回(1956)	10 月 13 日(土)		日本大学歯学部		
第 5 回(1957)	12 月　8 日(日)		東京医科歯科大学		
第 6 回(1958)	11 月　1 日(土)		大阪大学医学部附属病院	11 件	
第 7 回(1959)	10 月 26 日(月)		東京歯科大学	16 件	
第 8 回(1960)	11 月 14 日(月)		山の上ホテル	17 件	
第 9 回(1961)	12 月　9 日(土)		古賀の井ホテル	22 件	
第 10 回(1962)	11 月 23 日(金)		大阪大学松下会館	16 件	
第 11 回(1963)	12 月　7 日(土)		日本大学歯学部	17 件	
第 12 回(1964)	12 月　6 日(日)		日本大学歯学部	18 件	
第 13 回(1965)	12 月　5 日(日)		東京医科歯科大学	23 件	
第 14 回(1966)	12 月　4 日(日)		東京医科歯科大学	23 件	
第 15 回(1967)	12 月　3 日(日)		大阪大学歯学部	26 件	
第 16 回(1968)	11 月 16・17 日(土・日)		大阪大学歯学部	30 件	
第 17 回(1969)	11 月 22 日(土)	松宮　誠一	東京歯科大学	21 件	
第 18 回(1970)	11 月 28・29 日(土・日)	松宮　誠一	東京歯科大学	23 件	
第 19 回(1971)	12 月　4・5 日(土・日)		東京医科歯科大学	35 件	
第 20 回(1972)	12 月　9・10 日(土・日)		アジアセンター	26 件	
第 21 回(1973)	12 月　6・7 日(土・日)	船越　正也	宝塚ホテル	38 件・シンポジウム 1 題	
第 22 回(1974)	11 月 22・23 日(土・日)	川原　春幸	大阪歯科大学	38 件・シンポジウム 1 題 9 件	184 名
第 23 回(1976)	1 月 17・18 日(土・日)	大西　正男	東京医科歯科大学	41 件・シンポジウム 1 題 6 件	185 名
第 24 回(1976)	12 月　4・5 日(土・日)	須賀　昭一	日本歯科大学	50 件	222 名
第 25 回(1977)	12 月　2・3 日(金・土)	大西　正男	東京医科歯科大学	63 件・シンポジウム 1 題 6 件	254 名
第 26 回(1978)	12 月　2・3 日(土・日)	須賀　昭一	アジアセンター	65 件・討論会 1 件	204 名
第 27 回(1979)	12 月　7・8 日(金・土)	田熊庄三郎	野口英世記念館	54 件・特別講演 1 件	242 名
第 28 回(1980)	12 月　5・6 日(金・土)	高添　一郎	野口英世記念館	62 件	260 名
第 29 回(1981)	12 月　3・4 日(木・金)	小西　浩二	大阪科学技術センター	73 件	263 名
第 30 回(1982)	12 月　2・3 日(木・金)	三浦不二夫	東京医科歯科大学	79 件・特別講演 2 件	325 名
第 31 回(1983)	12 月　2・3 日(金・土)	小林　義典	日本歯科大学	100 件	344 名
第 32 回(1984)	11 月 16・17 日(金・土)	小沢　英浩	新潟郵便貯金会館	102 件	350 名
第 33 回(1985)	11 月 29・30 日(金・土)	吉田　定宏	朝日大学歯学部	141 件(O110・P31)	400 名
第 34 回(1986)	12 月　4・5 日(木・金)	三浦不二夫	東京医科歯科大学	123 件(O90・P32・SL1)	485 名
第 35 回(1987)	12 月　5・6 日(土・日)	清水　正春	鶴見大学歯学部	126 件(O100・P26)	375 名
第 36 回(1988)	12 月　2・3 日(金・土)	二階　宏昌	広島県民文化センター	160 件(O107・P51・SL2)	519 名
第 37 回(1989)	12 月　7・8 日(木・金)	池田　　正	アルカディア市ヶ谷	153 件(O96・P55・SL2)	645 名
第 38 回(1990)	11 月 29・30 日(木・金)	堀内　　博	仙台市戦災復興記念館	161 件(O99・P60・SL2)	381 名
第 39 回(1991)	12 月　5・6 日(木・金)	太田　義邦	大阪国際交流センター	173 件(O108・P62・SL3)	429 名
第 40 回(1992)	11月30日・12月1日(月・火)	佐々木　哲	日本都市センター	122 件(O74・P44・SL4)	404 名
第 41 回(1993)	12 月　2・3 日(木・金)	村山　洋二	岡山衛生会館・三光荘	157 件(O94・P53・H3・SL2・S5(1))	543 名
第 42 回(1994)	12 月　9・10 日(金・土)	作田　　守	千里ライフサイエンスセンター	142 件(O74・P58・H3・SL2・S5(1))	504 名
第 43 回(1995)	6 月 30 日(金)	山田　　正	Westin Plaza and Stamford Hotels, Singapore		
第 44 回(1996)	11 月 26・27 日(火・水)	山田　　正	裏磐梯猫魔ホテル	126 件(O48・P58・H4・SL2・S5(1)・F7(1)・L2)	259 名
第 45 回(1997)	12 月　6・7 日(土・日)	中村　　亮	徳島大学歯学部	129 件(O62・P54・H5・SL2・L1・F5(1))	281 名
第 46 回(1998)	11 月 28・29 日(土・日)	高江洲義矩	幕張メッセ	172 件(O48・P104・H5・SL2・S13(3))	389 名
第 47 回(1999)	11 月 27・28 日(土・日)	大浦　　清	神戸国際会議場	186 件(O54・P97・H5・SL2・S27(5)・L1(1))	525 名
第 48 回(2000)	12 月　2・3 日(土・日)	安孫子宜光	日本大学松戸歯学部	174 件(O72・P73・H5・SL2・S22(5))	460 名
第 49 回(2001)	6 月 29 日(金)	奥田　克爾	千葉幕張プリンスホテル	774 件	1794 名
第 50 回(2002)	11月30日・12月1日(土・日)	渡辺　　誠	仙台市情報産業プラザネット U	157 件(O42・P82・H5・SL2・S15(3)・L4(1)・PS4(1)・ML3(1))	383 名
第 51 回(2003)	12 月　1・2 日(月・火)	雫石　　聡	千里ライフサイエンスセンター	137 件(O30・P77・H5・SL3・S13(3)・L5(1)・PS4(1))	349 名
第 52 回(2004)	11 月 27・28 日(土・日)	大谷　啓一	学術総合センター	118 件(O41・P54・H5・SL3・S13(3)・L2(2))	306 名
第 53 回(2005)	11 月 26・27 日(土・日)	山本　照子	岡山大学創立 50 周年記念館	139 件(O35・P71・H5・SL3・S12(3)・L7(2)・PS5(1)・W1)	429 名

O：口頭発表，P：ポスター発表，H：Hatton Award，SL：特別講演・招待講演等，F：フォーラム，S：シンポジウム，セミナー等(カッコ内はテーマ数)，PS：市民公開シンポジウム等(カッコ内はテーマ数)，L：ランチョンシンポジウム(カッコ内はテーマ数)，W：ワークショップ，ML：50 周年記念講演

歴代学術奨励賞受賞者

回(年)	受　賞　者	
第 52 回(2004)	Bobby John Varghese	(東京医科歯科大学)
	伊藤　祥作	(大阪大学)
	伊藤理恵子	(東京歯科大学)
	庄子　幹郎	(長崎大学)
	泰江　章博	(徳島大学)
第 53 回(2005)	出口　　徹	(岡山大学)
	林　　達秀	(愛知学院大学)
	別所　央城	(東京歯科大学)

歴　代　役　員

年	会　　長	副　会　長	事務局長 / 会計担当理事	理　　事			
1954-1958	高橋新次郎		榎　　恵	美濃口　玄			
1959-1960	松宮　誠一		榎　　恵	美濃口　玄			
1961-1962	永井　　巖		榎　　恵	美濃口　玄			
1963-1964	栖原　六郎		新国　俊彦	河村洋二郎			
1965-1966	中沢　　勇		大西　正男	河村洋二郎			
1967-1968	山本　　巖		大西　正男	河村洋二郎			
1969-1970	松宮　誠一		大西　正男	河村洋二郎			
1971-1972	榎　　恵		大西　正男	河村洋二郎			
1973-1974	河村洋二郎		田熊庄三郎	大西　正男	須賀　昭一		
1975-1976	大西　正男	須賀　昭一	田熊庄三郎	川原　春幸	船越　正也		
1977-1978	大西　正男	須賀　昭一	田熊庄三郎	川原　春幸	船越　正也		
1979-1980	田熊庄三郎	森　　政和	須賀　昭一	河村洋二郎	三浦不二夫	高添　一郎	
1981	森　　政和	三浦不二夫	須賀　昭一	河村洋二郎	常光　　旭	小西　浩二	
1982	森　　政和	三浦不二夫	須賀　昭一	河村洋二郎	常光　　旭	小西　浩二	小椋　秀亮
1983-1984	須賀　昭一	小椋　秀亮	常光　　旭	田熊庄三郎 小林　義典	三浦不二夫	吉田　定宏	小沢　英浩
1985-1986	三浦不二夫	大橋　正敬	常光　　旭	吉田　定宏 亀山洋一郎	小沢　英浩	木下善之介	清水　正春
1987-1988	常光　　旭	大橋　正敬	佐々木　哲 長尾　正憲	木下善之介 見明　　清	清水　正春 堀内　　博	亀山洋一郎 二階　宏昌	作田　　守
1989-1990	大橋　正敬	見明　　清	佐々木　哲 長尾　正憲	堀内　　博 太田　義邦	二階　宏昌 岡田　　宏	池田　　正 小林　義典	石川　　烈
1991-1992	佐々木　哲	作田　　守	高江洲義矩 柳澤　孝彰	池田　　正 丸山　剛郎	太田　義邦 茂呂　　周	黒田　敬之 山田　　正	小林　義典
1993-1994	作田　　守	山田　　正	高江洲義矩 柳澤　孝彰	黒田　敬之 中村　　亮	丸山　剛郎 村山　洋二	茂呂　　周 森脇　　豊	川添　堯彬
1995-1996	山田　　正	黒田　敬之	岡田　　宏 伊集院直邦	川添　堯彬 斉藤　　毅	中村　　亮 奥田　克爾	村山　洋二 須田　英明	森脇　　豊
1997-1998	黒田　敬之	中村　　亮	岡田　　宏 伊集院直邦	奥田　克爾 南雲　正男	須田　英明 坂東　永一	大浦　　清 森本　俊文	中林　宣男
1999-2000	岡田　　宏	大浦　　清	奥田　克爾 南雲　正男	栗栖浩二郎 古賀敏比古	中林　宣男 柴　　芳樹	安孫子宜光 渡辺　　誠	亀山洋一郎
2001-2002	奥田　克爾	大浦　　清	安孫子宜光 雫石　　聰	古賀敏比古 高野　吉郎	渡辺　　誠 恵比須繁之	柴　　芳樹 山本　照子	大谷　啓一 小田　　豊
2003-2004	安孫子宜光	大谷　啓一	雫石　　聰	高野　吉郎 根本　君也	恵比須繁之 高橋　信博	山本　照子 今井　　奨	小田　　豊 中田　稔
2005-2006	大谷　啓一	小田　　豊	村上　伸也	高野　吉郎 今井　　奨 前田　伸子	山本　照子 大東　道治	根本　君也 田上　順次	高橋　信博 飯田順一郎

歴代会長

1954-1958
高橋新次郎

1959-1960
松宮　誠一

1961-1962
永井　巖

1963-1964
栖原　六郎

1965-1966
中沢　勇

1967-1968
山本　巖

1969-1970
松宮　誠一

1971-1972
榎　恵

1973-1974
河村洋二郎

1975-1976
1977-1978
大西　正男

1979-1980
田熊庄三郎

1981-1982
森　政和

1983-1984
須賀　昭一

1985-1986
三浦不二夫

1987-1988
常光　旭

1989-1990
大橋正敬

1991-1992
佐々木　哲

1993-1994
作田　守

1995-1996
山田　正

1997-1998
黒田　敬之

1999-2000
岡田　　宏

2001-2002
奥田　克爾

2003-2004
安孫子宜光

2005-2006
大谷　啓一

歴 代 評 議 員

大 学 名	1997-1998	1999-2000	2001-2002	2003-2004	2005-2006
北海道医療大学	大野 弘機	大野 弘機	東城 庸介	東城 庸介	柴田 考典
北海道大学	久保木芳徳	久保木芳徳	亘理 文夫	亘理 文夫	亘理 文夫
岩手医科大学	石橋 寛二	石橋 寛二	久保田 稔	加藤 裕久	加藤 裕久
東北大学	渡辺 誠	笹野 高嗣	笹野 高嗣	笹野 泰之	笹野 泰之
奥羽大学	堀内 登	堀内 登	堀内 登	堀内 登	堀内 登
明海大学	上羽 隆夫	上羽 隆夫	加藤 節子	藤澤盛一郎	渡部 茂
日本大学松戸歯学部	安孫子宜光	古山 俊介	山崎 宗与	前田 隆秀	前田 隆秀
東京医科歯科大学	大谷 啓一	大谷 啓一	田上 順次	田上 順次	三浦 宏之
東京歯科大学	柳澤 孝彰	柳澤 孝彰	内山 健志	井上 孝	井上 孝
日本歯科大学	丹羽 源男	丹羽 源男	相山 誉夫	筒井 健機	筒井 健機
日本大学	茂呂 周	大塚吉兵衛	大塚吉兵衛	松村 英雄	松村 英雄
昭和大学	山田 庄司	玉置 幸道	玉置 幸道	佐藤 裕二	佐藤 裕二
神奈川歯科大学	梅本 俊夫	梅本 俊夫	梅本 俊夫	久保田英朗	久保田英朗
鶴見大学	千葉 元丞	川崎 堅三	深江 允	深江 允	朝田 芳信
新潟大学	岩久 正明	岩久 正明	岩久 正明	前田 健康	前田 健康
日本歯科大学新潟歯学部	小倉 英夫	加藤 喜郎	加藤 喜郎	加藤 喜郎	加藤 喜郎
松本歯科大学	原田 實	五十嵐順正	伊藤 充雄	藤村 節夫	上松 節子
朝日大学	山本 宏治	山本 宏治	山本 宏治	山本 宏治	山本 宏治
愛知学院大学	亀山洋一郎	中垣 晴男	中垣 晴男	中垣 晴男	中垣 晴男
大阪歯科大学	川本 達雄	諏訪 文彦	諏訪 文彦	大東 道治	西川 泰央
大阪大学	高田 健治	前田 芳信	前田 芳信	高田 健治	高田 健治
岡山大学	渡邊 達夫	渡邊 達夫	渡邊 達夫	渡邊 達夫	窪木 拓男
広島大学	濱田 泰三	濱田 泰三	濱田 泰三	濱田 泰三	濱田 泰三
徳島大学	浅岡 憲三	浅岡 憲三	浅岡 憲三	森山 啓司	森山 啓司
九州歯科大学	小園 凱夫	小園 凱夫	小園 凱夫	小園 凱夫	福山 宏
九州大学	中田 稔	中田 稔	中田 稔	花澤 重正	山下 喜久
福岡歯科大学	阿部 公生	阿部 公生	阿部 公生	阿部 公生	本川 渉
長崎大学	加藤 伊八	加藤 有三	熱田 充	熱田 充	熱田 充
鹿児島大学	井上 昌一	井上 昌一	鳥居 光男	鳥居 光男	和泉 雄一
国立感染症研究所	西原 達次	今井 奨			
山形大学	柴田 考典	柴田 考典	柴田 考典		
国立保健医療科学院			今井 奨		
京都大学				村上賢一郎	
慈恵医科大学					杉崎 正志

歴代名誉会員

名 誉 会 員	
岡田 宏	河村洋二郎
黒田 敬之	作田 守
佐々木 哲	田熊庄三郎
三浦不二夫	山田 正
(以下物故)	
榎 恵	大西 正男
須賀 昭一	常光 旭
松宮 誠一	森 政和

歴代終身会員

終 身 会 員		
相田 英孝	青野 正男	雨宮 璋
池田 正	石田 甫	一色 泰成
伊藤 学而	井上 清	井上 直彦
井上 昌一	猪木 令三	岩久 正明
上羽 隆夫	大森 郁朗	奥野 善彦
小椋 秀亮	小澤 英浩	覚道 幸男
桂 暢彦	川原 春幸	神澤 康夫
菅野 義信	桐野 忠大	窪田金次郎
栗栖浩二郎	坂田 三弥	佐川 寛典
末田 武	鈴木 文雄	須田 立雄
高江洲義矩	高添 一郎	高橋 純造
竹内 光春	谷 明	谷 嘉明
千野 武廣	中井 宏之	中沢 勇
中村 武	中村 嘉男	中村 亮
西田 健	荷宮 文夫	花田 晃治
原 耕二	松江 一郎	松本 光生
南 直臣	森 昌彦	森本 俊文
森本 基	森脇 豊	山上 哲贇
吉岡 済	吉木 周作	吉田 定宏
吉田 穣	吉田 洋	渡辺 継男
渡辺 義男		
(以下物故)		
秋吉 正豊	荒谷 真平	石川 梧朗
石川 純	今川 与曹	上野 正
神沢 康夫	菊池 進	鈴木 賢策
永井 巖	新国 俊彦	総山 孝雄
松下 義雄	山下 浩	山田 守
山本 巖	横田 成三	

歴代 KADR 派遣者

回(年)	開 催 日	派 遣 者		
第 1 回(1983)				
第 2 回(1984)				
第 3 回(1985)				
第 4 回(1986)				
第 5 回(1987)				
第 6 回(1988)				
第 7 回(1989)	1 月	大橋 正敬	佐々木 哲	
第 8 回(1990)	1 月 19 日・20 日	二階 宏昌	長尾 正憲	作田 守
第 9 回(1991)	1 月 18 日・19 日	太田 義邦	堀内 博	
第 10 回(1992)	1 月 17 日・18 日	山田 正	小林 義典	
第 11 回(1993)	1 月 15 日・16 日	柳澤 孝彰		
第 12 回(1994)	1 月 21 日・22 日	黒田 敬之		
第 13 回(1995)	1 月 20 日・21 日	高江洲義矩		
第 14 回(1996)	1 月 26 日・27 日	中林 宣男		
第 15 回(1997)	1 月 22 日・23 日	岡田 宏		
第 16 回(1998)	1 月 23 日・24 日	栗栖浩二郎	作田 守	
第 17 回(1999)	1 月 22 日・23 日	高田 隆		
第 18 回(2000)	1 月 21 日・22 日	大隅 典子	黒田 敬之	
第 19 回(2000)	12 月 15 日・16 日	安孫子宜光		
第 20 回(2001)	12 月 14 日・15 日	永井 教之		
第 21 回(2002)	12 月 13 日・14 日	大浦 清		
第 22 回(2003)	12 月 12 日	雫石 聰		
第 23 回(2004)	12 月 10 日	大谷 啓一		
第 24 回(2005)	11 月 29 日・30 日	小田 豊		

IADR 各種記録

Past IADR Unilever Division Travel Awards Recipients

1988	飯田順一郎	東京医科歯科大学
1989	田上　順次	東京医科歯科大学
1994	宮脇　正一	大阪大学
	高橋　信博	東北大学
	山口　康昭	東京歯科大学
1995	松本　芳郎	東京医科歯科大学
	松本啓次郎	東京医科歯科大学
	林　丈一朗	東京医科歯科大学
1997	石橋　浩晃	九州大学
	野崎　剛徳	大阪大学
	高柴　正悟	岡山大学
	山本　　寛	東京医科歯科大学
	小野　卓史	東京医科歯科大学
1998	本間　聖進	東京歯科大学
	横関　雅彦	東京医科歯科大学
	近藤　尚知	東京医科歯科大学
	何　　涛	東京医科歯科大学
	安細　敏弘	九州歯科大学
1999	飯村　忠浩	東京医科歯科大学
	明貝　文夫	岡山大学
	船戸　紀子	東京医科歯科大学
	W. R. Duarte	東京医科歯科大学
	斉藤　隆史	北海道医療大学
2000	牧平　清超	広島大学
	檜山　成寿	東京医科歯科大学
	米澤　英雄	東京歯科大学
	橋川　智子	大阪大学
	大山　秀樹	岡山大学
2001	福本　敏	長崎大学
	今谷　哲也	東京歯科大学
	B. Linsuwanont	東京医科歯科大学
	岩崎　剣吾	東京医科歯科大学
	高山　真一	大阪大学
2003	西　真寿美	徳島大学
	吉田　明弘	九州大学
	加来　真人	広島大学
	半田　慶介	神奈川歯科
	金子　友厚	東京医科歯科大学
2004	土井　健義	広島大学
	品川　英朗	東京医科歯科大学
	堤　　聡	徳島大学
	管崎　弘幸	東北大学
	小出　雅則	愛知学院大学
2005	前田　恵子	東京医科歯科大学
	西田　伸子	大阪大学
	上原亜希子	東北大学
	山城　圭介	岡山大学
	米野　　潔	広島大学
2006	谷川　千尋	大阪大学
	郡司掛香織	九州歯科大学
	横井　隆政	神奈川歯科大学
	坂上　直子	新潟大学
	宮本　　順	東京医科歯科大学

Past IADR Science Awards Recipients

IADR Distinguished Science Awards Recipients

- **Basic Research in Periodontal Disease Award**
  - 1998 Hiroshi Okada
  - 2002 Yoji Murayama
- **Basic Research in Biological Mineralization Award**
  - 1972 Shosaburo Takuma
  - 1990 Shoichi Suga
  - 1992 Satoshi Sasaki
  - 2004 Yoshiro Takano
- **Research in Prosthodontics & Implants Award**
  - 1976 Yojiro Kawamura
  - 1999 Taizo Hamada
  - 2004 I. Nishimura
- **Wilmer Souder Award**
  - 1982 Takao Fusayama
  - 1994 Nobuo Nakabayashi
  - 1999 T. Okabe
- **Young Investigator Award**
  - 2002 Sumie Yoneda — Implantology Research Group
  - 2005 Takafumi Kato

David B. Scott Student Research Fellowship

- 1995 Sachiko Takikita

IADR/Colgate Research in Prevention Award

- 1999 Shoji Horiguchi
- 2003 Towako Wakui
- 2004 Akihisa Fukuda
- 2005 Rahena Akther

IADR/Lion Dental Research Award for Young Investigaters

- 2001 Y. Kitasako — Cariology
- 2002 Towako Wakui — Oral Health Research
- 2003 Hiroyuki Tada — Microbiology/Immunology
- 2005 Salunya Tancharoen

Norton M. Ross Fellowship

- 2004 Aiko Nakasone

IADR/AADR William J. Gies Award

- 1996 Yutaka Matsuki *et al.*
- 2004 K. Kohama *et al.*
- 2004 Minoru Onozuka *et al.*

IADR/Unilever Hatton Awards Competition

- 1978 Makoto Sato — 1st Prize, Post-Doctoral
- 1988 Junichiro Iida — 1st Prize, Post-Doctoral
- 2002 Hiroshi Egusa — 1st Prize, Senior
- 2003 Keisuke Handa — 2nd Prize, Senior

Arthur R. Frechette Research Award Competition

- 2004 V. Rutkunas *et al.* — 1st Prize
- 2004 Hiroshi Egusa *et al.* — 1st Prize

Past IADR Board of Directors & Committees Members

1963-1964	Seiichi Matsumiya (1969)	International Relationship Committee
1967-1968	F. Shibata	Local Arrangements Committee
1969-1970	Masao Onisi (1978)	International Relations Committee
	Masao Onisi	IADR History Ad Hoc Committee
1970-1971	Masao Onisi	IADR History Ad Hoc Committee
1979-1980	Yojiro Kawamura	Member-at-Large
	Kinichi Horii	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Koji Konishi	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Motoi Morimoto	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Toshio Morioka	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Yoshinori Takaesu	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Shosaburo Takuma	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Akira Tsunemitsu	Committee on Health Promotion (Japanese)
	Masao Onisi	Eighth ICOB Program Committee
	Yojiro Kawamura	Ad Hoc Committee on International Meetings
	Yojiro Kawamura	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Zennosuke Kinoshita	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Masahiko Mori	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Masakazu Mori	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Mamoru Sakuta	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Shoichi Suga	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Akira Tsunemitsu	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Shosaburo Takuma	Local Arrangements Committee 1980 (Japan)
	Yojiro Kawamura	Prosthodontics Research Award Committee
1981-1982	Yojiro Kawamura	Prosthodontics Research Award Committee
1984-1985	Ichiro Takazoe (1985)	Hatton Awards Committee
	Hideo Onose (1987)	International Relations Committee
	Shoichi Suga (1986)	Nominating Committee
	Shoichi Suga (1985)	Progress in Research Committee
	Goro Hirai (1987)	Progress in Research Committee
	Yoshinori Takaesu	Science Information Transfer (Japanese)
1985-1986	Fujio Miura (1988)	Member-at-Large
	Fujio Miura (1986)	Information Resources Committee (Japanese)
	Takao Fusayama (1987)	Wilmer Souder Award Committee
1987-1988	Hiroshi Okada (1990)	Nominating Committee
	Akira Tsunemitsu	Information Resources Committee (Japanese)
	Eiko Sairenji (1989)	Young Investigator Awards Committee
1989-1990	Satoshi Sasaki (1991)	Member-at-Large
	Isao Ishikawa (1990)	Constitution Committee
	Tadashi Yamada (1992)	Young Investigator Awards Committee
1990-1991	Ichiro Takazoe (1993)	FDI Programs Advisory Committee
	Takao Maruyama (1993)	Nominating Committee
	Shoichi Suga (1995)	Basic Research in Biological Mineralization Award Committee
	Takao Fusayama (1992)	Research in Oral Biology Award Committee
1992-1993	Yoshinori Takaesu (1995)	Ethics in Dental Research Committee
	Masayoshi Ohashi (1994)	Membership and Recruitment
	Toru Okabe (1994)	Visiting Lecture Program Committee, Chair
	Satoshi Sasaki (1995)	Young Investigator Award Committee
	Shoichi Suga (1993)	Joint IA/AA Publications Committee
	Hiroshi Horiuchi	ad hoc Long-range Planning Committee
	Toru Okabe (1993)	ICOB Planning Committee
	Shoichi Suga (1995)	Basic Research in Biological Mineralization Award Committee
1993-1994	Satoshi Sasaki (1997)	Basic Research in Biological Mineralization Award Committee
1994-1995	Tadashi Yamada (1997)	Edward H. Hatton Awards Committee
	Yoshinori Takaesu (1995)	Ethics in Dental Research Committee
	Minoru Nakata (1996)	FDI Liaison Committee
	Takao Maruyama (1996)	IADR/AADR Joint Exhibits Committee
	Ryo Nakamura (1996)	Membership and Recruitment Committee
	Hiroshi Okada (1997)	Nominating Committee
	Nobuo Nakabayashi (1999)	Wilmer Souder Award Committee
1995-1996	Ryo Nakamura (1996)	Membership and Recruitment Committee
	Hiroshi Okada (1997)	Nominating Committee, Chair
1996-1997	Mamoru Sakuda	Vice-president
	Mamoru Sakuda (1999)	Annual Session Committee
	Takayoshi Kawazoe (1999)	Constitution Committee
	Kiyoshi Ohura (1999)	Ethics in Dental Research Committee
	Mamoru Sakuda (1999)	Finance Committee

1997-1998	Mamoru Sakuda	President-elect
	Mamoru Sakuda (1999)	Annual Session Committee, Chair
	Takaaki Yanagisawa (2000)	IADR/AADR Joint Exhibits Committee
	Shigeyuki Ebisu (2000)	ICOB Planning Committee
	Yoshinori Kobayashi (2000)	Membership and Recruitment Committee
	Kojiro Kurisu (2000)	Nominating Committee
	Nobuo Nakabayashi (2000)	Young Investigator Award Committee
	Hideaki Suda (2000)	Fellowships Committee
1998-1999	Mamoru Sakuda	President
	Takayuki Kuroda	Member-at-Large
	Masaki Yanagishita (2001)	Edward H. Hatton Awards Committee
	Masao Nagumo (2000)	IADR/AADR Joint Publication Committee
	Hideaki Suda (2000)	Fellowships Committee
	Sadami Tsutsumi (2001)	Joint Technology & Communications Committee
1999-2000	Takayuki Kuroda (2001)	Member-at-Large
	Mamoru Sakuda	Immediate Past President
	Katsuji Okuda (2002)	Constitution Committee
	Hiroshi Okada (2002)	Ethics in Dental Research Committee
	Mamoru Sakuda (2002)	Honorary Membership Committee
	Kazuo Hirota (2002)	IADR/AADR Joint Exhibits Committee
	Masaaki Iwaku (2002)	IADR/AADR Joint Exhibits Committee
	Mamoru Sakuda (2000)	Nominating Committee
	Nobuo Nakabayashi (2000)	Young Investigator Award Committee, Chair
	Takashi Hanioka	ad hoc Tobacco Committee
2000-2001	Takayuki Kuroda (2001)	Member-at-Large
	Yoshio Kozono (2003)	IADR/AADR Joint Exhibits Committee
	Kiyoshi Ohura (2003)	IADR/AADR Joint Exhibits Committee
	Satoshi Shizukuishi (2003)	Nominating Committee
	Toshihiko Koga (2003)	Young Investigator Award Committee
	Haruo Ishikawa (2003)	Fellowships Committee
	Takashi Hanioka	ad hoc Tobacco Committee
2001-2002	Mamoru Sakuda (2002)	Honorary Membership Committee, Chair
	Takashi Takata (2004)	IADR/AADR Joint Publication Committee
	Takashi Hanioka	ad hoc Tobacco Committee
	Yoshimitsu Abiko (2004)	Joint Technology & Communications Committee
2002-2003	Teruko Takano-Yamamoto (2005)	Constitution Committee
	Yoji Murayama (2005)	IADR/AADR Publication Committee
	Keiichi Ohya (2005)	Membership and Recruitment
	Hiroshi Okada (2004)	Research in Periodontal Disease Award Committee
	Takashi Hanioka	ad hoc Tobacco Committee
2003-2004	Takayuki Kuroda	Vice-president
	Takayuki Kuroda (2006)	Annual Session Committee
	Yukata Oda (2006)	Ethics in Dental Research Committee
	Takayuki Kuroda (2006)	Finance Committee
	Takashi Takata (2006)	IADR/AADR Publications Committee
	Takayuki Kuroda (2004)	William J. Gies Award Committee
	Takashi Hanioka	ad hoc Tobacco Committee
	Shigeyuki Ebisu (2006)	Young Investigator Award Committee
2004-2005	Takayuki Kuroda	President-elect
	Takayuki Kuroda (2006)	Annual Session Committee, Chair
	Nobuhiro Takahashi (2007)	Fellowships Committee
	Yoshiro Takano (2007)	Unilever/Edward H. Hatton Awards Committee
	Keiichi Ohya (2005)	Membership and Recruitment Committee, Chair
	Kiyoshi Ohura (2007)	Nominating Committee
	Katsuji Okuda (2007)	Regional Development Program Committee
	Takashi Hanioka	ad hoc Tobacco Committee
2005-2006	Takayuki Kuroda	President
	Satoshi Shizukuishi (2008)	Constitution Committee
	Yoshiro Takano (2007)	Unilever/Edward H. Hatton Awards Committee, Cair
	Shinya Murakami (2008)	William J. Gies Award Committee
	Junji Tagami (2008)	Membership and Recruitment Committee
	Takashi Hanioka	ad hoc Tobacco Committee
	Yoshiro Takano (2009)	Basic Research in Biological Mineralization Award Committee
	Yoji Murayama (2008)	Basic Research in Periodontal Disease Award Committee
	Ichiro Nishimura (2009)	Research in Prosthodontics & Implants Award Committee
	Toru Okabe (2006)	Wilmer Souder Award Committee

Past IADR Scientific Group Officers

1975-1976	Yojiro Kawamura	Neuroscience Group	Director
1986-1987	Yukio Kakudo	Prosthodontics Research Group	Director
1987-1988	Fujio Miura	Craniofacial Biology Group	Director
	Masayoshi Ohashi	Dental Materials Group	Secretary
	Eiko Sairenji	Implantology Research Group	Director (Japanese)
	Yukio Kakudo	Prosthodontics Research Group	Director
1988-1989	Yukio Kakudo	Prosthodontics Research Group	Director
1989-1990	Eiko Sairenji	Implantology Research Group	Director (Japanese)
1990-1991	Masayoshi Ohashi	Dental Materials Group	President-Elect
1991-1992	Masayoshi Ohashi	Dental Materials Group	President
1992-1993	Takayuki Kuroda	Craniofacial Biology Group	Director
	Masayoshi Ohashi	Dental Materials Group	Immadiate Past President
1995-1996	Yoshiaki Tani	Dental Materials Group	President
1996-1997	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	Secretary/Treasurer
1997-1998	Hiroshi Okada	Periodontal Research Group	Treasurer
	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	Secretary/Treasurer
1998-1999	Hiroshi Okada	Periodontal Research Group	Vice-president
	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	Secretary/Treasurer
	Masaki Shimono	Pulp Biology Group	Vice-president
1999-2000	Hiroshi Okada	Periodontal Research Group	President-Elect
	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	Secretary
	M. Shimono	Pulp Biology Group	President-Elect
2000-2001	Yuzuru Kaneko	Dental Anesthesiology Research Group	President
	Hideki Furuya	Dental Anesthesiology Research Group	Secretary/Treasurer
	Hiroshi Okada	Periodontal Research Group	President
	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	President-Elect
2001-2002	Hideki Furuya	Dental Anesthesiology Research Group	Secretary/Treasurer
	Hiroshi Nakajima	Dental Materials Group	Secretary
	I. Nishimura	Prosthodontics Research Group	President
2002-2003	Masaki Kambara	Cariology Research Group	President-Elect
	Mikiko Yamashiro	Dental Anesthesiology Research Group	Vice-president
	Hideki Furuya	Dental Anesthesiology Research Group	Secretary/Treasurer
	Hiroshi Nakajima	Dental Materials Group	Secretary
	Y. Matsuda	Diagnostic Systems Group	Councilor
2003-2004	Masaki Kambara	Cariology Research Group	President
	Mikiko Yamashiro	Dental Anesthesiology Research Group	President-Elect
	Hideki Furuya	Dental Anesthesiology Research Group	Secretary/Treasurer
	Hiroshi Nakajima	Dental Materials Group	Secretary
	Y. Matsuda	Diagnostic Systems Group	Councilor
2004-2005	Masaki Kambara	Cariology Research Group	Immadiate Past President
	Mikiko Yamashiro	Dental Anesthesiology Research Group	President
	Hideki Furuya	Dental Anesthesiology Research Group	Secretary/Treasurer
	Hiroshi Nakajima	Dental Materials Group	President-Elect
	Satoshi Imazato	Dental Materials Group	Secretary
	Ryuji Hosokawa	Implantology Research Group	Director-at-Large

JADR 年表

1954 年	11 月	IADR 本部より IADR の Japanese Division として承認を受け日本支部結成式を開催。設立当初会員数は 16 名。初代会長高橋新次郎教授(東京医科歯科大学)。
1955 年	4 月	京都大学にて初めて学術大会を開催。
1960 年	11 月	このころ会員数は 22 名。
1970 年	11 月	このころ会員数は 112 名。
1972 年	12 月	年会費を 500 円から 1,000 円に値上げ。
1973 年	1 月	このころニュースレターの発行を開始。 事務局を東京歯科大学病理学教室第一講座に移転。
	12 月	具体的運営事項を定めた Bylaws (細則)を承認。
1974 年	11 月	初めて名誉会員を推戴。 年会費を 1,000 円から 2,000 円に値上げ。
1978 年	3 月	第 56 回 IADR 総会(Washington)にて第 58 回 IADR 総会を大阪にて開催することが決定。
	12 月	終身会員を新設。
1979 年	1 月	事務局を日本歯科大学病理学教室に移転。
1980 年	10 月	このころ会員数は正会員 617 名、名誉会員 4 名、賛助会員 7 社。
	6 月	第 58 回 IADR 総会を大阪にて盛大に開催。
	12 月	The Japanese Division of the IADR から Japanese Association of Dental Research への名称変更を決議。
1981 年	3 月	第 59 回 IADR 総会にて Japanese Association of Dental Research への名称変更が決定。
	12 月	名称変更にともない会則を改定。初めて終身会員を推戴。
1982 年	12 月	30 周年記念式典を盛大に開催。
1983 年	1 月	事務局を大阪大学歯学部予防歯科学講座に移転。
	4 月	過去の会長経験者で構成する President Committee 運営規定を承認。
	12 月	初めて President Committee を開催。
1984 年	11 月	年会費を 2,000 円から 3,000 円に値上げ。
1985 年	11 月	第 33 回学術大会・総会にて業者展示を開始。
1987 年	1 月	事務局を東京医科歯科大学歯学部生化学構座に移転。これまで一人が担っていた事務局長と会計担当理事の職務を分担。理事数を 5 名から 7 名に増員。
1988 年	7 月	JADR 役員と KADR 役員が東京にて会談。両部会総会時に互いに役員を招待するなど友好的関係を築いていくことを確認。
	12 月	第 36 回学術大会・総会に KADR より役員を招待。
1989 年	1 月	第 7 回 KADR 総会へ招待を受け JADR 役員を派遣。
1990 年	10 月	このころ会員数は正会員 1,129 名、名誉会員 3 名、終身会員 20 名、賛助会員 7 社。
1991 年	1 月	事務局を東京歯科大学口腔衛生学講座に移転。
1992 年	7 月	第 70 回 IADR 総会(Glasgow)にて第 79 回 IADR 総会を千葉幕張にて開催することが決定。
1995 年	1 月	事務局を財団法人日本学会事務センター大阪事務所に移転。
	4 月	Newsletter をこれまでの B5 判から現行の A4 判にリニューアル。
1996 年	11 月	会則を大幅に改定。評議員を新設。理事数を 7 名から 8 名内外に増員。年会費を 3,000 円から 5,000 円に値上げ。
1997 年	12 月	初めて評議員会を開催。
1998 年	6 月	作田守名誉教授(大阪大学)が日本人初の IADR 会長に就任。
2000 年	9 月	このころ会員数は正会員 2,122 名、名誉会員 4 名、終身会員 41 名、賛助会員 16 社。
2001 年	6 月	第 79 回 IADR 総会を千葉幕張にて盛大に開催。2002 年度より IADR/JADR 会員の年会費を IADR 本部が徴収することが決定し年会費は 5,000 円から 50 ドルへ。IADR には所属せず JADR のみに所属する部会員を新設。
2002 年	12 月	50 周年記念式典を盛大に開催。 学生会員を新設。事務局長を廃し副会長に一本化。
2003 年	6 月	第 81 回 IADR 総会にて Pan-Pacific Asia Federation (PAPF)の設立が決定。
	12 月	第 51 回総会より評議員会を同時開催。
2004 年	3 月	安孫子宜光教授(日本大学松戸歯学部)が PAPF 会長に就任。
	11 月	事務局を株式会社コネットに移転。第 52 回学術大会・総会にて学術奨励賞の授与ならびに Hatton Awards 候補者の英語による発表を開始。
2005 年	3 月	黒田敬之名誉教授(東京医科歯科大学)日本人 2 人目の IADR 会長に就任。

50 周年記念誌「JADR のあゆみ」編集後記

JADR は 2002 年に 50 周年をむかえました、当時 JADR 会長 (2001~2002 年) であった私が記念誌を発行すべき責任がありました。安孫子宜光会長 (2003-2004) の理事会で、50 周年の記録を作ることが決定し、私が編集委員長として下記の内容を提案させて頂き、原稿依頼を致しました。「JADR のあゆみ」とした記念誌になりました。編集に不慣れでしたが、集まった原稿は素晴らしいものばかりで、発行まで自分がいろいろのことを学ぶことができました。

1. 現会長挨拶
2. 名誉会員ならびに元会長のメッセージ
3. JADR 関連する事柄として 1）総会、学術大会リスト、2）歴代理事会メンバーリスト、3) 韓国への派遣者リスト、4）名誉会員、終身会員リスト、5) JADR 学術奨励賞受賞者リスト、6) ニュースレター発行記録、7) 50 周年記念式典記録について
4. IADR 関連する事柄として 1) IADR 各賞受賞者（Hatton Awards Travel 受賞者含む)、2) 歴代 JADR からの IADR Committees 参加者リスト、3) 歴代 JADR からの Scientific Group 役員リスト、4) IADR General Session in Osaka (1980) and Chiba (2001)、5) Pan-Asian-Pacific Federation と IADR の関係について

集まった原稿には、どんどん引きつけられ今までない感銘を受けました。河村洋二郎先生、田熊庄三郎先生、三浦不二夫先生、佐々木　哲先生、作田　守先生、山田　正先生、黒田敬之先生、岡田　宏先生の原稿を読んで、本誌発行の意義はあったと確信しました。名誉会員 8 名の先生の JADR, IADR への熱い思いと人脈をひしひしと感じています。次世代へのメッセージにもみられる研究者としての「夢」に溢れた原稿に JADR, IADR に関われたことに幸福感さえ持ちました。特に、JADR からの初代 IADR 会長作田先生の全貌を捉えての緻密な原稿から、人の交流が世界をリードすることを教えられています。

記録を中心とした内容からは、IADR において JADR が歯科医学研究のリードしていることを読み取って頂けると思う。名誉会員を中心とした諸先輩の高邁で熱い思い入れがあったからこそを胸に刻み込んでいます。学術大会での世界各国研究者との連携などは、これからの JADR の発展におおいに参考になる記念誌になったと思っています。JADR 発足時や一時期の議事録などがなかったことから、年表づくりに名誉会員に電話などをかけながら調べてまとめました。間違いなどがありましたら、ぜひご連絡ください。本記念誌は、JADR のホームページ（http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/）にも掲載しますので、訂正について随時掲載させていただきます。

最後に、崇高な原稿を送って頂いた諸先生に感謝の意を表します。また、JADR 記念誌編纂事務局とりわけ木村雄一郎さんの資料の収集と整理があって発行できたことを付記しておきます。

50 周年記念誌「JADR のあゆみ」編集委員長　奥田克爾

50 周年記念誌「JADR のあゆみ」

発行日　平成 18 年 2 月 20 日
発　行　国際歯科研究学会日本部会 (JADR)
〒 532-0011　大阪市淀川区西中島 5-5-15　新大阪セントラルタワー 8F
(株) コネット　アカデミックプラザ内
Tel.06-4806-5656　Fax.06-4806-5658
編　集　奥田克爾
制　作　(株) コネット　制作部